

---

# 荒神な鬼神

グレイプニル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

荒神な鬼神

### 【Nコード】

N2106L

### 【作者名】

グレイプニル

### 【あらすじ】

『彼』は願った。「生きたい」と。そして『彼』は世界を越えた。そして『彼』が辿りついた世界は・・・

## プロローグ（前書き）

初投稿ですが、よろしくお願ひします。

## プロローグ

何も無い荒れ果てた大地。生物の影も形もない、その大地に1つの動く物体があった。

黒く巨大な塊、サソリに似ているが尾の部分が剣の形をしていて、両手のハサミは巨大な口のように見える。この生物は『第一種接触禁忌アラガミ』に分類される『スサノオ』である。

しかし、そのスサノオは死にかけていた。

剣は折れ、手の口はボロボロの状態で脚を引きずっていた。さらに全身に穴や切り傷があり、体中から血を流していた。

このスサノオは、街でゴッドイーターたちと戦闘をし逃げてきたのであった。

スサノオは理解していた。自分はもうすぐ死ぬということ。そして、ついに脚が折れて動くことができなくなってしまった。

スサノオは思った。

『生きたい』と。

そして、彼は死んだ。

全身を光につつまれながら。

## 目覚め(前書き)

ようやく一話目が、できました。主人公の設定はもう少ししてから  
だします。

## 目覚め

とある山奥の森の中で奇妙な現象が起きていた。巨大な光の玉が突然出現したのである。そして、光の玉はゆっくりと消えていった。

その消えた光の玉の中から現れたのは、『彼』スサノオであった。『彼』は、気絶していた。街で戦ったときの傷が重かったからである。

そして彼は、そのまま三日間眠っていた。

四日目、『彼』は、少しだけ眼を開けた。が、また眼をすぐ閉じてしまった。そしてそのまま、眠りについた。

五日目、また少しだけ眼を開けた。が、またもすぐに眼を閉じて眠ってしまった。『彼』の傷はもうすでにほとんど治っていた。

六日目、傷は完治した。が、『彼』は眠っていた。『彼』のこの行動は、人でいう所の情眠である。そのまま時間が過ぎて一ヶ月がたった。

『彼』が、この世界に来てから一ヶ月がたった。ようやく『彼』は、起き上がった。そして、最初に自分の体の異変に気が付いた。

自身のアラガミ細胞に異変が生じていたのである。体の中の細胞に知らない細胞が、大量に存在していたのである。その細胞は他のアラガミの細胞のもの、見たこともないものと多種に渡って存在していた。『彼』は、困惑した。

さらに、今の状況も理解できなかった。自分が最後に見た風景は何もない荒れ果てた大地だった。しかし、今いる場所は、明らかに違う場所だった。周りに木など生えているはずもなく、空を飛んでいる鳥などいなかった。

とりあえず『彼』は、今いる所から移動をはじめた。

移動をはじめてから『彼』は、気付いたことがあった。それは食欲かあまり湧かないということだった。本来アラガミは、なんでも食らいつくすはずなのに今の自分は獲物を少し食べるだけですぐに満足してしまうのである。

『彼』は、そのまま移動を続けた。

そんな生活を続けて二ヶ月がたったある日のこと。

いつものように森の中を移動していた時、前方の開けた平原で戦闘が起きていた。別に珍しいことでもなく『彼』も何度か見かけ、そこに獲物をとりに行ったことさえあった。戦っているものたちは、いつも剣か弓しか使っていなかった。

しかし、その日は、違っていた。一方は、剣と弓を装備した人間だがもう一方は、異形の集団だった。『彼』は知らないが、それは鬼と呼ばれるものたちだった。

戦いは、異形の集団の方が有利だった。数も多く、力も彼らの方が強かった。

『彼』は、遠くからそれを見ていた。そして彼らから目が離せなかった。いや、離せられないのであった。なぜなら、今まで忘れていた食欲が彼らを見た途端に戻ってきたのである。

そして、『彼』は戦場にむけて走りだした。



## 目覚め（後書き）

次回、やっと戦闘がかけるので頑張っていこうと思います。

## 最初の食事（前書き）

ネギま本編に早く入りたいな！。

しばらく過去編なので、まったくキャラがでません。

## 最初の食事

Side 兵士

我々は朝廷の命をうけて飛驒の地方で暴れている鬼を討伐するため  
にきた。

戦況はあまりよくない。

鬼の軍勢は約四万、それに対して我々は約二万二千。戦力差もさる  
ことながら力にも差があつた。

鬼が金棒を振れば四、五人が宙を舞い、翼の生えた鬼は空から槍で  
攻撃をしかけてきて、お面をかぶった鬼は目で捉えることができな  
い速さで兵たちの間を駆け抜け、手に着けた爪で切り付けている。

我々は一体を三人掛かりで相手にしながら後退をしていた。

援軍がこちらに向かっているらしいがこのままでは押し切られてし  
まう。

その時、鬼の一匹がこちらに向かってきた。手に持っている爪をま  
つすぐと私に向けて突撃をしかけてきた。

あまりの速さに避けることはできそうもなかった。

私が死を覚悟したとき、戦場に咆哮が響き渡った。

Side OUT

『彼』は、戦場全体に響き渡るほどの叫びをあげた。その場にいた

全てのものが『彼』を見た。

『彼』は 狂喜していた。  
今まで鳴りを潜めていた食欲が、鬼を見た途端に戻ってきたのである。

『彼』は、まっすぐに近くの鬼に向かって駆けだした。

まっすぐに向かってくる『彼』を見て、正面に立っていた鬼は構えをとって待ち構えていた。

近くまできた瞬間、手に持っている金棒を脚に向けて振り下ろしてやる。

と、鬼は考えていた。

しかし、それはかなわなかった。

『彼』が手の口を広げて地面を削りながら伸ばしてきたのである。  
鬼は慌てて躲そうとするが間に合わなかった。

そのまま鬼は手の口の中に吞まれてしまった。

バキバキバキ

鬼はそのまま押し潰されてしまった。

『彼』は、潰れた鬼の塊を口まで持つていき、それを食べた。

グチャグチャグチャ

その光景を見たものたちは恐怖を覚えた。

『彼』は、喜んでいた。

この食べたものは今まで食べてきたものの中でも、かなり美味しいものだった。

そして同じに、ある感情が芽生えた。

もっと、もっと食べたい。食べ足りない。もっと、もっと。

周りにいた鬼や兵士たちは恐怖から、『彼』から離れようとした。

しかし、すでに手遅れだった。

『彼』は、近くにいるものに手当たり次第に襲い掛かかりだした。

それを見た鬼や兵士たちは、一斉に逃げ出した。

しかし『彼』は、最初からその場にいたものたちを逃がす気はなかった。

そして、殺戮が始まった。

人間側の本陣がある場所

人々が会議をしている所に一人の伝令が入ってきた。  
そして、その報告に全員が驚愕した。

先遣隊 生存者 二千五百人

敵、鬼側 全滅

鬼の拠点 全八ヶ所 壊滅

## 最初の食事（後書き）

次回、ようやくネギまのキャラが出ます。人じゃないけど・・・

飛驒の大鬼神（前書き）

ようやく話が進みはじめました。

戦闘を書くのは苦労しました。



## 飛驒の大鬼神

S i d e 討伐軍武将

我々は朝廷の命により飛驒の地にきていた。この地では多くの鬼が跋扈し人々を苦しめていた。

我々に与えられた任務は二つ。一つはこの地にいる鬼たちの討伐。もう一つは、飛驒の大鬼神と呼ばれるリヨウメンスクナノカミの封印であった。

このリヨウメンスクナノカミは強さ、巨大差から鬼たちの大将と思われていた。朝廷は飛驒の地を平定するために、今回この任務を命じた。

我々は先遣隊として周りにいる鬼たちを殲滅しようとしていた。しかし、予想外の事態が起きた。飛驒にいる鬼たちが集結をはじめたのである。

鬼たちは数力所に分かれて集結し、拠点のような場所を造った。この事態に我々は困惑した。そもそも今回の一番の目的はリヨウメンスクナノカミの封印である。

先遣隊が周囲の鬼を排除し、後続の部隊にいる術者たちが安全に封印の儀式を行えるようにする。これが当初の目標だった。

しかし今ではリヨウメンスクナノカミを守るように集まった鬼たちにより、押されていた。

今日もまた、ここから離れた所にある平原で戦闘が起きていた。どうやら敵はこちらの兵力を上回る数らしい。

すぐさま、増援をだそうと兵たちが召集されはじめた。しかし、今からでは間に合うかどうか分からない。

ようやく、兵が集まり出陣しようとしたとき一人の伝令が走ってきた。そしてその内容に驚愕した。

二万二千人の兵のうち戻ってきたのは、たった二千五百人。

四万はいた鬼は、全滅。

さらに、鬼たちの拠点の全てが壊滅という知らせだった。

そして驚くことにそれを行ったのはたった一匹の見たこともない黒い巨大な鬼だったらしい。

さらに詳しくその時の状況の説明を求めた。

その伝令が言うには、黒く巨大な鬼は、突然現れたらしい。その黒い鬼は近くにいた他の鬼たちに襲い掛かり、鬼たちを食べはじめた。黒い鬼には剣や弓は効かず、鬼たちによる攻撃も効果がなかった。また黒い鬼は手から光の玉をだし、その玉は触れた途端に爆発し周囲のものを全て破壊した。

そしてその黒い鬼は、人よりも鬼の方を狙うとのことだった。

黒い鬼は、鬼たちを喰らい尽くすとそのまま姿をくらましたそうだが、その報告を聞いて私は戦慄を覚えた。私以外の武將たちも同じだった。

今まで、そんな鬼がいるなんて聞いたことがなかったからだ。

このままでは任務を果たすことができない。

今後の方針を決めようとした時、大地が揺れた。その場にいたものたち全員が、急いで外に飛び出した。

私たちが外に出たと同じに空が暗くなった。全員が空を見上げると、何か巨大な物体が拠点の上を飛んでいき山にぶつかった。

私たちは自分の目を疑った。

頭上を飛んでいった物体はリヨウメンスクナノカミだった。

そしてスクナがぶつかった山の反対側に黒い鬼がいた。

## Side OUT

『彼』は、楽しんでいた。

この地に来てから戦うことは少なくなった。

食べるものを苦勞することなく手に入れられた。

しかし『彼』は不満だった。

戦い、勝つことで相手を食べるという行為をしてきた『彼』にとって、戦いは最早欠かすことの出来ないことの一つだった。

鬼たちが喰われまいと必死に抵抗をしてきた。

それは『彼』を喜ばせた。

手で相手を挟み潰し、尾の剣で切断、串刺しにし、脚で踏み潰し、そして喰らった。

鬼たちが集まっている場所が幾つかあった。

『彼』は全てを襲い、破壊し、喰らい尽くした。

ある拠点で、鬼たちを喰らっていた時大きな力を感じた。その力を強く感じる方へ『彼』は向かった。

一つ山を越えた先にいたのは今まで見たことのない大きさの鬼だった。

『彼』は、感じた。

これは今まで喰らってきた物の中でもかなり強いと。

Side スクナ

同胞たちが次々と消えていくのを感じる。

何か巨大な力に吞まれていって消えていく。

そしてその力がまっすぐこちらに向かってきていた。

スクナは分かっていた。その力の持ち主は自身と並ぶほど、もしくはそれ以上に強いと。

だが、スクナはその場から動かなかった。

飛驒の大鬼神としての誇りにかけて、ここで奴を倒すと。

そして、目の前に黒い鬼が現れた。

Side OUT

二体は睨みあっていた。先に動いたのはスクナだった。スクナは巨大な手でスサノオを吹き飛ばした。その一撃は強力で、元きた道へとスサノオは飛ばされていった。

スクナは追撃をかけようと進みはじめた。

その瞬間今度はスクナが後ろへと吹き飛ばされた。

スサノオが、吹き飛ばされた瞬間に両手から発射した光弾が胸に直撃したのであった。

再び睨み合い、場が膠着した。すると、スサノオの尾の剣に変化が現れた。剣が稲妻を纏ったのである。スクナは油断せず動きを見ている。突然、スサノオが尾の剣をスクナに向けた。そして閃光がはしった。

スクナは宙を舞っていた。そのまま人間がいる拠点の上を通過し、自分がいた山の反対側の山に激突した。

Side スサノオ

強い。今までの鬼とは比べものにならないくらい強い。

最初に吹き飛ばされた時、油断はしていなかった。

また、今撃ったレーザーも本来なら奴の体を貫通するはずだった。しかし吹き飛ばすことしか出来なかった。

今、自分が通過していった所の下でなにやら騒いでいるのがいたが知ったことでわない。

奴を倒し、喰らい尽くす。今考える事は、それだけだ。

しかし、このままでは埒があかない。仕方がない。

あれを使う事にしよう。

Side OUT

Side 討伐軍武将

黒い鬼は我々を無視して陣地を横切っていた。

スクナは立ち上がり、黒い鬼を待ち構えていた。すると、黒い鬼が両手の口を空に向けた。

その向けた口の中から光の玉が空に飛び出していった。  
そして、それは起こった。

スクナの頭上に光の柱が落ちてきたのだ。合計六本の光の柱は美しい見た目とは裏腹に、凶悪な威力を持っていた。

光の柱が消えた時、立っていたスクナはボロボロだった。  
スクナの四本の手のうち、左側の二本はボロボロだが付いていた。  
しかし右側の二本は焼き切られて、地面に落ちていた。  
足で無事な所は一つもなく、かろうじて右側の一本が動く程度だった。

そして傷ついたスクナに黒い鬼が襲い掛かった。  
黒い鬼はスクナの腹へと飛び掛かりスクナを押し倒した。

腹の部分に両手の口と真ん中にある口で齧り付いた。そしてスクナの体の一部を噛みちぎった。

周囲一帯にスクナの苦痛の咆哮が上がった。  
払い落とそうと残った腕を向けるが、黒い鬼が尾の剣を振るった。

残った腕、二本とも切断された。

S i d e O U T

S i d e スクナ

最早戦うことも、逃げることもできない。

この黒い奴は強かった。自分よりも、遙かに、圧倒的に。

奴は自分を食べはじめた。自分は悲鳴を上げることしか出来ない。

そして奴の尾が自分の顔へと迫っていた。

グサッ

Side OUT

戦いは終わった。

黒い鬼は去って行った。

スクナは体の大部分を食べられ最早、一部しか残っていないかった。

朝廷の命により残った一部はここではなく、別の地で封印されることになった。黒い鬼はその後、幾つかの場所で見られたらしいが発見報告も少なくなり、何時しか聞くこともなくなった。

そしてスクナの残った一部が封印された。

戦いで落ちた黒い鬼の破片と共に・・・

## 出会いと連れ（前書き）

アンケートの結果で1位だったあの子が登場！

今後はこの子ばかりになりそうな予感！

・・・別にいいか



## 出会いと連れ

欧州 とある平原

一人の子供が歩いていった。見た目十二、三歳の黒髪黒眼の少年だ。少年はボロボロの外套を身に纏い、何も無い街道を進んでいる。

途中、少年は立ち止まり空を見上げて呟いた。

「・・・お腹すいた」

Side スサノオ

お腹がすいた・・・

もう一週間、何も食べてない。

まったく、この人型は不便だ。

人間の中に潜り込むことができ、身体能力は格段に上昇した。

しかし、身体の発達は感覚器にも影響を及ぼした。味覚がおかしくなったのだ。

おかげで食べられる物は少なくなり、今では人やモンスター、鉄類、人間の食べ物しか食べられる物がなくなった。ああ、そういえば人間の使う魔法というのも食べたな。

あれは微妙だ。味が薄いからだ。

しかし、お腹がへった。

予備の肉や鉄は、すでになくなった。

前方に森が見えてきた。  
運がいい。あそこで食料を補充しよう。

む、血の匂いがする。

それに人の気配からしてかなりの人数がいるようだ。

「クツクツクツ」

おっと、思わず笑ってしまった。

しかし本当に運がいい。

それでは、食事の時間だ。

S i d e O U T

S i d e ????

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

足が痛い。もうずっと走っている。手が痛い。切り傷、擦り傷だらけだ。

背中が痛い。魔法の矢を数発受けた。

もう逃げ回るのは疲れた。でも、止まることはできない。捕まったら酷い拷問を受けるに違いない。

なんでこんなことになったんだろう。

10歳の誕生日、私は吸血鬼になった。  
そしてその日から逃亡生活が始まった。  
自分でも分かっていた。

もう自分は人間じゃない、化け物なんだと。  
街には1年以上留まることはできない。

すぐにはれてしまうから。街の人たちに捕まったら酷い拷問を受ける。

一度、長く留まりすぎて正体がばれてしまい火炙りの刑を受けたことがある。

あの時は偶然、鎖が解けて逃げる事ができた。

そして今、私は追われている。

おそらく正体がばれたのだろう。

街から離れた所に隠れて、食べ物を買に行く時だけ街に行っていたのに。

街から戻ったら、隠れてる場所に大勢の人がいて私のことを探していた。

慌てて森の中に逃げ込んだが人々は追ってきた。

追ってくる人たちは魔法の矢を撃ってくる。

背中や腕に当たったけど痛みを堪えて走り続けた。

たぶんあの人たちは私を捕まえたいのだろう。

威力が抑えてあった。それでも当たれば痛かった。

その時、一本の魔法の矢が足に当たった。

「キヤア！」そのまま転んでしまった。

そして倒れた私を人々が囲んだ。

「たくつ。手間とらせやがって」  
「ようやく捕まえたか」

私はもう逃げられないと分かった。

一人の魔法使いが私に杖を向けた。

私は目をつぶって痛み待った。

その時、

「見つけた。じゃあ、いただきます」  
そして視界一面が真っ赤に染まった。

Side OUT

それは一方的な殺戮だった。森の中の至る所で悲鳴が上がった。

「ぎゃあああー！ー！！」

「う、腕がー！ー！！」

「ひっ、ひいひいー！！」

スサノオは両手を巨大な口にして人々を喰らいはじめた。

ある者は上半身をかじり取られ、ある者は内臓だけを取られ、またある者は巨大な口に丸呑みにされた。

そして森が静寂さを取り戻した時、生きている者は二人だけだった。

「あーおいしかった。ごちそうさまでした」

スサノオは満足したのか自分の手に付いた血を舐めだした。

「あ、あの」

ふと、声が聞こえて後ろを向くと・・・誰もいなかった。

「あの、ごっちですけど・・・」

自分の足元から声がする。

下を向くと金髪の、血はおいしそうだけどまだあまり食べられそうじゃない少女がいた。

「あ、あの、助けてくれてありがとうございます」

スサノオは困った。助けたつもりはなかったのだが。

「別にいい」

「いえ、でも本当にありがとうございます」

少女は繰り返しお礼を言ってきた。スサノオは仕方がなくお礼を受け取った。

そこでふと、疑問に感じたことがあった。

「おい、お前はなんでこんな所にいるんだ？」

少女はその質問にどう答えようか少し悩んだあと、自分のことを語った。

吸血鬼であること。

街から街へ渡り歩いていること。

人々に化け物と呼ばれ、追われていることを。

それを聞いたスサノオは少し考えた後、少女にある提案をした。

「なあ、お前はこの後どうするんだ？」

「・・・わかりません。もうここには居られないから、また別の街に行くしか・・・」

「お前がよかつたら一緒に来ないか？」

「えっ！ほ、本当にですか！」

「ああ。ちょうど連れも欲しかった所だしな」

「行きます！一緒に行きます！」

「クツクツクツ。ああ、分かった。よろしく。そういえば名を名

乗ってなかったな。私はスサノオだ」

「私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルです。エヴァって呼んでください」

「ああ、分かったよエヴァ。今後ともよろしく」

「はい！」

こうして二人の旅が始まった。

## 出会いと連れ（後書き）

というわけで次回、エヴァとスサノオの二人旅です。  
頑張っていきたいと思います。あと、感想をお待ちしています。

おまけ

スサノオ用語集  
連れ・・・非常食



## 日常と一時の別れ（前書き）

もうヒロイン決定かな？

だって可愛いし、人気高いし、扱いやすいし。

## 日常と一時の別れ

彼女、エヴァと旅を始めて三ヶ月がたった。

最初の頃は大変だった。

私の本当の姿（エヴァにより鬼神型と命名）を見たらその日、一晚中泣かれた。あまりにも怖かったらしい。おかげで夜は絶対に人型で、エヴァを抱きしめて眠らなければいけなくなった。

また、食べ物もエヴァが食べられる物をとってこなければ成らなくなった。

以前、彼女に食べ物として鉄の剣をだしたら剣で殴られた。仕方がなく、剣をかじりながらエヴァの分の食料を盗りに村まで行った。

そして村を壊滅させた。

エヴァに怒られた。

食料を盗っている所に人がきて、ばれたので食べたら違う人がきて、また食べたら違う人がきてを繰り返してたらいつの間にか鬼神型になった。そのまま村を壊滅させて食料を回収してエヴァの所に戻って事情を話したら、また剣で殴られた。

こんな感じに楽しく過ごしている。

ああ、そういえば最近エヴァが魔法を覚え始めた。

なんでも守られてばかりは嫌で、自分の身は自分で守るらしい。

・・・ま、いいんじゃない？

それから数年後、

Side エヴァ

「？スサノオー？」

「ん、呼んだか？」

「呼んだか？じゃない！私と訓練をする約束だったろ！なんで寝てるんだ！」

「眠いから」

「クツ、コイツは〜〜！」

まったくスサノオは本当に食うこと、寝ること以外やる気を出さない。

昔はもつと活動的だったのに今ではただのめんどくさがりになっている。

めんどくさがるスサノオを引きずって、被害が出ない草原にでた。

「さてと、さっさと始めるぞ」

「眠い・・・zzz」

もう起こすのが面倒なので訓練を開始した。訓練といっても私がスサノオに技をぶつけるだけだが。

「いくぞ！リク・ラク・ラク・ラ・ラック・ライラック、闇の精霊29柱、魔法の射手・連弾・闇の29矢！」

トトトトトトトトツッ！！！！

よし！全弾命中した！

煙が晴れてきた。煙の中から無傷なスサノオが出てきた。寝たままで。「チツ、やはりダメか」

あいつの体には弱い攻撃は一切効かない。もっと高位の呪文でないと傷一つ付かない。

ならば、

「リク・ラク・ラク・ラ・ラック・ライラック、来たれ、氷精、闇の精霊を従え吹雪け常夜の氷雪『闇の吹雪』！」

すると、今まで寝ていたスサノオは目を醒まし右手を口に変化し、私に向けた。

Side OUT

Side スサノオ

『アメノハバキリ』

右手から黒い矢の形をした物が飛び出し、闇の吹雪とぶつかった。ぶつかった瞬間、3本の光柱が立ちのぼり闇の吹雪を防いだ。

「エヴァ、やり過ぎだぞ」3本の光柱に阻まれた闇の吹雪は関係ない方向に吹き荒れた。

草原だった場所は雪原に変わっていた。

「なら、一撃くらい喰らえ！」

「ハア、やれやれ」

再び、右手をエヴァに向けると

「スペキュラーカノン」

扇状に極太レーザーが発射された。

「ふぎゃー！」

エヴァの障壁を突破して命中した。

威力を抑えておいたのでエヴァは目を回して気絶していた。

「きゅー」

「ハア、まったく本当に手のかかる奴だ」

そう言いながらも楽しそうにスサノオは笑った。

エヴァがきてから生活が随分と楽しくなったと思う。

最初はただの連れだったのが今では一番愛おしい者だ。だから、私は彼女を手放すことができない。

いや、絶対に手放さないだろう。

今、自分の腕の中で眠っている彼女をずっと守っていこう。

スサノオは静かに心に誓った。

Side OUT

それから、数百年後

レーベンスシユルト城

「？スサノオー？」

エヴァの叫び声が城中に響き渡った。

「ええい！どこにいる！スサノオ！」

城の部屋のドアを片っ端から開け、探し回った。そして目的の人物を見つけた。

「スサノオ！貴様、何をしている！」

「よお、そんなに騒いでどうした？」

「ケケケ、御主人、騒ガシイゼ」

スサノオはチャチャゼロを抱きながらベッドに寝ていた。

「チャ、チャチャゼロ！貴様なんて羨ま、じゃない！何をしている！」

「ん〜、かわいいからついつい抱いてた」

「ケケケ、照レルゼ／／／」

「クツ、チャチャゼロ私と変われ、じゃなくてとっとと離れる！」

「なんだエヴァ、チャチャゼロが羨ましいのか？」

「なっ／／／」

エヴァの顔が真っ赤になった。

「クツクツクツ。なんだ一緒に寝たかったのか？」

スサノオがからかう様に言った。

「な、なななな／／／」

「御主人、顔ガアカイゼ」

「う、うるさい！／／／」

スサノオは腕をひるげ、

「ほら、エヴァ。おいで」

と言つと、エヴァは真つ赤になりながら腕の中に入ってきた。

「クツクツクツ、エヴァは本当にカワイいな」

エヴァの頭を撫でだした。

「あ、ん、ん／＼／＼」

エヴァは気持ちよさそうに声をだして、目をつむった。

「ケケ、御主人マルデ猫ミタイダナ。」

「クツクツクツ、そういうなチャチャゼロ。ほら、お前もこいよ」

左手でエヴァを抱きしめながら右手で手招きした。

「ケケケ、俺モ寝ルトスルカ」

チャチャゼロはスサノオの右側に入った。

そのまま、その日は三人で寝た。

Side スサノオ

出会った時から数百年が経ち、新しくチャチャゼロが加わった。

相変わらずエヴァはかわいい。チャチャゼロも負けずにかわいいが、  
そつえば、私たちは賞金首になった。

エヴァは600万ドル、私は人型を見られていないので鬼神型に1  
200万ドルが懸かった。

何故私の方が高いのdarou?

たまに立ち寄った街を壊滅させたのがいけなかったのdarouか、それとも襲ってくる賞金稼ぎを一人残らず殺して奴らの拠点を全て破



壊したことが原因だろうか。

ダメだ。考えてもわからない。

まあ、別に問題にならないだろう。

今ではエヴァは『闇の福音』、『人形使い』、『不死の魔法使い』などと呼ばれるほど強くなった。

私は『神の影』、『コノ世ヲ蝕ムモノ』などと呼ばれている。因みに、私のお気に入りは『神ヲ蝕ムモノ』だ。

さて、この城で私達は長い年月を過ごした。

ある日、ある情報が私達の元に届いた。魔法世界で大きな戦いが起きたらしい。

私は興味が沸いてきた。

その戦いが見たいと思った。

その事をエヴァに話すと、嫌がられた。

エヴァは今、新しい術式の開発が大詰めを向かえているので城から動くことができないからだ。

私はエヴァを説得した。

戦いを見終えたら必ずエヴァの元に戻ってくると。

エヴァは仕方がなく了承した。

その日、一日中エヴァの相手をし、夜は一緒に寝た。

そして出発の日

城の門の前にエヴァがチャチャゼロを抱いて見送りにきた。

「ちゃんと約束を守れよ」

エヴァは泣きそうになりながら言った。

「ケケケ、守ラナカッタ俺ガ切り刻ンデヤルゼ」

そういうチャチャゼロも少し寂しそうだった。

私は二人を抱きしめ、

「大丈夫。約束は絶対に守る。二人の元に戻ってくるから」

そう言って私はエヴァの頬とチャチャゼロの額にキスを落とした。  
二人共、顔を真っ赤にして実に可愛かった。

そして私は二人に背を向け、魔法世界へと向かった。

Side OUT

日常と一時の別れ（後書き）

次回は大戦編！

でも短くなりそうな予感が・・・

・・・頑張る

## 友人と死（前書き）

意外と長くなつた大戦編。

主人公を紅き翼に入れるかはかなり考えた。

## 友人と死

魔法世界

メガロメセンブリア  
とある喫茶店

そこに二つの人影があつた。

「うえ〜、苦い〜。なんだこれ？本当に飲み物か？」  
「君・・・失礼だね」

コーヒーの苦さに悶え苦しんでいるスサノオと少し頬を引き攣つた  
フェイト・アーウェルンクスがいた。

「ダメだこれじゃ飲めない。なあ、その砂糖とつてくれ」

「まったく、君はどれだけ砂糖を入れる気なんだい？」

フェイトは溜め息を吐きながらテーブルに備え付けてある砂糖の瓶  
を手に取りスサノオに渡した。

「そういうフェイトは良くこんな苦いのを飲めるね」

砂糖の瓶の中身を空にしながらフェイトに問い掛けた。  
フェイトはその光景を嫌そうに眺めながら、

「いいかい、コーヒーという飲み物はコクと豆の風味を味わう物なんだ。」

砂糖は適度な量、もしくはブラックで飲み……」

語りだした。

S i d e   スサノオ

ハア、始まってしまったが、フェイトのコーヒー講座が。

これがコイツのダメな所だな。

普段は冷静で真面目だけど、コーヒーの事に関しては熱くなる。

最初の頃の印象とは違うな。

フェイトと出会ったのは戦争が激化し始めた頃だった。

その頃私は離れた所で戦場を眺めて、戦闘が終了したら戦場に墜ちた戦艦、魔法使いの杖や剣、そして死肉を食べていた。

ある日、いつもの様に戦闘が終了したのを見届けてから戦場に行き周辺を物色していた。

すると、近くの森から話し声が聞こえてきた。

声のする方に向かうと二、三十人ほどの人がいて何か話をしていた。

そのうちの一人が私に気付いて、攻撃を仕掛けてきた。

しかし弱すぎて傷一つ付かなかった。

他の連中も気付いて攻撃を始めたが、ハッキリ言って弱かった。食べる気も起きなかったので、両手を变化させ右手から爆炎玉、左手から爆雷玉を発射し連中を薙ぎ払った。

そして連中が片付いたのでその場から立ち去ろうとした時、

「ちょっと待ってくれるかな」

声をかけられたので振り向くと、そこにはフェイトが立っていた。

「お前は？」

「僕はフェイト、で君は？なんで彼らを殺したんだい？」

「私はスサノオ、殺したのはあいつらが襲ってきたからだ」

するとフェイトは顎に手をあて考えた。だした。

そして暫く考えた後、

「ああ、君が噂の神ヲ蝕ムモノか、納得したよ。なるほど、人に

変化できたんだね。そういう事だったら仕方ない、今回は君に喧嘩を売った彼ら自身の責任だからね」

と納得してくれた。

その後フェイトは別れを告げ、その場から立ち去った。

私もそこから立ち去り、また別の戦場へと向かった。そこで再びフェイトに出会い、次の戦場、次の戦場と行く先々で出会うようになり何時しか、共に行動するようになった。

フェイトは『完全なる世界』という組織に所属していて、私に入らないかと誘ってきたが私は断った。

私は組織や大儀よりも、私が守りたいものだけに戦う。

そう告げた時、フェイトは

「まったく、君は・・・」

と呆れながらも少し笑っていた。

それからフェイトと共に行動した。

たまに仕事を手伝ったりもした。

彼は今では一番の相棒だった。



お、どうやらコーヒー講座が終わりそうだ。

この後フェイトは仕事があるらしい。

私もこの後用事がある。グレート＝ブリッジという所で大きな戦いがあるらしい。

フェイトの情報によると帝国が連合軍に奇襲をかけるそうだ。

なんて面白そうなんだろう。

早く見に行きたい。

とりあえず、フェイトの話が終わるのを待とう。

## Side OUT

帝国の奇襲作戦は成功し、グレート＝ブリッジは陥落した。

それを見たスサノオは静かに立ち去り、一路ヘラス帝国へと向かった。

この戦いに勝利したヘラス帝国という国を見たくなっただからだ。

ヘラス帝国に着いたスサノオは皇族が居る城に忍び込んだ。大広間には人々が集まり、今回の戦いの勝利を祝っていた。

スサノオは暇そうにその光景を眺めていた。すると、一人の少女が王と思われる男性とその周りにいる人々と口論を始め、しばらくして怒って出て行った。

その会話を聞いていたスサノオは口元に笑みを浮かべながら少女の後を追った。

Side テオドラ

まったく父上も臣下たちも今回の勝利に浮かれている。

しかも臣下たちはこのまま戦線を拡大しようなどと父上をたぶらかしている。

やはりこのままではいけない。

どこか頃合いをみて交渉をしなければ。

そう考えながら部屋に戻り布団に入ろうとした時、

「やあ、こんばんは皇女さま」

後ろから声が聞こえ振り向いた瞬間、布団に押し倒された。

「な、何者じゃ!」

パニックになりそうなのを抑えて、自分を押し倒した者を見ると黒髪黒眼のなかなかカッコイイ顔立ちをしている少年だった。

「私はスサノオ。人々は私のことを神ヲ蝕ムモノと呼ぶ」

その名は聞いたことがある。

全てを破壊し全てを喰らい尽くす黒い蠍型の異形の怪物だと。

「嘘を申すな！神ヲ蝕ムモノは黒い巨大な蠍だと聞いている！貴様のような子供ではない！」

そう言うと少年は、

「クツクツクツ」

突然笑い出した。それには腹が立ったので少年を強く睨んだ。

「確かにそつちの姿の方が有名だったな。なら、これでいいか？」

すると、少年の影が天井へと移動し巨大な蠍の形になった。

それを見て息を呑んだ。

そして少年の正体に気が付いた。

Side OUT

「さて、理解してもらえた所で一つ聞きたいことがある。答えてもらえるかな？」

「な、何じゃー！」

「何故お前はこの戦争に反対している？帝国は勝利したというのに」

「確かに勝利はした。だが、その為に帝国、連合共に多くの犠牲者がでた。妾はもう人が死ぬのは嫌なのじゃ・・・」

その答えを聞いたスサノオは満足したのか笑いながら、

「やはりな、予想通りお前は面白い奴だ」

手の力を抜き掴んでいた手を離した。

その時城内が騒がしくなったのをスサノオは感じた。どうやら忍び込んだことが発覚したらしい。

スサノオは悩んだ。侵入がばれた理由がわからないからだ。

「何故だ？なにが原因だろうか？侵入する時に壁を壊したことが？  
・ 違うな。なら、出会う衛兵全てを壁に減り込ましたことか？  
・ 違うな。ダメだな、理由が解らない」

「お、お主、ここに来るまでそんな事をしていたのか」

テオドラは呆れた様に言った。

「まあいい。そろそろ帰るとしよう。あと、これは質問に答えてくれたお礼だ」

そう言ったスサノオはテオドラの首に顔を埋め、

「あつ、こ、こら、やめ、あつ、ダ、ダメ／＼／」

甘噛みをし、さらにキスマークを付けた。

「クッククック、ごちそうさま」

そう言うとスサノオはテラスから飛び降り、姿を消した。

テオドラは顔を真っ赤にしたまま見送った。

そのまましばらく固まっていたがぼつりと呟いた。

「・・・スサノオ／＼」

後日、城では一日中熱に浮かされたようなテオドラが見られた。

また、テオドラの首に残った痕を巡って城中で大騒ぎになった。

S i d e   スサノオ

大戦の戦局は大きく変化した。

連合軍がグレートブリッジを奪還したのだ。

その戦いで紅き翼という集団が有名になった。

フェイトはますます忙しくなつたと愚痴を言っていた。聞いた話だとその紅き翼が、完全なる世界の拠点を潰し廻っているらしい。フェイトは彼らを連合から追い出したいそうさだ。

フェイトの頼みで仕事を手伝つたりもした。

どっかの議員をつまみ食いもとい暗殺したり、完全なる世界でかなり大事な物品らしい鍵みたいな物の移動の護衛などをした。それでも完全なる世界は押されている。

以前行つたことがある夜の迷宮も陥落した。

そして遂に完全なる世界の本拠地である墓守り人の宮殿に攻め込んでくるそうさだ。

フェイトに協力を申し出たが、

「君はかなり協力してくれた。それに僕が一番信頼している友人だ。だからこそ、この戦いに参加しないでくれ」

と言われ断られた。

フェイトは墓守り人の宮殿前で紅き翼を儀式が完成するまで足止めするそうさだ。フェイトは出発する前に私に言った。

「いつもの店で待っていてくれるかい？僕の分のコーヒーを頼んでおいてくれ」

そう言うとフェイトは転移した。

Side OUT

世界最古の都  
王都オステイア空中王宮最深部  
墓守り人の宮殿

S i d e   フエイト

戦況は最悪だ。

紅き翼は防衛線を突破しこちらに向かって来ている。

僕はポケットに入っている黒い針を握った。

この針はスサノオが以前にくれた物で、この針を持っていると力が上がるのだ。

千の呪文の男がこちらに来た。

紅き翼の他のメンバーは他の者に任せて僕は千の呪文の男だけに集中しよう。

ゴホッ、やれやれ負けたか。他の連中も負けてしまった。

その時、光が千の呪文の男をフェイトごと貫いた。

フェイトは光に体を貫かれ消滅しながらも、喫茶店で待っているであろう友人の事を考えていた。

きっと彼は自分を待ちながら砂糖を大量に入れたコーヒーを飲んでいるだろう。何度言っても彼は大量に入れる。  
次に会うときはもっとしつかりと教えなければ。

そんな事を考えながらフェイトは呟いた。

「じゃあね・・・」

そしてフェイトは消滅した。

消滅と同時に持ち主を失った黒い針が地上に落ちていった。



S i d e O U T

メガロメセンブリア

スサノオはいつもの喫茶店でフェイトを待っていた。すると街全体が騒がしくなった。

人々が騒いでいる理由はすぐに分かった。

戦争が終ったのだろう。

そしてそれが意味することは完全なる世界の敗北、つまりフェイトの死だ。

スサノオは空を見上げ、目を瞑った。

その光景はまるで泣きそうな子供のようだった。

しばらくそのまま固まっていたが、元の体勢に戻った。

スサノオは店員を呼びコーヒーを一つ注文した。スサノオは届いたコーヒーを、誰も座ってない席の前に置き静かに席を立った。

そして誰もいなくなったテーブルに一つだけコーヒーが置かれていた・・・

戦争は終わり、王都オステイアは滅びた。

オステイアの女王アリカ・アナルキア・エンテオフユシアは、戦争を引き起こした犯罪人としてケルベラス無限監獄に収監された。

二年後、アリカ姫の処刑日

処刑場の周辺には多くの部隊が展開していた。

アリカ姫は魔獣の孔の前に立たされていた。

メガロメセンブリアの元老議員がアリカ姫の罪状を読み上げた。

罪状が読み終わると刑が執行された。

アリカ姫は孔の奥へと落ちていった。魔獣の孔

S i d e   アリカ

ふむ、この孔深いな。

む、下から魔獣の唸り声が聞こえる。

どうやらこちらに向かっているようだ。

魔獣の一匹が口を開けて飲み込もうと襲ってきた。

覚悟を決めたその時、落下が止まった。

何かが私の腰を挟んでいる。

その挟んでいる手はまるで巨大なハサミのようだ。

私を掴んでいる者の正体は黒い巨大な蠍だった。

だが、不思議と私は恐怖や死の予感を感じなかった。

黒い蠍は尾の剣で襲い掛かってきた魔獣を切り裂いた。

黒い蠍は谷の絶壁に脚を刺し垂直になっていた。

そのまま壁を登り始めた。

後ろから魔獣共が襲ってくるが、黒い蠍は振り向くことなく尾の剣を振るい切り裂き続けた。

「姫さん!!」

上から我が騎士が飛んできた。  
まったく、遅い。

すると、黒い蠍は私を我が騎士に差し出す様に前に出した。ナギが私を捕まえ、抱くと黒い蠍は谷の底へと飛び下りた。

そのまま黒い蠍は谷の底の闇に消えていった・・・

友人と死（後書き）

いよいよ本編に近くなってきた！

早くエヴァとイチチャイチャしたい。

でも、次の次くらいからかな？

## 搜索と分裂（前書き）

あと少し、あと少しで麻帆良！

もうすぐ原作キャラが増える！

頑張ろう、自分！

## 搜索と分裂

何だ、いったいこれは何なんだ。

スサノオは困惑していた。

大戦で友人を失い疲れきり、我が家であるレーベンスシュルト城に帰りエヴァに会おうと思ひ帰ってみれば、何も無い。

城もエヴァもない。

訳が解らない。

二時間後

「よし、探しに行くか」

スサノオは困惑状態から元に戻った。  
その周りには巨大なクレーターが無数にあった。  
スサノオが八つ当たりとして暴れた結果だった。

落ち着いたスサノオはエヴァを探すことを決めた。

そしてエヴァ探しの旅が始まった。

幾つもの国を巡って現在、日本の京都にスサノオはいた。その理由はエヴァを見つける事と何かに引き付けられるからだだった。

日本に着いた時点で感じていた何かに呼ばれる感じは、京都に近づくほど強くなった。

そしてその感じを辿り、着いたのが湖の様な場所。

そこに着くと強く感じられた。

スサノオは湖に近づいた。

その瞬間、スサノオは湖に吸い込まれる様に落ちた。



京都市内

S i d e ナギ

俺達紅き翼は、アリカとアスナちゃんを連れて詠春の地元の京都に  
来ていた。

二人とも楽しそうで何よりだ。

アルヤラカンたちもこの旅行を楽しんでいる。

来てよかった。

心からそう思える。

「オーイ、皆！」詠春がこっちに走ってきた。

さっきまで何処かと連絡をとっていたが、慌てた様子だ。

気になったので詠春に聞いてみた。

「どうした？」

「何かありましたか？」

アル達も集まってきた。

詠春の話だと大昔に封印された鬼神が復活しそうなんだとか。それで俺達に助けて欲しいそうだ。

へっ、腕がなるぜ！

最近強い奴と闘ってないからな。

ラカンもやる気は十分だ。

俺達は詠春に連れられて、鬼神リヨウメンスクナの封印されている場所に向かった。

封印の場所は湖だった。

その湖の真ん中に巨大な鬼神がいた。

「あれが飛驒の大鬼神、リヨウメンスクナノカミですか」

アルは驚嘆したように言った。

俺も大戦の時に、帝国の鬼神兵を見てきたし倒しもした。

しかしこの鬼神は違った力強さを感じられる。

コイツと戦うのが楽しみだ。

「よし！さっさと片付けようぜ！」

まずは小手調べだ。

「来たれ、虚空の雷、薙ぎ払え、『雷の斧』」

瞬動で近づき『雷の斧』を放った。

雷の斧は顔面に直撃した。

そして、スクナの顔が砕け散った。

「「「えっ？」「」」

予想外過ぎる結果に全員が驚きの声をあげた。

俺達が呆然としている間もスクナはどんどん砕けていく。

『雷の斧』で顔が吹き飛び、そこから下に向かって砕け散り今では胸の辺りまで崩壊していた。

「「呆気ねえ・・・」」

ラカンと同じ事を言っちゃった。

もう終わったみたいだから帰ろうと思いき背を向けた瞬間、強烈な力の高まりを感じた。

後ろを振り返って見ると、スクナの残骸の中から巨大な黒い蠍が飛び出した。

あれは魔獣の孔でアリカを助けた奴か？

そんな事を考えていると黒い蠍が両手の口を俺に向けた。

そこに力が収束されていくのが分かった。

そして両手の口から巨大な火の玉が発射された。

S i d e O U T

S i d e スサノオ

くそ、こんな罠があるなんて思いもしなかった。

湖の封印の中には何故か私のカケラがあった。

そのカケラの細胞が封印に変な作用をして私を引き込んだみたいだ。そして外に出ようと上に昇ったら、いきなり雷が通り過ぎた。危なくぶつかるどころだった。

慌てて下に戻り鬼神型に変化した。

あの攻撃は一般的な魔法使いの威力を遥かに上回っている。

直撃していたら私もダメージを喰らっただろう。

とりあえず外にいる赤毛の奴をぶっ飛ばしてやろうと外に飛び出した。

赤毛の奴が空中を飛んでいたので、たたき落とそうとブラストフレームを両手から発射した。

しかし避けられた。

すると突然、周囲の重力が重くなった。が、別に問題なかった。

どうやら赤毛の仲間のフードを被った奴の仕業みたいだ。色黒筋肉と野太刀を持った男が突撃してきた。

尾を振るって吹き飛ばした。

再び重力が変化したのを感じた。

どうやら遠距離攻撃を主体にしてくるようだ。

赤毛は雷を、色黒筋肉は剣を投げ、野太刀を持った男は気を飛ばしてくる。

防御を破りはしないが、いい加減うつつとうしい。

橋の上で足場も悪いため回避もできない。

仕方ない、やりたくなかったのだがアレを使おう。

アレはこの辺一帯の地形を変えてしまう。

魔獣の孔もやり過ぎて少し広がってしまった。

だが、コイツらには使うだけの力がある。

そう考えたスサノオは人型に変化した。そしてアレを唱えようとした瞬間、

「その黒き蠍よ、待つてほしい」

止められた。

声をかけたのは、以前落ちてきた女性だった。

S i d e O U T

紅き翼の面々は慌ててアリカの元に飛んできた。

「お、おいアリカ危ないから下がれって」

「アリカ様、危険ですのでこちらに」

「まいったね、まったく」

ナギはアリカを下がらせようとし、詠春も呼びかけ、ラカンも驚いていた。

それに対してアリカは一言。

「うるさい。黙って見ておれ」

全員が黙った。

それを見ていたスサノオは驚いていたが次の瞬間、笑い出した。

「クツクツクツ、ここまで強い奴らが尻に敷かれているとは、クツクツクツ、傑作だ」そのまま爆笑し始めた。  
その光景をナギ達は驚いたように見ていた。

五分後、笑い止んだスサノオは改めて彼らと話しをすることを承諾し最初に自己紹介をした。

「私はスサノオ、人々は私の事を神ヲ蝕ムモノと呼ぶ」

その名を聞いた紅き翼のメンバーはそれぞれ反応した。

アリカ、詠春はその名を知っていたのか驚いた。

アルは姿を確認した瞬間から気づいていたらしい。

ナギ、ラカンは闘おうぜと誘ってきた。  
二人はアリカに殴られ沈黙した。

スサノオはリヨウメンスクナから出てきた理由を話した。  
その説明の中でリヨウメンスクナが実は大昔に死んでいたと聞かされた詠春はシヨックを受けていた。

「それで、何故貴女は飛び出したのだ？」

スサノオが疑問に思っていた事をアリカに聞くと、

「魔獣の孔で私を助けてくれた。その恩人に礼をするのは当然のことだ」

と答えた。

その答えにスサノオは楽しそうに笑った。

「やはり貴女は面白い人だ」

スサノオは彼女との会話を楽しんだ。

そしてとりあえず再封印することになり、リヨウメンスクナの残骸は再び封印された。

スサノオはナギにこの後どうするのか聞かれたので、人を探しに行くだけ答えた。



ナギ達と別れる前に、スサノオは詠春を呼んだ。

「何か用かい？」

「頼みがある。此処には私のカケラがあり、何が起きるかわからない。だから監視の為に私の一部を置いて行く許可が欲しい」

それを聞かされた詠春はしばらく悩んだ後、人を襲わなければという条件で許可を出した。

条件を呑んだスサノオは詠春に礼をいい、ナギ達に別れを告げると再び封印の湖に戻ってきた。

そこでスサノオは右手を変化させ、左手を食いちぎった。左手をそのまま橋の上に置き、しばらくして再生した左手を再び食いちぎり、同じ様に置いた。

その行動をもう一度繰り返すと、橋の上には三本の左手が置かれていた。

それを眺めたスサノオは再生した左手で右手首を切り裂き、三本の左手に血をかけた。すると左手が変化しだして肉の塊になり、さらに大きくなり人の形となった。

人の形をした塊はスサノオとまったく同じ顔、身長などをした人型に変化した。

「成功か」

「ああ、成功だ」

「成功だ」

「成功だな」

スサノオの呟きに全員が反応した。

「さて、とりあえず一人は此処に残れ。此処で封印を見張れ。一人は魔法世界に向かい、向こうの状況を報告しろ。そして一人は他の国を廻ってエヴァを探せ。私はこの国にいる古い知り合いの元を尋ね、エヴァを知らないか聞きに行く」

スサノオは分身達に指示を出すと、彼らに背を向けその場を立ち去った。

スサノオが去った後、分身達は誰が何処に行くか話し合いを始めた。が、話は纏まらず喧嘩が始まるうとした時、彼らの頭上から光の柱が降り注いだ。

「何をしている、この馬鹿ども」

彼らの服を買って戻ってきたスサノオがコールレインを降らせたのだ。

いい感じに焦げた彼らをたたき起こし、服を着せるとジャンケンをさせ、それぞれを決まった場所へ行かせた。

そして自らは昔の知り合いのいる地、麻帆良に向かった。

## 搜索と分裂（後書き）

分身たちの行動は後々、話に影響していきます。

今回は分身の行動を書くか、エヴァを出すか、悩むな

おまけ

能力説明

分身たちは基本的にはオリジナルに従う。

性格、思考などはオリジナルと一緒に。

能力はオリジナルの一部しか使うことができない。

オリジナルは遠く離れていても分身たちの動向を知ることができ、  
会話も可能。

分身側からの会話の拒否も可能。

オリジナルと分身は常にリンクしている。

今はこれぐらいかな？

仕事と再会（前書き）

話がやっと進みます。

そして遂にエヴァが！

更新速度あげたいな

## 仕事と再会

「ここか・・・」

スサノオは現在、麻帆良学園の校門の前にいた。

「ここも昔と変わったな」

スサノオは校門を抜けるとまっすぐ世界樹に向かった。

「あの樹、昔はなかったのだが・・・」

スサノオは昔と違った風景を楽しみながら歩いていた。

しばらく進むとスサノオの周囲を二十人ほどの魔法使いが包囲した。

スサノオは動揺することもなく、彼らに話し掛けた。

「おいお前ら、誰でもいいからクソガキを連れてこい」

スサノオの言葉に彼らは困惑したが包囲を解くことはしなかった。

魔法使いの一人がスサノオの前に出てきた。

「何者かは知らないが、ただちにこの学園から立ち去れ！」

そう宣告すると周りの魔法使い達は杖をスサノオに対して構えた。

スサノオはそれを見ても動揺せず、むしろ楽しそうにしていた。

「悪いがお前達に用はない。だからここは通らせてもらっぞ」

スサノオは瞬時に右手を変化させると地面に向け、

「『雷槌』」

発射した。

するとスサノオの足元からドーム状に雷球が膨張を始めた。

魔法使い達は危険を感じてその場から離れようとしたが、雷球の膨張は凄まじく十秒もしない内に直径十キロほどを覆った。

そして膨張が止まった瞬間、ドーム内が光に包まれた。

雷球が消えると、立っている者はスサノオ一人だった。魔法使い達は痺れて動けなかったり、気絶していた。

スサノオは倒れている魔法使いの一人に近づくと、変化している右手を向け食べようとした。

「待つてくだされ、スサノオ殿」



後ろからスサノオを止める声がした。

振り向くと後頭部が特徴的なジジイがいた。

「久しぶりだな、クソガキ」

「貴方から見れば、皆クソガキに見えますぞ」

スサノオと軽口を交わしているのは麻帆良学園、学園長 近衛 近右衛門だった。

「久しぶりですな、スサノオ殿。ところでその者達を許しては貰えませんか？」

「クツクツクツ、いいだろう。かつて教えた弟子の頼みだ。叶えてやろう」

スサノオは右手を元に戻した。

「ありがとうございます、スサノオ殿」

そう言うと他の魔法使いが現れ、学園長の指示を受け倒れている仲間達を次々と転移させた。

スサノオはその作業を黙って見ていた。

作業が終わりに学園長は他の魔法使い達も帰し、その場には二人だけが残った。

「おい、ガキ」

「ガキはやめてください。もうそんな歳ではございませぬ」

「ならば、ジジイだな」

「ジ、ジジイですか？しかし、それを言うならば貴方もジジ・・・

」

ガシツ！

スサノオの変化した右手に学園長の顔が挟まれた。

「なんだ、早く続きを言え。まあ、何を言うかによってはかみ砕くが」

学園長は冷や汗を流しながら、

「い、いえ何でもありません」

謝った。

スサノオは右手を戻し催促した。

「さっさと案内をしろ、ジジイ」

学園長はため息を吐きながらスサノオを学園長室に案内した。

学園長室に着くと、スサノオは学園長の座る椅子に座った。

「中々いい椅子だな」

「儂の席なんじゃが・・・」

スサノオは学園長の言葉を無視した。

学園長も諦めると本題に入った。

「それでスサノオ殿、何の用でこの学園に来たのですか？」

スサノオは学園長に顔を向けた。

「人を探している」

「人を？それはどなたで？」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、闇の福音だ」

「闇の福音ですか。何故彼女を？」

スサノオの目つきが鋭くなった。学園長室は一気に雰囲気重たくなり、学園長は緊張した。

「ジジイ、私が大切な物を決して手放さないのは知ってるな？」

「は、はい！」

「なら分るはずだ。彼女は私の大切な者。決して手放したりはしない」

そう言うとスサノオは視線を外に向けた。視線が外れたことで学園長は緊張をとき、一息ついた。

「それで、彼女を知らないか？」

「いえ、残念ですが知りません」

「そうか・・・」

スサノオは肩を落とした。

それを見ていた学園長はある考えが浮かんだ。

「スサノオ殿はこの後どちらに？」

「適当に国々を回ろうかと考えている」

「それでしたら、この学園で働きませんか？」

学園長はスサノオに対して学園の警備員をしないか誘った。

最初は嫌がっていたスサノオだが幾つかの条件で仕事を引き受ける事にした。

その条件は

一つ、エヴァの情報が入ったら直ぐに知らせること。

二つ、警備員以外の仕事は廻さないこと。

三つ、生活を保証し、仕事では報酬を出すこと

四つ、敵対するものは全て排除すること。

と、基本的にはこの四つの条件で仕事を引き受けた。また、学園長もスサノオに一般人を襲わないなど幾つかの約束をさせ、スサノオに図書館島の警備を任せた。

最初、誰かと組ませようとしたがスサノオは断り、一人で図書館島内部と周辺の警備を担当した。

そして、月日は流れた。

数年後

深夜

図書館島内部

S i d e とある魔法使い

「クソ！何だよアレは！」

「いいから走れ！」

俺達はそこそこの名を知れた盗賊団だった。

だった、という過去形なのは今生きているのは俺ともう一人だけだからだ。

最初、俺達がここに侵入した時は三十人いた。

ここに侵入した理由は貴重な蔵書が多数あり、それを盗みだす為だった。

学園に侵入するのは、先に潜入した仲間が魔法先生や魔法生徒の通るルートを調べ、誰も見回っていないルートを見つけたので簡単に侵入することができた。

そのルートを通り、目的の物がある図書館島にたどり着いた。

そこもまた、簡単に侵入できた。

しかし、実はそれら全てが罠だったのだと気付いた時には手遅れになっていた。

中に入り、奥に進むと広く大量の本があり、湖がある場所に出た。

そこに一人の黒髪黒眼の少年がいた。

見た感じ魔法生徒という風にも見えなかったので、誰も警戒していませんでした。

仲間の一人が少年に近づいて行った。

「おい、坊主。こんなところで何してんだ」

少年は微動だにせずただ無表情のまま、こちらを見ていた。

仲間が少年の肩に手を置いた瞬間、

ベキユ！

何かがえぐり取られる音がした。

そして目の前には仲間だった物の下半身が残され、辺り一面に血を撒き散らしていた。

その場にいた誰もが声一つ出すことができなかった。

少年の左手は巨大な口に変化し、何かを噛んでいるかの様に動いている。

誰かが後ずさりした音が静かに響いた。

少年はこちらを見て口に笑みを浮かべた。

「う、撃て！」

俺達は慌てて杖を構え、殺す気で少年に魔法の射手を連射した。

少年は真っ直ぐ跳躍し、笑いながら魔法の射手の雨の中を突き進んで来た。

左手を盾にし魔法の射手を防ぎ、一気に加速した。

ビュッ！

少年は視認出来ない速度で俺達の後ろに回り込んだ。

俺達が振り向くと右手も変化し、両手とも何かを食べているかのよう<sup>に</sup>動いていた。

そして上半身のない物体がまた二つ増えた。

「さて、そろそろ本格的な食事と行こうか」

少年が宣言すると、少年は巨大な黒い蠍に変化した。

殺戮が始まった。



ある者は両手の口に引き裂かれ、ある者は真ん中の巨大な隠し口に丸呑みにされた。

飛んでくる火や雷、様々な種類の巨大な玉に当たった者は燃え、焦げ、凍り、死んでいった。

俺はその地獄をくぐり抜けた。俺以外に七、八人はその場所から抜け出した。

だが奴は他の奴らを皆殺しにすると追撃してきた。

人数は徐々に減り、今俺ともう一人しかいない。

俺達は必死に出口に走った。

「急げ！後もう少しだ！」

出口が見える所まで来た。

後は魔法先生に捕まってもいい。

死ななければ、此処から生きて出られるのであれば何だろうと構わない。

ただ、ひたすらに走った。

そして違和感を感じた。

足音が一つしかしない。

もう一人いるはずなのに。

その事に気付いた俺は、がむしゃらに出口に走った。

遂に出口を抜けた。

あの地獄から抜けだせた！

俺は喜び、後ろを向いた。

向いてしまった。

そして男の目に、自分のすぐ目の前に迫る巨大な口の奥の闇が最後の光景として飛び込んできた。

グシャッ！

S i d e O U T

S i d e スサノオ

モグモグ

うん、中タイケるな。

しかし此処の警備は楽しいな。

ジジイに頼んで警備に穴を空けさせ、そのルートを通れば真っ直ぐこの図書館島に来られるようにさせた。  
おかげで食料には困らない。

以前はめんどくさかった。

魔法先生どもが私がこの学園に居るのは反対だとつるさかったのだ。

まあ、今では表立って反対する者はいなくなった。

それは以前に正義だの口うるさい奴らを非常食として地下に確保していた時の事。

ジジイに頼むから勘弁してくれと土下座までされ、仕方なくそいつらを解放してやる事になったのだが、解放する時に弱い癖に私に魔法をぶつけてきたのだ。

私は喜んで正当防衛を理由に確保していた七人の内、五人を目の前で食ってやった。

それ以来、残念な事に表立って反対する者がいなくなったので食料を侵入者で賄う事になったのだ。

今では少し後悔している。

一人ずつ失踪したようにやればよかったと。

「スサノ才殿、少しよろしくですか？」

私が侵入者どもの後片付けをしていると、ジジイから連絡がきた。

今すぐ学園長室に来て欲しいそうさ。何でも重要な用があるらしい。めんどくさいが仕方がなく学園長室に行った。

Side OUT

ベキツ！

「ジジイ、呼んだか？」

「・・・スサノオ殿、お願いですから来る度にドアを壊さないで下さい」

「知らん」

スサノオはそのまま学園長の机に座った。

「で、用件は何だ。エヴァが見つかったのか？言っとくがまた間違いだつたら今度は学園を吹き飛ばすぞ」

以前にエヴァが見つかったと知らされ、直ぐに分身の一人を派遣したが結局違う事がわかり、怒り狂ったスサノオにより魔法先生の大

半が病院送りにされた事があったのだ。

「い、いえ、今回はいい知らせです。ま、まあ少し待ってくださ  
れ」

仕方がなくしばらく待っていると、ドアの向こうが騒がしくなっ  
てきた。

そのまま部屋の前まで来るとドアを開けようとした。

ガチャ！・・・ガチャガチャガチャガチャガチャ！

「何でドアノブが回らないんだ！？」

「知るか！早く開ける！」

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ！

「・・・スサノオ殿」

「いつ気付くか楽しみだな」

「・・・」

数分後

「・・・なあ、これ壊れてないか？」

「・・・もう蹴破るか」

ゲシッ！

ドアが勢いよく開かれた。

そこに立っていたのは、昔京都で会ったナギとエヴァだった。

スサノオは驚愕し目を見張った。エヴァも同じく驚愕していた。

「あれ？よお、スサノ・・・」

ナギがスサノオに挨拶をしたが、スサノオは無視しエヴァに駆け寄り、抱きしめた。

「ス、スサノオ？」

エヴァは本物か確かめるように、おそろおそろ抱き返した。

そして本物だと分かった途端、泣き出し強く抱き着いた。

スサノオは何も言わず、ただエヴァが泣き止むまで抱きしめ続けた。

その場に居たナギと学園長は静かにその光景を見ていた。

エヴァが泣き止むとスサノオは学園長を椅子から蹴り落とし、そこに座りエヴァを自分の膝の上に座らせると後ろから抱きしめた。

エヴァも嫌がらず、むしろ喜んだ。

「そろそろいいかの？」

今まで最早空気となっていた学園長が話し掛けた。

「今は気分がいい。とつとと話せ」

エヴァを抱きしめつつ頭を撫でながらスサノオは許可を出した。エヴァは猫のように目を細めて気持ち良さそうにしていた。

学園長とナギは呼んだ用件とエヴァがいる理由を話した。

ナギの話しだと各地を廻っている時に、偶然エヴァに会ったそうだった。

エヴァは大戦が終わるのを待ちきれなかったため、術式を完成させると城を別荘に移し、スサノオの後を追った。

しかし運悪くスサノオとは出会えず、大戦も終わってしまいそのまま探し回っていた時に、ナギに会ったそうだった。

ナギは口を滑らせて京都でスサノオを見たことをエヴァに言った。

ようやく掴んだ手がかりと、エヴァは情報を引き出そうとナギを追いかけて回したそうだった。

ナギは追いかけて回されて疲れたので、畏を張りエヴァに登校地獄の



呪いをかけた。

学園長が以前ナギに会った時に学園の警備員が欲しいと言っていたのを覚えていたからだ。

ナギは呪いがかけられたエヴァを連れていく事を学園長に連絡し、それを聞いた学園長がスサノオを呼んだという事らしい。

説明が終わるとスサノオはエヴァを膝から降ろし、立ち上がった。エヴァは名残惜しそうに見ていたが頭を撫で、待つように言った。

スサノオは学園長とナギの正面に立つと、瞬時に両手を変化させ二人の頭を挟んだ。

「は!?!」

「スサノオ殿!?!」

スサノオは笑顔で、

「何勝手に呪いをかけてんだ赤毛?見つけたらすぐに連絡しろって言ったよなジジイ?お前ら二人とも同罪だ」

両手に力を込め、二人を強く挟んだ。

「「ぎゃあああああ!?!」」

夜の学園に二つの悲鳴があがった。

「反省しろ、馬鹿どもが」

床に捨てられた二人は頭を抑え、悶え苦しんでいた。

「俺、連れてきたのに……」

「わし、教えたのに……」

スサノオは抗議の声を無視した。

「さてナギ、早くエヴァの呪いを解け」

「えー、せつかくかけたんだし、しばらくはこのま……ま……で……  
……や、やっぱり今すぐ解きます！解かさせていただきます！」

「……」

スサノオが無言で右手を掲げたのを見て、ナギは慌てて呪いを解こうとした。

「ちょっと待ってくださいね」

それを学園長が止めた。

「何故止める？」

「いい機会ですし、彼女に一通りの学生生活を送らせてみては、  
どうでしょうか」

「ふむ・・・」スサノオは少し悩んだが学園長の提案にのることにした。

「なに！？私に学生をやれというのか！」それにエヴァは強く嫌がったが、最終的にはスサノオに説得され提案を受け入れた。

エヴァはスサノオと一緒にという条件で、警備員の仕事も引き受けた。

後に、この場で呪いを解けなかった事をそれぞれ後悔することになる。

ナギは卒業する頃に再び来ると言い、帰った。

スサノオはエヴァを学園長から譲られたログハウスへと連れて行った。

ログハウスは使われた形跡はなく、綺麗なままだった。

その事をエヴァが指摘するとスサノオは、

「ああ、私は図書館島で生活しているんだ」

と、事もなげに言った。

スサノオはエヴァにログハウスを自分は使わないからと譲った。

その日、スサノオはエヴァと一緒に寝た。

お互いに離れないように強く、抱きしめあいながら・・・

## 仕事と再会（後書き）

次回は分身サイドかな？

・・・糖分が不足してるな

主人公のせいで鉄分ばっかりだ。

## 学園生活と問題発生（前書き）

久々の更新！

いろいろ終わったので、週一ぐらいのペースで更新頑張りたいと思います！

## 学園生活と問題発生

麻帆良学園

ログハウス

朝

「それじゃあ、行ってくる」

「ああ、気をつけてな」

チユ

「ん」

麻帆良学園でエヴァと生活を始めて一ヶ月が経った。

エヴァも学校に馴染め、今日もいつもの様に送り出す所だった。

「ん、あ、んく、んあ、はっ、んんっ」

「ん、ぷはっ、ほら早く行ってこい」

いつもの朝の挨拶をしてエヴァを送り出した後、スサノオは地下室に降りた。

「ケケケ、イツモ熱イナスサノオ」

「おはよう、チャチャゼロ。今日はそれほどでもないぞ？」

地下室にはチャチャゼロがいた。

本来チャチャゼロはエヴァからの魔力の供給がなければ動けない。だが、現在エヴァは封印されている身だ。あまり魔力をチャチャゼロに回す事が出来ない。だから最初はエヴァの寝室に飾られる事になっていた。

そこでスサノオがある処置を施した。

それは分身を造った様に、血、スサノオの一部、そして核としてチャチャゼロを用いた方法だった。

結果、チャチャゼロは魔力供給がなくても活動できるようになり、更にスサノオの様に人型、鬼神型と変化する事が可能となった。ちなみに、人形の時が鬼神型である。

「デ、今日モ行クノカ？」

「ああ、この土地を詳しく知っておきたいからな」

スサノオはエヴァが学校でいない時は、チャチャゼロと街に行き見て回るのを日課としていた。

「じゃあ、行くぞ」



「シヨウガネエナ」

そう言うとチャチャゼロは人型へと変化した。

「これでいいだろ」

チャチャゼロは少し嫌がりながらも人型に変化し、スサノオと手をつないだ。

チャチャゼロはあまり人型を好まなかった。

なぜなら人前にその格好を見せるのが恥ずかしいという事と、その姿をスサノオにしか見せたくないという理由があるからだったりする。

「クツクツクツ、相変わらず可愛いぞ」

「・・・／／／」

顔を真っ赤にし俯いたチャチャゼロの手をひきながら、スサノオはいつもの様に街へと出かけて行った。

夕方

街から戻って来たスサノオは、エヴァの為に夕食の準備を始めた。

「チャチャゼロ、その肉切ってくれ」

「分かった」

エヴァが学校に通うようになってから、チャチャゼロは夕食の手伝いをするようになり今では一番の料理上手となっていた。

「ただいま」

夕食の支度がちょうど終わった時、エヴァが帰ってきた。

「おかえり」

スサノオは笑顔で出迎えた。

いつも夕食は三人でとっていて、今日も三人で夕食をとった。

夕食後、夜の仕事へとスサノオ達は出発した。

スサノオは図書館島に、エヴァはチャチャゼロと共に学園内の見回りへ向かった。

もちろんチャチャゼロは人形に戻っている。

警備の仕事が終わり家に戻った三人はいつもの様に、三人で布団に入り寝た。

ちなみに一緒に寝る時は、チャチャゼロは人型でスサノオに抱き着いて寝るのを好んだりする。

最初の頃は学校生活も悪くはないとエヴァもスサノオも考えていた。だが呪いによる問題が出てきた。

エヴァは呪いにより学園から出ることが出来ない。それは学業でも出る事ができなかった。

この問題が発覚するとスサノオは学園長室に突撃し、学園長の顔を挟みながら問いただした。

その結果、原因はナギが膨大な魔力で適当に呪文を使ったせいだと判明した。

その日、学園長室から悲鳴があがった。

更にエヴァが中等部三年になり卒業を迎えた時、今度は卒業する事ができなかった。

再び、学園長室に突撃したスサノオは学園長を挟みながら問いただした。

結果、ナギの呪いが変質したせいである事が判明した。

その日、麻帆良学園から学園長室が消滅した。

#### エヴァの学園生活一週目

仕方ないと割り切りエヴァは、ナギが封印を解きに来るまでと学校に通った。

スサノオはエヴァの呪いを解く方法を考え始めた。

エヴァが何故そんな事をするのかと尋ねると、

「何故かは分からないがナギの奴、来ないんじゃないかと思う」と答えた。

それ以来スサノオの日課は、呪いを解く方法の模索と夜の警備員が

主な物となった。

ちなみにエヴァ家の料理は全てチャチャゼロが担当するようになり、チャチャゼロの料理レベルが上がってたりする。

#### エヴァの学園生活二周目

スサノオは呪いの解除方法を見つけた。

しかし、その方法は呪いをかけた相手の一部が必要だった。

スサノオは動ける分身達にナギを搜索させた。

一方、エヴァは学校から帰ったらすぐさま別荘に入り、スサノオに甘えるという生活を送っていた。

チャチャゼロは料理の腕前が更にあがった。

#### エヴァの学園生活三周目

ある噂をスサノオ達は耳にした。

ナギが死んだ。

この噂が流れ出した時、エヴァは絶望しスサノオに縋り付き泣いた。

エヴァは呪いから解放されないと希望を失っていた。

スサノオはエヴァを励まし、ある約束をした。

呪いが解けた暁には、仮契約をし一緒に旅行に行こうと。

エヴァはスサノオを信じて頑張ると誓った。

#### エヴァの学園生活四週目

エヴァの甘えレベルが上がり、スサノオ依存症と呼べるほどになっていた。

寝る時、出かける時、さらには風呂に入る時まで傍から離れなかった。

スサノオも拒絶せずに、エヴァと一緒にいた。

それは分身達にナギの死体、もしくは血族を探させたが見つからず、エヴァは此処から出られないから一緒にいる間だけでも寂しくさせないというスサノオなりの優しさだった。

#### エヴァの学園生活五週目

#### Side スサノオ

「マスター、姉さん、スサノオ様、おはようございます。食事の用意が整いました」

「わかった。すぐに行く。ほら、エヴァ、チャチャゼロ起きろ」

「ウーン、もう少し・・・」

「・・・」

「仕方ない、先に行ってるぞ。行くぞ茶々丸」

「はい、スサノオ様」

家に新しく茶々丸という家族が加わった。

茶々丸は中々優秀な従者で、エヴァのミニステル・マギをしている。

「どうぞ、スサノオ様。コーヒーです」

「ああ、ありがとう茶々丸」

茶々丸からコーヒーを受け取りながら、ある資料を読んだ。

「その資料は？」

「ジジイの所から奪ってきた。あいつ、私に隠し事をしていたみたいだな。これによるとナギの息子が此処に来るらしい」

ジジイの金庫をこじ開けたかいたがあった。

「さて、これから忙しくなるぞ」

「はい、スサノオ様」

ナギの息子を捕らえ、絶対にエヴァを呪いから解放してやる。

とりあえず寝てる二人を起こさないと。

S i d e O U T

S i d e 茶々丸

「ジジイが呼んでる？」

「はい、恐らく金庫の件かと」

「仕方ないな、二人を起こしておいてくれ。今日は日曜だ。別荘で相手をしてやらないといけないからな」

「わかりました」

「クツクツクツ、いい子だ」

スサノオ様は頭を撫でると出かけて行った。

私はスサノオ様を見送ると、マスターと姉さんを起こしに寝室へと向かった。

私のマスターは元600万ドルの賞金首だったが、この麻帆良の地



に封印された時にスサノオ様が学園長を脅して手配を解かせたらしい。

学園長はついでにスサノオ様の手配も解こうとしたそうですが、本人が拒否したためにスサノオ様は未だに賞金首で、更に金額アップで二千万に上がった。

スサノオ様は喜んでいましたが。

スサノオ様は世間で言われているほど、凶悪な方ではなく身内にはとても優しい方です。

最近では、特に頭を撫でていただくのがとても気持ち良くて・・・

・・・少しフリーズしてしまいました。

とりあえず、マスターと姉さんをスサノオ様が戻って来るまでに起こして朝食の準備をしないと。

残念ながら私よりも姉さんのほうが、料理の腕が上です。

・・・いえ、別に悔しいわけではありません。本当に。

ただ、スサノオ様に褒められる姉さんが少し羨ましく思います。私も料理の腕を上げて、スサノオ様に褒められたい・・・

・・・また、フリーズしてしまいました。

いい加減本当に起こさないといけません。  
起こして姉さんから料理を学ばないと。

とりあえず今日は和食でいきましょう。

S i d e O U T

S i d e 学園長

バキッ！

「ス、スサノオ殿！？」

「呼んだか、ジジイ？」

僕の前に破壊されたドアノブが置かれた。

何故じゃろっ・・・

スサノ才殿を呼ぶ度にドアを修理に出している気がするのう・・・

「ゴホン、スサノ才殿。昨晚に儂の金庫を開けませんでしたか？」

「ああ、開けたぞ。よくわかったな」

魔法で強化された金庫を力づくで開けられるのは、この学園では貴方だけです

「そこから何か資料を盗りませんでしたか？」 「ああ、盗ったぞ。お前が隠していたナギの息子についての資料をな」

ギクツ！

「あ、いや、それは、その・・・」

「まあ、これについての謝礼はもう貰ったから許そう。で、他に何か有るのか？」

「（謝礼？）はい。その子をスサノ才殿に教えて頂きたいのです」

「嫌だ」

「即答ですか！？」

「私には既に弟子がいる。今更ナギの息子をとる気なんて有るか」

「そこを何とか・・・い、いえ何でもありません！ですから、手を元に戻してくださいね！」

スサノ才殿が手を元に戻してくださった。

「用件はそれだけか？なら私は帰るぞ」

「うう、わかりました。とりあえず今はこれだけです」

スサノ才殿はそのまま帰られようとした時、ふと気付いた事があった。

「スサノ才殿、先程おっしゃった謝礼とは何の事ですか？」

「ああ、その事か。金庫の中に資料の他に入っていた金だ」

「・・・は？」

「中々いい金額だったぞ」

そう言うと、スサノ才殿は帰って行った。

・・・ドア、どうしよう。

S i d e O U T

学園長室を出たスサノオは屋上にいた。

スサノオは真剣な表情で空を眺めていた。

「あと少し、あと少しでエヴァを解放できる」

スサノオが呟くと屋上に突風が吹き荒れた。

突風がおさまった時、屋上には誰もいなかった。

## 学園生活と問題発生（後書き）

あれ？

番外編の方がスムーズに書けてる？

・・・不思議だ。

外伝 弟子と長の娘（前書き）

ついに始動！

小太郎強化計画！

小太郎はガンガン強くしていきたいと思えます。

さらにあの二人も登場！

## 外伝 弟子と長の娘

オリジナルが麻帆良でエヴァと再会し共に暮らしている頃、

京都

スクナの封印されている湖

Side 分身スサノオ

封印の監視を命じられて数年が経過した。

特に異常もなく、のんびり過ごしている。

まあ、幾つか変化はあったが。

一つは封印の影響か、髪が白くなった。

・・・何か老けたみたいだ。

二つ目は、

「兄ちゃん！」

新しい弟子が出来た。

名を犬上 小太郎という。

小太郎と出会ったのは散歩をしている時だった。



暇つぶしに周辺の山を歩いていた時に、力尽き倒れていた小太郎を見つけたのだ。

小太郎は人と狗族のハーフで、その為に捨てられたらしい。

私は最初、暇つぶしとして小太郎を育てた。  
身体を鍛え、技を教え、様々な技術を教えた。

で、結局家族みたいになり今では弟のようなものだ。  
小太郎も私の事を実の兄のように慕ってくれている。

ズドン！！

さて、突然だが今の状況を説明しよう。

現在、私と小太郎は封印の湖から少し離れた開けた場所で、戦闘訓練を行っている。

この訓練は小太郎がどのくらいのレベルかを計るのが目的だ。

小太郎は中々飲み込みが早かったので、最初に獣化を覚えた。

今では完全な獣化から、影を使った移動法、狗神を身に纏っての強化など様々な技を覚えている。

本当に鍛えたかいがあった。

ドゴオオン！！

ただ、この訓練には一つ問題点がある。

小太郎が強くなったかは、実際に戦ってみないと分からないので戦うのだが、始めの三十分は手を出さないというルールを決めているので、私は防ぐか避けるしか出来ない。

つまり、サンドバック状態となってしまうのである。

まあ、小太郎が強くなる為だと割り切って我慢しよう。

バキッ！！

我慢だ我慢。

ベキッ！！

・・・我慢だ。

ズガァン！！

・・・

バキッ！！グチャ！！ベキッ！！

・・・とりあえず今日の夕飯のメニューに焼き犬を追加だな。

S i d e O U T

S i d e 小太郎

ズドン！！

んゝダメや、やっぱり兄ちゃんの装甲硬すぎや。

そもそも装甲を破る方法が装甲を破る威力で再生が追いつかない速さで攻撃するか、細胞を断ち切る攻撃をするしかないってというのは反則や。

最近では狗神で強化して、影で連続移動する事でようやく、傷をつけられるようになったわ。

それでも兄ちゃんには全然届かへん。

それにそろそろ三十分が経ってしまう。

しゃあない、これで決めるわ！

「いくで兄ちゃん！」

腕に狗神を集中させて、兄ちゃんに教わった技を合体させた必殺の

「狗音爆碎拳・改！」

ズドオオオオン！！！！

黒く染まった腕に燃え盛る炎を纏わせた一撃がスサノオに直撃し、周囲に激しい爆音、轟音が響き渡った。

周囲の地形が変化するほどの一撃は、スサノオの姿が見えなくするほどの砂塵を巻き上げた。

「ハア、ハア、これで、どうや！」

残ってた体力は今の攻撃で全部使ってしまったわ。

兄ちゃん、怪我くらいしてへんかな・・・って！

「危な！！」

めっちゃめっちゃデカイ火玉が迫ってきたので、慌てて回避した。

飛んできた方向を見ると、

「やっぱりダメやったんか・・・」

両手が翼のように変化した兄ちゃんがいた。見た感じ怪我など一切していないみたいだ。

「いや、なかなか効いたぞ？それに私に変化を使わせたんだ。喜べ、強くなったぞ」

兄ちゃんは褒めてくれたが悔しかった。

「それで小太郎、手は尽きたか？」

「へっ、まだ闘えるで！勝負はこれからや、兄ちゃん！」

そっや、まだ活ける！

「狗音影装！」

全身を狗神の力が包み、普通の狼の倍の大きさをした狼へ変化した。

「ふむ、獣化は上手くなったな。後は力を上手く使えているかな」

そう言うと兄ちゃんは、両手に火の玉を作り出した。

「さあ来い、小太郎！お前の全力を出して見せる！」

「行くで、兄ちゃん！」

脚に力を込め、スサノオに向かって小太郎は突撃した。

Side OUT

「ガウー!!」

小太郎は黒い気弾をスサノオに向けて三発撃ち込んだが、スサノオは両手から炎弾を撃ち相殺した。

高速で移動しながら小太郎は気弾を使い隙を伺っていたが、そんな隙を見せるほどスサノオは甘くなかった。

「そろそろ終わりにするぞ」

そう言うとスサノオは両手に力を溜めた。

小太郎は油断する事なく、スサノオの動きを見た。

戦いの終わりを感じた小太郎も最後の技を決めようと力を溜め、スサノオが技を放った瞬間に接近しようと身構えた。

両者共、動かず相手を見つめた。

周囲に沈黙があり、一切の音が無くなった。

全てが止まった空間に強い風が吹いた。

次の瞬間、小太郎は全力でスサノオへ突撃した。

スサノオも両手を掲げ、炎弾の発射体勢をとった。

しかし、小太郎が飛び出したのが速かったのは誰が見ても明らかだった。

小太郎は確信していた。

勝つことは出来ないが、それでもスサノオに一撃を決めれる。例えば炎弾が飛んで来ようと今この速度なら回避出来る。

自信のある小太郎は、まだ両手を掲げたままのスサノオに、最後の

一撃の力を開放しようとした。

小太郎は気付けなかった。

スサノオが口元に笑みを浮かべていた事に。

スサノオは掲げていた両手を地面に叩き付けた。

両手が地面に叩きつけられた瞬間、スサノオを中心に衝撃波の嵐が巻き起こった。

小太郎はその嵐に飲み込まれ、封印の湖へと木々を巻き込みながら吹き飛んで行った。

嵐が止み、スサノオは小太郎が吹き飛んだ木々の間を抜けて、倒れている小太郎の傍に立った。

「今日は終わりだな」

獣化は解け、もはや起き上がることも出来ない小太郎は倒れながらも、

「次こそ絶対に兄ちゃんを倒したるで！」



と元気だった。

「中々強くなったな。技にキレが出るようになったし、私に変化を使わせたのだ。良くやった」

スサノオはしゃがみ込み小太郎の頭を撫でた。

髪の毛をくしゃくしゃとすると小太郎は照れ臭いのか、

「に、兄ちゃん」

と嫌がりながらも耳がピクピクと気持ち良さそうに動いている。

「今日は休め」

スサノオが優しく言うと、小太郎は疲れが一気に出たのか、すぐに眠ってしまった。

スサノオは口元に優しい笑みを浮かべながら、眠った小太郎を背中に背負い、家に帰っていた。

その光景は本当の兄弟のようだった。

訓練から一週間が経った。  
スサノオと小太郎は家に居た。

彼らの家は紅さ翼の別荘である。  
詠春が貸してくれたのだ。

そこでスサノオは本を読み、小太郎は寝て過ごしていた。

すると、鳥型の式神がスサノオのもとに飛んできた。

式神をスサノオが掴まえると元の紙に戻った。

スサノオは紙に書かれている伝言を読むと、寝ていた小太郎を起こし留守番を任せると本山に向かった。

Side 詠春

「来たぞ、詠春」

「うわっ!？」

驚いた。本当に驚いた。

なぜならスサノオが天井裏から現れたからだ。

「な、なぜ天井裏から？」

「何となくだ」

スサノオは天井から降りると、私の横に来た。

彼との交友関係は、湖の監視の許可を出した時から続いている。

彼に私達紅き翼の別荘を貸すと、彼は屋敷に良く訪れるようになった。

恐らく私の事を信用してくれたのだろう。妻が生きていた頃は、三人で酒を呑んだこともあった。

また、刹那くんを連れて来て紹介し、木乃香の護衛兼親友にしろと言い、私に預けたのも彼だ。

彼が木乃香と刹那くんの事を大事に思っている事は私自身、良く知っている。

「さて、今日は何の用だ」

「実は学園の長期休暇を利用して、木乃香と刹那くんが帰ってくるので、お知らせしておこうと思ひまして」

するとスサノオは、

「そうか、ならば変えないとな」

と言うと、スサノオが縮んだ。

「確か中等部に上がったはずだな？」

「ええ、そうですよ」

「なら、これくらいだな」

スサノオの身長は、ちょうど木乃香たちと同じくらいになった。

詠春はその光景を眺めながら、以前スサノオに教わった事を思い出していた。

最初はスサノオの分身を含め、全員が十二、三歳の格好をしていたが、それぞれが自分で年齢を変えていたそうだった。

此処にいるスサノオも、封印の影響で髪が白くなったが年齢を変えることができ、木乃香たちに合わせた年齢に変えて、友達の関係にあるそうだった。

ただ、腑に落ちない事が一つ・・・

何故一緒に年齢にするのか、そこだけが納得できなかった。

後に詠春は、スサノオのこの行為の意味を理解するが、その時には色々手遅れだったりするのである。

Side OUT

その日、麻帆良から戻った木乃香と刹那の夕食会に、スサノオも参加していた。

「ほんでな、明日菜がな」

「へえ、面白い娘だね」

スサノオは木乃香に学園での話を聞いていた。

木乃香は楽しそうに話していた。

「刹那もおいで」

スサノオは離れた所に座っていた刹那を手招きした。

「い、いえ、わ、私みたいな者がスサノオさんやお嬢様の隣に座るなど、恐れ多いです！」

刹那は焦った様に言った。

「いいやんか、せっちゃんも一緒に話そうや〜」

「私も別に構わない。ほら、おいで」

二人に言われ刹那は更に慌てた。

「で、ですが・・・」

「・・・刹那」

ビクッ！！

スサノオは静かに囁く様に刹那の名を呼んだ。

呼ばれた刹那は背筋がゾクゾクするのを感じた。

「刹那、おいで」

「・・・はい」

刹那はおとなしくスサノオの傍に近寄った。

それに満足したスサノオは刹那の頭に手を置き、撫でながら耳元で囁いた。

「偉いぞ、刹那」

囁かれた刹那は顔を真っ赤にしながら気絶してしまった。

「あれ、せつちゃん気絶してもうた」

「まあ、分かったことだな。クツクツクツ」

とりあえずスサノオは刹那を自分の膝に寝かせ、木乃香との会話に戻った。

詠春はそれらの光景を、ただ静かに笑いながら、楽しそうに見ていた。

ちなみに、目を醒ました刹那は自分の状況を把握して、再び気絶した。

休暇が終わり、木乃香たちが帰る日

駅前

Side 木乃香

久々にスサくんに来て楽しかったわ。

たくさん話せて、たくさん遊べて、一緒に寝て、一緒にお風呂に入つて……

え、変なの入ってた？

別に大丈夫やで？だって、せつちゃんも一緒にやってたし。

……お父様には内緒やけど。

けど、スサくとまた離れてしまっくんやな……

あ、お父様や。

「お父様、それじゃあ行ってくるな？」

「はい、刹那くんもきおつけて」

「ありがとうございます、長。」

あれ？スサくんがない。



「お父様、スサくんは？」

「彼は遅れるそうだよ」

そっかぁ・・・、間に合わへんのかなぁ？

あ、もうすぐ新幹線が来てしまうわ。

「木乃香、刹那」

後ろから囁く様な声が聞こえた。

振り向くとスサくんがいた。

お父様は気付いてへん。

「スサくん、来てくれたん？」

「ああ、またしばらく会えないからね。見送りの挨拶をしよう思  
つてね」

そう言うとスサくんは、私の顔と腰に手を添えて引き寄せると、キ  
スをした。

「ん、んん、あ、あふ、ん、あ／＼／」

し、舌が入っとする

あ、なんか気持ち良い・・・

「ん、ぶはっ、はあはあ、ス、スサくん、強引や／＼／」

「特別な餞別だよ」

スサくんは笑いながら私のことを離すと、せつちゃんにも同じ様にキスをする。

うわっ、なんか・・・ものすごいわ／＼／

せつちゃんを離すとスサくんはお父様の所に行った。

せつちゃん、ものすごい真っ赤や。おまけに目を回しとるわ。

あ、もう来てもうた。

スサくんとお父様が戻って来た。

「それじゃ、行くわ」

「行って参ります」

「二人共、きおつけて」

「また会おう、木乃香、刹那」

扉がしまつて、新幹線が発車した。

スサくんとお父様がだんだんと小さくなって、もう見えなくなってしまう。

また次にスサくんに会ったら今度は、もっといっぱい甘えよう。

その時はせっちゃんも一緒だな。

S i d e O U T

役者は揃い出し物語は始まる。

おまけ

訓練の次の日

「な、なあ、兄ちゃん。何で肩をそんなに強く掴むんや?」

「いや、気にするな」

「何で手が変化しとるんや?」

「いや、気にするな」

「あ、熱い!ちよつ、まっ、兄ちゃん!」

「いや、・・・燃えちまえ」

「えっ?ええええええええ!」

次の日、訓練は休みとなった。

「ひ、ひどい・・・」

やられた恨みは忘れないスサノオであった。

外伝 弟子と長の娘（後書き）

週一と言ったけど忙しくて無理でした。すいません。

不定期で遅いかもかもしれませんが、今後もよろしくお願いします。

次回も外伝であるスナイパーが登場かも・・・

外伝 拾い子と天敵（前書き）

今回は甘さがほとんどゼロです。

・・・悲しいな。

## 外伝 拾い子と天敵

オリジナルが麻帆良でエヴァと再開して共に暮らし、京都の分身が小太郎を拾い弟子にした頃、

とある紛争地帯

戦場

Side 分身スサノオ

ガガガガガガガ！！

ドオン！！

バン！！

火薬の匂い、血の匂い、死体の匂い、廃墟となった建物。

そして飛び交う銃弾。

まったく、・・・楽しくて仕方ないじゃないか。

銃弾が飛んでくる方向に駆け出し、そこに潜んでいた敵を一人残ら

ず喰らい尽くした。

すると、建物の陰に隠れていた敵が飛び出し、

「このっ、化け物が！」

マシンガンの銃口を私に向けた。

ズキーン！！

敵の頭に穴が開いた。

「よくやった、マナ」

私は今居る所から、数百メートル離れた所で銃を構えている少女を褒めた。

少女、マナはそのまま周辺一帯の敵を狙撃しだした。

最初はマナが腕を上げたと事に感心していたが、ある事実気付き衝撃を覚えた。

それは、このままだと死体しか食べれないという事だ。

「マナ、待て」

急いでマナに中止の指示を出したが、



ズキューン！！  
ズキューン！！  
ズキューン！！  
ズキューン！！

無視された。

そのまま、その日の戦闘は終わった。

「で、何か言い訳は有るか？」

私は目の前に、黒い髪を長く伸ばし褐色の肌をした9、10歳くらいの少女、マナを正座させていた。

「・・・別がない」

「・・・」

とりあえず、マナの頬をグニグニと引っ張った。

マナは涙目になり、うつろか唸りながら睨んできた。

まあ、恐くはないが。

それにしても、何でこんな子に育ったんだろう。  
何処で育て方を間違えたんだろうか。  
私の出会った頃の事が思い出した。

私がマナと出会ったのは、廃墟になった村だった。

その村は旅の途中で何度か訪れたことがあり、知り合いもいた。

ある時、再び村を訪れると村は賊の襲撃を受けたのか滅びていた。

私は知り合いの家に向かった。

途中で知り合いの妻の死体を見つけ、家の前には知り合い自身の死体があった。私がそのまま立ち去ろうとした時、知り合いの家の中から生命反応を感じた。

中にいたのは、知り合いの娘で3歳くらいの少女、マナだった。

彼女は家の隠し部屋に隠れていた。おそらく、知り合いが隠れるように言ったのだろう。

私は気絶している彼女を抱き、村を見渡せる高台に行った。

途中、目覚めた彼女が暴れるというハプニングも有ったが、事情を話して落ち着かせ、共に高台に向かった。

高台に着き、村を見渡しているとマナは泣き出した。

泣いているマナに、私は選択肢を与えることにした。

「マナ、お前には二つの道がある。一つは村に残り暮らすこと。もう一つは、私と共に旅をすることだ。共に来るならば、生きる術や戦闘技術を教えてやろう。さあ、どうする？」

マナはしばらく悩んだ後、

「わたしに戦いかたを教えてください」

と共に行くことを選んだ。

「分かった、ならばその目に故郷の最期をしっかりと焼き付けろ。これがこの村に私ができる、最後の贈り物だ」

私の背中に金属製の巨大な箱が二つ出現し、翼を広げるように展開された。

そこから大量の光りの玉が出現し、村全体に降り注いだ。

周辺には爆音、轟音が鳴り響き、大地が揺れた。

マナは言われた通りに、目を離すことなく眺めていた。

周辺に沈黙が降りた時、大地から村の存在は消え去り、ただクレー

ターが残っているだけだった。

「・・・葬送は済んだな。後は手向けの物だな。行くぞマナ。お前に戦い方を教えてやる」

その後、マナに戦い方を教えた。マナは銃の扱いが上手かったので、幾つか特製のバレットを与えたりもした。

また、村を襲撃した者達に報復もした。

マナを鍛えてから数年後に、村を襲撃した奴らのアジトを発見したので、マナと共に全員皆殺しにして村への手向けの花とした。

さて、此処まで昔のことを思い出してみたが、全く思い当たる事がない。

何が原因だろうか？修行で、向かってくるトマホークミサイルの迎撃練習をさせたからか？いや、違うな。なら、脚力強化の訓練として、後ろから絨毯爆撃をして追いかけたことだろうか？いや、これも違うな。

ダメだな、分からない。まあ、いい。

それよりも、いい加減睨むのやめてくれないかな？

S i d e O U T

S i d e マナ

まったく、本当にスサノオさんの天然には困ったものだ。

だいたい、今日の件に関してもスサノオさんが悪い。

何で最初から最後まで、戦場のど真ん中で待機なんだ！

あの人はいつも無茶を言う。

でも、そんな所もまた・・・／／／

はっ！？

違う違う！

まったく、あの人と一緒だとペースを崩されてしまう。・・・悪くはないけど。

そういえば、いつの間にかわたしは『四音階の組み鈴』とかいうN GO団体に所属している事になっていた。

一体いつ所属させたんだらう？

もしかして、以前戦場で捕まえ三日間監禁して、なぜか逃がしてやった魔法使いが関係しているのかもしれない。

まあ、いいや。

・・・あ、これってスサノオさんの口癖？

数年後

「マナ、麻帆良に行け」

「・・・はっ？」

突然スサノオさんが変な事を言い出した。

「あつちでお前を学園の警備員として雇いたいらしい」

「はぁ・・・」

「だから行って来い」

「いやいやいや、何勝手に決めてるんだ！」

脈絡もなさすぎるだろう、スサノオさん！

「いいじゃないか、学生生活つてものを楽しんで来い」

「それにしたって突然すぎるよ。NGOの仕事もあるし、急に行けと言われても・・・」

すると、スサノオさんはにこやかに笑いながら、

「大丈夫。お前、もう辞めたことになってるから」

と衝撃的な発言をした。

そのまま、私が呆然としている間にいつの間にか準備は全部終わってあった。

あの衝撃発表から一週間が経った。

「じゃ、気を付けてな。荷物はもう送ったから」

私達は空港に居た。私はスサノオさんに言われた学園の警備の仕事を受けることにした。

「まったく、今度からはちゃんと事前に教えて欲しいものだな」

「分かった分かった、教えてやるよ」

本当にこの人は教える気が有るのだろうか。

む、そろそろ時間だ。

「それじゃあ、行って来る」

「ああ、行って来い」

スサノオさんは、静かに近寄ると私の頭を撫でた。これは昔からスサノオさんが私にやる一種の癖かもしれない。

私はそれをされると何も言えなくなってしまふ。この人、分かってやっているのか？

「あっちの私によるしく」

「どついう意味だい？」



不思議な発言をして、スサノオさんは静かに立ち去って行った。

私は言葉の意味を考えようとしたが、時間が迫っているので後にすることにした。

マナがこの言葉の意味を理解したのは、麻帆良に着いてすぐだった  
りする。

S i d e O U T

空港を出たスサノオは、街から離れ郊外に来ていた。

しばらく歩いていたが、急に立ち止まった。

「おい、そろそろ出てこいよ」

スサノオが声を上げると、前方にフードを被った人物が現れた。

その人物は片手にタバコを持ち、もう片方の腕にスサノオにとって忘れることが出来ない特徴的な腕輪をしていた。

「なるほど、お前か」

スサノオの全身の細胞が活性化し、体の至る所で変化し始めた。

「お前が相手なら手加減は一切出来ない。全力で殺す」

鬼神化し始めたスサノオに対して、フードを被った人物はタバコを捨て、何処からともなく長剣を取り出した。

そして、

「行くぞ」

両者は激突した。

戦いは激しかった。

スサノオは背中の中の箱からミサイルを放ち続け、腕からはトマホークミサイルを連射した。

フードを被った人物は飛んでくるミサイルを避け、スサノオに切り掛かった。

接近されてもスサノオは慌てずに、斬撃を回避し捌くなどの回避行

動をとり反撃した。

戦いは激しさを増し、既に三時間が経過していた。

更に三時間が経過した時、状況が変わった。

スサノオの片腕が切り落とされたのだ。これにより戦いの流れは、一気にフードを被った人物へと傾いた。

スサノオの再生を上回る速度で次々と切り裂いた。

フードを被った人物の武器で斬られると、その部位は再生しにくくなった。

腕、足、目、背中などを切り裂かれ、遂にスサノオは倒れた。

フードを被った人物はスサノオの頭の上に立つと、持っていた剣を構えた。

すると、剣はオリジナルのスサノオの手のように巨大な口に変化した。

それを黙って見ていたスサノオは、自分の最期を確信したので彼に忠告を与えた。

「今回は私の負けだ。だが、他の者たちには今回の戦いは既に知らされた。次に戦う時、お前の戦い方は知られているとおもえ」

言い終えたスサノオは、静かに目を閉じた。

そして、フードの人物はまっすぐ狙いを定めた。

「じゃあな、隊長さん」

ガブツ！！

周辺一帯がクレーターとなった場所から、一人フードを被った人物が離れて行った。

彼が去った後、そこで動くものは何一つなかった……

## 外伝 拾い子と天敵（後書き）

さて、外伝をあと一つ書けば本編開始！

ちなみに次は甘くしたい、ていうか絶対する、必ずする！

後、フードの人物の正体、分かる人には分かるかな？

まあ、予告はこんな所かな。

あと、本編でこうして欲しいなどの要望があったら感想にお願いします。

外伝 皇女と旧友（前書き）

やっと更新！

今回は予告通り甘めだと思えます。

それにしても、甘くするとなんか微妙にエロくなってしまっつのはな  
んでだろっ？

## 外伝 皇女と旧友

まだエヴァが麻帆良に来たばかりの頃、

魔法世界

ヘラス帝国

王城

S i d e 帝国兵

グフツ！

ち、畜生、なんて甘さだ。

だが、今倒れる訳にはいかん！

俺が倒れたら残りは、侍女を入れて三人だ。

そもそも、この様な事態になった訳を話そう。

我々は、ヘラス帝国第三皇女テオドラ様の護衛が任務の親衛隊だった。

ある日、突然新入りが入ることになった。

今思うとこの時から地獄が始まったのだらう。

その新入りが、テオドラ様に挨拶に行った時のことだった。

「いいか、貴様が仕える方なのだから、礼儀をわきまえるように」

「……………はい」隊長が注意をしているが、新入りはやる気がまったくなさそうに返事をしていた。

隊長は少し苛つきながらも、注意し続けた。

そしてテオドラ様が来られた時、それは起こった。

隊長はテオドラ様に新入りを紹介した。

「テオドラ様、新しく入った者がおりますので紹介させていただきます」

「ほお、どのような者じゃ？」

「テオドラ様、この者が新しく入った者です」

隊長は新入りを前に出した。

すると、



「なっ！？おぬしは！！！」

テオドラ様は驚愕され新入りの前に、駆け寄って来られた。

新入りは近寄られたテオドラ様を抱きしめ、

「やあ、久しぶり」

と言うとキスをした。

その場に居た全ての者が凍りついた様に固まった。

新入りはそんなのを無視し、キスをし続けた。

テオドラ様も最初は目を見開き固まっていたが、目を閉じるとそのままキスを続け、段々と深くなりだした。

「あ、ん、んん、あ、は、んあ」

部屋全体に二人の舌が絡み合う音が響き、開いた口の隙間からはテオドラ様が甘い声を漏らし始めた。

「あむ、ん、ん、ぷはっ」

三分は経っただろうか？

ようやく離れた二人は、まるで恋人同士のように互いに見つめ合っていた。

「は！？そ、そいつを拘束しろ！」

我に返った隊長が、慌てて新入りの拘束を命じた。

我々は新入りを拘束しようと近付いたが、

「待て！」

テオドラ様に止められた。

「テ、テオドラ様？」

「こ、この者は、わ、妾の・・・お、夫じゃ！／＼／＼」

再び、全てが凍りついた。

テオドラ様は自分の発言が恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にしてイヤンイヤンと首を振っていた。

そして、テオドラ様に夫発言された本人は、衝撃発言で部屋にいる全員が固まっている隙にいなくなっていた。

この発言に城中が蜂の巣をつついたような騒ぎとなり、直ぐさま帝国の重鎮たちによる会議が開かれた。

会議では今回のテオドラ様の発言を受けて、問題となっている新入りをどうするかが議論された。

議論が交わされる内に、テオドラ様の意思を尊重し賛成する者、帝国の皇女に手を出したのだから罰するべきと反対する者と二つに分かれた。

最初の内は圧倒的に反対する者が多かった。

ところが妙な事が起こり出した。

反対する者が減りだしたのだ。

例えば、反対する者の中でも強く反対していた者達が謎の失踪を遂げたり、最初は反対だった者が、突如として賛成に替わったりと、急激に賛成派が増えだしたのだ。

そして最終的には、皇帝が新入りをテオドラ様専属の騎士に任命するという異例の事態で、この騒動は終結した。

そして、騎士に任命されるまで行方をくらし、城中の兵士が探し回っても見つける事ができなかった新入りは、任命される事になった途端姿を現し、騎士となると四六時中テオドラ様とベタバタし始めた。

例えば朝、

「おはようテオドラ。さあ、朝食に行こうか。」

「うむ、行くかの／＼／」

新入り改めスサノオの奴は、毎朝テオドラ様をお連れする時は必ず恋人繋ぎで移動するのだ。

更に、

「ほら、テオドラ、あゝん」

「あ、あゝん、ん／＼／」

パクッ

「どう、美味しい？」

「う、うむ／＼／」

「じゃあ、テオドラ、私にもくれるかな？」

「わ、分かった／＼／あ、あゝん／＼／」

パクッ

「うん、美味しい。ありがとうテオドラ」

チュッ

互いに食べさせあい、お礼にキスを返すという行為が食事中、ずっと続くのだ。

まるでバカップルみたい、いや、バカップルそのものだった。

例えその2、昼の場合

城の庭園に二人はいた。

我々も護衛という事でお供し、周囲に控えているのだがテオドラ様とスサノオの奴にとっては眼中にないらしく、

「あ、こら、そんな所に付けちゃ、あ」

「クッククック、ほら、隠すな」

イチャついていた。

具体的には、テオドラ様をスサノオが後ろから抱きしめ首にキスマークを付けるといふ、見ていて胸がムカつく光景が広がっているのだ。

テオドラ様は顔を赤らめながらも、嬉しそうにしていらした。

そして、この行為は夜まで続いた。

例えその3、夜の場合

「さあ、寝よう。おいで、テオドラ」

「うむ・・・／＼／」

夜、スサノオはテオドラ様の寝室に共に入っけいき、共に寝ている。

はつきり言っけ、大問題だ。

一国の皇女と共に寝るなど本来許される事ではない。

しかし、スサノオは皇帝直々にテオドラ様専属の騎士に任命された為、我々には口だしできなかつた。

また、この事に対して文句を言っけ重鎮や騎士達は、ことごとく行方不明となっけしまったのだ。

・・・絶対犯人はあいつだ。

更に侍女達の話によると、夜にテオドラ様の部屋の前を通ると、中から甘い声や嬌声が聞こえてきたそうだ。

このように甘っけたるいのを一日中見せられれば、倒れる者も出てくる。

スサノオがきて一ヶ月、既に冒頭のように殆どの者達が倒れた。

朝、昼、夜とフルコースの甘さは流石に私でもキツク、そろそろ限界が来てしまう。

ああ、最後の侍女が倒れたか。

残った同僚も辛そうだ。

私もそろそろ・・・意識が・・・

・・・くそ、アイツ・・・更に甘さを・・・上げやがった・・・

グッ、む・・・無念だ・・・

バタッ

S i d e O U T

S i d e 分身スサノオ

む、また誰か倒れた。

まったく、アイツらは病気か？軟弱な奴らだな。

まあいい。

それにしても、こちらの世界に来て随分と経ったな。

私はオリジナルによりエヴァの搜索という命令で魔法世界に向かわされ、各地を放浪し帝国に着いた時に発見したとの報告を受けた。

この時既に、私は城への潜入を考えていた。

と言うより、オリジナルが分身全員に指示を出し、私には城に潜入しそこで暮らせと指示を出したのだ。

私達分身はそれぞれが意思を持ち、考え、行動するが、結局の所オリジナルの意思が一番優先され、今回も以前出会ったテオドラに会いたいというオリジナルの意思が出た結果、騎士になるという事になったのだ。

まあ、私が会いたかったというのもあるが。

それに、以前の私達の存在理由は搜索や封印の監視など大したことではなかった。

今、私達分身の存在理由はオリジナルの愛する者達を守る盾であり剣であることだ。

私達分身も、私達分身自身が愛した者達を守る為なら死などは恐れない。

私も、私自身が愛したテオドラを守る為ならどんなことでもするだろう。

「どうしたのじゃ、スサノオ？」

黙り込み考え込んでいた私を心配したのか、私の膝上にいたテオドラが声をかけてきた。

私は何でもないと、笑いながら彼女を抱きしめた。



彼女は嬉しいのか、私に擦り寄ってきた。

私はそんな彼女の頭の角を見ていた。

角・・・角、角か。

クツクツクツ、今夜が楽しみだな。

テオドラは何か悪寒を感じ、辺りを見回していた。

そんな感じで朝を過ごしていた日の昼、テオドラと庭園に来ていた。

周りに護衛はいなかった。

なぜなら先程最後の一人が倒れたからだ。

・・・フツ、計画通り。

これで私とテオドラ以外いなくなり、存分に二人で過ごすことができる。

私はテオドラが煎れてくれた紅茶を飲みながら過ごしていた。

因みに、以前私が紅茶をテオドラに出した時は、甘すぎだと怒られた。

なぜだ？ たった一キロしか砂糖を入れてないのに。 これ以来、私には煎れさせてくれなくなった。

少し悲しい・・・

そのまま昼はのんびりとテオドラと二人きりで過ごした。

そして夜、私とテオドラはベッドの上にした。

いつものように一緒に寝る為だ。

「ん、んあ、スサノオあ、ん、んん」

「テオドラ……」

ベッドに身を沈ませ、手足を絡ませ合い、互いに求め合う様にキスをした。

「ああ、あ、スサノオあ」

テオドラの目は潤み、頬は上気し、女としての色気を出していた。

私はより一層テオドラを求めた。

その時、見られている様な視線を感じ、テラスへと顔を向けた。

そこには誰もいなかったが、確かに視線を感じた。

「どうしたのじゃ？」

テラスをジッと見ている私にテオドラが疑問の声を上げた。

「いや……、悪いが今夜は客が来る予定が出来てしまった。だから、今夜はここまでだな」

「え〜!？」

テオドラは不満そうに、頬を膨らませた。

「まあ、寝るまでは傍にいてやる」

そう言うと私は、テオドラを抱きしめながら頭を撫でた。

テオドラは少し不服そうだったが、徐々に眠気が出始め、数分後は静かに寝息を起てはじめた。

私はテオドラが眠つたのを確認すると彼女を放し、毛布を掛けると静かにベッドから降り、テラスに出た。

テラスには誰もおらず、ただ星の光によるぼんやりとした明るさと夜の暗闇が広がっていた。

「おい、来たぞ」

私は暗闇に向かって声をかけた。

すると、

「久しぶりだね、元気そうでなによりだよ」

暗闇からフェイトが現れた。

「まったく、久しぶりに現れたと思ったらのぞき見なんかしやがって」

「ああ、それに関しては謝罪するよ。まさか君が帝国の第三皇女と一緒の寝室で、あんな事をしているとは思わなかったんでね」

フェイトは素直に自分の非を認めたが、文句を言ってきた。

「まあ、この事はもういい。で、何の用だ？さっさと本題に入れよ」

「実はもうすぐ組織が再始動するんだ。それで君にまた手伝いをして貰いたいんだ」

私はそれを聞き、しばらく黙考した。

そして、

「すまない。今は無理だ」

断った。

「……そうか、理由を教えてくださいかい？」

「今は私の愛する者達の傍に居てやりたいのだ。だから、手伝うことは出来ない。悪いな」

「いや、そういう事なら仕方ないね。今回は諦めるよ」

そう言つと、フェイトは帰ろつと背を向けた。

「だが、手は貸してやるぞ」

私は帰ろうとするフェイトに向かって声をかけた。

フェイトは立ち止まった。

「弟子が出来たら貸してやる。それに暇が出来たら手伝うしな」

「君は本当に変わらないね、スサノオ」

フェイトはこちらに背を向けたままだったが、雰囲気から笑ってる様に感じた。

そのまま、フェイトは転移魔法を使い帰ろうとした。

すると、

「そういえば、一つ聞きたい事があったんだ」

と突然質問してきた。

「何だ？」

「君の愛する者達は闇の福音と第三皇女以外にもいるのかい？」

「ああ、少ないがいるぞ」

「そうか、分かったよ。それが分かれば充分だよ、ありがとう。それじゃ、またいつか会おう」

フェイトが転移しようとした時、

「あ、ちよつと待て」

「ん？何だい？」

転移を中断させた。

「オリジナルからだ。『またコーヒーを一緒に飲もう、親友』だ  
そうだ」

それを聞いたフェイトは最初は驚いていたが、口元に笑みを浮かべると、

「僕も楽しみにしてるよ」

転移した。

私はフェイトがいた場所をしばらく眺めていたが、部屋の中から私のことを寝ぼけながら呼ぶ声が聞こえたので、苦笑しながら部屋に戻った。

とりあえず、事が起きるまでは彼女の傍にいよう。

そう固く心に誓いながら

Side OUT

おまけ

「ん、む、スサノオ？」

テオドラが目を覚ますと隣にスサノオの姿はなく、ベッド脇の椅子に座りながら本を読んでいた。

スサノオはテオドラが起きた事に気がつくと、

「おはよう、テオドラ」と言いながら立ち上がりドアに行き、鍵をかけた。

テオドラは状況がよく分からず困惑した。

「何をしてるのじゃ？」

テオドラの質問に、スサノオは笑みを浮かべながら答えた。

「昨日、あんな中途半端に終わったせいで眠れなくてね。だから、テオドラが起きたら続きをしようって待ってたんだ」

喋りながらもスサノオはテオドラを押し倒した。

ようやく状況を理解したテオドラは、慌てて止めようとした。

「ちよ、ちよつと待て、スサノオ」

「待たない」

「あ、だ、誰か来たら・・・」

「大丈夫、誰も来ないから」

テオドラは完全に逃げ道がない事を悟った。

「クツクツクツ、昨日の分も合わせて今日は一日中相手をしてやるよ」

テオドラにとって死刑宣告に近かった。

「じゃ、いただきます」

その日、部屋のドアが開くことは一度もなかった。



## 外伝 皇女と旧友（後書き）

今回で外伝は終わり！

次回からは、いよいよ本編開始！

久々にエヴァや茶々丸も出ます！

よし、頑張ろう！

あ、ところでちょっと筆休みに番外編シリーズを書こうかなって思ってるんですけど、こんな作品に出してみたいなって思うのがあったらぜひ感想に書いて下さい。

喜んで書きます。

こっちが最優先になるので書くのは遅くなりますが・・・

まあ、何はともあれよろしくお願いします。

**物語の始まりと計画（前書き）**

大変遅くなって申し訳ありません。

ようやく本編開始です。

## 物語の始まりと計画

麻帆良学園

ログハウス

朝

S i d e 茶々丸

朝、私はこの家の誰よりも早く起き、全員分の食事とお弁当を用意する。その後、マスター達を起こし、朝食を取り学園に出発する。

これはマスターに仕える様になってからの日課となっています。

「ん、出来ましたね」

朝食の準備が整った所でマスター達を起こします。

マスターの部屋に行き、

コンコン

「マスター、失礼します」

ガチャ

扉を開けるとベッドにスサノオ様を真ん中にして、両脇にマスターと人型になった姉さんが抱き着いて寝ていました。

・・・羨ましい

はっ!?

い、いえ、別に姉さんみたいに人型に変化出来るようになりたいなんて思つてません!更に、スサノ才様に抱き着いて一緒に寝たいなんて考えてませんから!!

・・・ゴホン、少し取り乱してしまいました。

冷静になった私はベッドへ近づき、三人を起こした。

「マスター、スサノ才様、姉さん、朝です。起きて下さい」

すると、

「・・・」

「・・・」

「ああ、おはよう茶々丸」

スサノ才様は起きていたらしく、すぐに目を開け挨拶を返して下さいましたがマスターと姉さんは相変わらず寝たままです。

「おはようございますスサノ才様。朝食の用意が出来ましたので

起こしに来たのですが・・・」

「二人とも起きないな」

マスターも姉さんもスサノオ様の腕を掴んで離さないで寝続けます。

「仕方ない。二人は私が起こすから先に行つてくれ」

「わかりましたスサノオ様」

二人の事はスサノオ様に任せて部屋から退出し、居間で待っているとスサノオ様が来ました。

「スサノオ様、マスター達は？」

「ちゃんと起こしたぞ。すぐに来るぞ」

そう言うとスサノオ様は席に着き、

「ああ、そういえば今日はジジイに呼ばれてたな」

朝食を食べはじめた。

「あの、スサノオ様？マスターと姉さんを待たなくて良いのですか？」

疑問に思った事を聞くと、

「今日は早めに行く必要があるしな。それに、茶々丸と二人で食

べるのもたまにはいいだろう?」

「・・・／＼／」

とても嬉しい事を言っておきました。もうこれは、あれを言っしかありません。

「スサノオ様、結婚しましょ・・・」

「待て、このポンコツが!!」

残念ながら途中でマスター達が来てしまいました。

「茶々丸!何時も言ってるだろ!スサノオに結婚を迫るな!」

「嫌です」

「くっ、こいつは~~~~!!」

「マスターだけがスサノオ様を独占するのはずるいです」

「だからって結婚を迫るな!」

私達が言い争いをしていると、

「ごちそうさま。それじゃあ、行ってくる」

「いってらっしゃい」

いつの間にか食べ終わり出発しようとしているスサノオ様と見送りをしている姉さんがいた。

「ありがとうチャチャゼロ。エヴァと茶々丸も遅刻しないようにな」

ボタン

そう言うとスサノオ様は出発しました。

「……朝食、食べませんか？」

「……うん」

しょうがないですが、今は朝食を食べて学園に行くことにしましょう。

でも、絶対に何時かはスサノオ様と結婚を……

「茶々丸、何を考えている？」

「いえ、何も」

「嘘つけ！さっきから全部口に出してたぞ！？」

「気のせいです」

とりあえず今はマスターをどうにかして「ごまかさないと」。

Side OUT

Side スサノオ

私はジジイに朝から呼ばれ学園長室に来ていた。

そこでかなりめんどくさい話を聞かされていた。

「ふざけるなよ、ジジイ。以前にも言ったが私はあの馬鹿のガキの事に関わる気はない」

「じゃがのう、ネギくんを補佐してくれる者が必要なんじゃよ」

「知らん」

「うゝむ」

「用が済んだなら私は帰らせてもらおう」

私が帰ろうとした時、部屋に騒がしく近づくと一団が現れた。

その一団は真っ直ぐに学園長室の前まで来ると、

「学園長！」

ドアを蹴破るくらいの勢いで開けた。

開けたのは昔見たことがある様な気がする女だった。その後ろから木乃香と例の赤毛のガキが現れた。



「あれ、スサくん？」

「やあ、木乃香」

「おはようや、スサくん」

「ああ、おはよう。ところで何の騒ぎなんだ？」

木乃香は私に気づくと近づいて来たので、私は木乃香の頭を撫でてやりながら訪れた理由を尋ねた。

ちなみに、木乃香が私を見て何故驚かないのかと言うと、木乃香が中等部に上がり図書館探検部という部活に入った時にバツタリと図書館島で出会ったからである。

その時に一言、『分裂したから』と言って納得してもらった。まあ、木乃香と一緒に居られるなら何でもいいと嬉しい事を言ってくれた。

そんな訳で木乃香とは良く図書館島で会うようになったのだ。

話を戻して、学園長室。

「実は明日菜がな……」

要約すると、なんかめんどくさい事があったそうだ。

「て言うか、あんた誰よ？」

学園長との話しが終わり、私に気付いたのか明日菜が声をかけてきた。

「……」

とりあえず黙って見てみた。

「ちよっ、ちよっと何か言いなさいよ!」

「……」

黙って見続けた。

「う、な、何よ!」

「……」

見続けた。

「う、うっ、こ、木乃香……」

「スサくん、勘弁してあげてや」

明日菜は半分泣きが入ったので、木乃香がストップを入れたので視線を外してやった。

「木乃香、用事は済んだのか?」

「ん、明日菜?」

「終わったわ……色々……」

どうやら終わったらしい

「私は学園長に少し用事があったな。済まないが二人にしてくれないか？」

「分かったわ。明日菜行くで？」

木乃香は明日菜を連れ、

「またな、スサくん」

教室へと帰って行った。

ジジイもガキと話が終わったのかガキは出て行った。

「さてジジイ、反省しようぜ」

私は手を口に変化させた。

「ふお！？な、何故ですか？」

「私が話を聞いていないと思ったか？全て聞いていたに決まっているだろうが。貴様、あのガキを木乃香と同じ部屋にしたな？」

「い、いや、こ、これには訳がありまして……」

「言い訳は制裁した後に聞いてやる」

「ま、待って下さい！やる前に聞いて頂かないと……」

「死ネ」

「ギヤアアアア!!」

学園中に謎の悲鳴が響き渡った。

数分後

「ふん、下らない計画を立てるな馬鹿が」

「うう、酷い・・・」

ジジイから言い訳を聞いたが、下らない計画を立てていたようだ。

「まあ、お前の計画なんかはどうでもいい。とりあえずエヴァの計画を進めるぞ」

「・・・やはり実行するのです?」

「当たり前だ」

「しかし、これがばれた時魔法先生達が怒りますぞ?」

「関係ない。これはエヴァが決め、実行することだ。もし、誰かが邪魔をした時私は絶対に容赦しない。分かったな?」

「分かっております」

「話は以上だ。私は警備に戻る」

私は学園長室を出て、図書館島に向かった。

その道中。私はあることを考えていた。

今回の計画が成功すればエヴァの呪いが解ける。だが、失敗した時の保険も必要だ。

そう考えた私は、保険の準備をすることを決めた。

全ては愛する者の為に

S i d e O U T

## 物語の始まりと計画（後書き）

いや、ようやく本編が始まりました。

ここからは、なるべく短期間で出せるように頑張ります！

経験と約束 図書館島編 前編（前書き）

今回は前編、後編の二つに分けました。

ただ切った箇所が微妙な気が・・・

経験と約束 図書館島編 前編

麻帆良学園

図書館島内部

深夜

S i d e スサノオ

やはり馬鹿の息子は馬鹿だった。

私は保険の準備で目にはしなかったが、エヴァから聞いた所によると着任した日に魔法が一般人にはれたそうだった。

さらに違法の魔法薬であるホレ薬を作り、学園全体に混乱をもたらした。しやがった。

幸いにもエヴァや茶々丸、真名達は無効果する事ができた。木乃香は刹那がお守りとして渡していた特製のお札（私の針を細かく砕いて包んだ物）を持っていたので効果を受けずにすんだ。

だが、あのクソガキは私の大切な者達に危害を加える所だった。それなのにジジイはガキの罪を問わないそうだった。

頭を握り潰しそうな強さで挟みながら理由を聞くと、ガキに色々な経験をさせる為に目を瞑るとのことだ。

・・・ふん、経験だと？



ならタップリと経験させてやるっじゃないか。

私の目は図書館内部に侵入してきた奴らを捉えていた。木乃香に木乃香のクラスメート、そしてクソガキ。

木乃香は別にいい。しかし、木乃香のクラスメートとクソガキは侵入者だ。

ジジイがうるさいが夜の図書館島は私の世界。誰が何と言おうと知ったことじゃない。

さて、早速準備にかかるか。

クッククック、たつぷり苦しませ・・・ゴホン、ゴホン、経験を積ませてやる。木乃香以外。

Side OUT

Side 明日菜

何でこんな事になったんだろう・・・

「いやあああつ!!」

「皆さん、走って下さい!」

「何なのアレ!?!」

「恐竜!？」

私達は追われていた。謎の白い恐竜みたいな生物に。

何故私達がこんな事になっているのか、話は魔法の本の事を聞き忍び込む前に遡る。

朝、私が登校しクラスに行くと今回の期末テストでクラスが最下位から脱出しなければ解散するとか、小等部からやり直す事になると色々な事を聞かされた。その時に魔法の本の話も聞き、夜に忍び込むという事になったのだ。

その際にもう一つ、図書館島に関する噂話も聞いた。

「「「「「図書館島の怪物?」「」「」

「はいです。」

夕映ちゃんが説明してくれた。

「これは学園の七不思議にもなっているのですが、夜に図書館島に行き中をうろついていると突然後ろから物音がして振り向くと・

「「「「「ゴクッ・・・」「」「」

「大きく口を開いた巨大な怪物が自分に覆いかぶさるうとしていたそうです」

「「「「こ、恐っ！！」「」」」

「だから夜に図書館島に入るのは禁止だという話なのです」

「で、でも、噂なんだよね？」

まき絵が怯えながら聞くと、

「いえ、実際に見たという話も聞きますし、他にも巨大な鳥型人間を見たとか雷を纏った虎がいたなど様々な話もあります」

「うわっ・・・」

「あれ？でも図書館探検部って、たまに夜遅くに活動するときあるよね？その時に見たことはないの？」

「んっ、ないわね」

「ないですね」

「ないね」

「ないなっ」

その答えを聞いた私達は安心し、

「やっぱり噂」

「よかった」

夜に忍び込む事を決めた。

そして夜、計画通りに侵入する事ができた。

パルと本屋ちゃんを連絡係に残して中に入った私達は奥に進んだ。

そして出会った。白い恐竜みたいな生物に。

話は冒頭に戻り、相変わらず追われている私達。後ろには最早数えられないぐらいに増えた白い恐竜みたいな生物たち。

「ちょっと、アレ増えすぎでしょ!？」

「いいから走って!」

「ハア、ハア、でも、さ、さすがに、体、りよくがなくなり、  
そう、です」

皆に疲れが見えはじめた時、

「む、アレは何アルか？」

「ドアでござるか？」

私達の前方にドアが見えた。ものすごく怪しかった。なぜならドア

の横に『絶対安全だよ』と書かれた看板が立っているのだ。

「あそこに入りましょう！」

「ものすごく怪しいけどそれしかなさそうね」

「仕方ないアルね」

「怪しいけどね」

「怪しいでござるな」

「い、いいから、は、入り、ま、しょう」

ネギの提案に皆賛成し、ドアに向かった。怪し過ぎるけど他に考えもないのだ。

とりあえずこの行動が正解である事を祈った。

S i d e O U T

ネギ達がドアに入った途端、オウガテイルの群れはドアの前で停止した。

オウガテイル達は空に向かって一声鳴くと、あっちこっちに散らばり何処かに走り去った。

図書館島に静寂が訪れた。

その誰もいなくなり、静かな空間にスサノオは降り立った。

スサノオはドアの前に立ち触って調べた。そしてこのドアを作った犯人を特定すると、ポケットから携帯を取り出しある番号にかけた。

その相手は、

「ジジイ、やってくれたな・・・」

学園長だった。

「申し訳ありません。スサノオ殿」

連絡が来ることが分かっていたのか、すぐに出た学園長は謝罪した。

「転移に幻術か。中々面白い事をしてくれるな。オウガテイルの群れにはガキ共が消えたように見せて、ガキ共はドアで別の場所に転移って訳か？」

「・・・はい」

「何故邪魔をした？私との約束を違える気か？夜の図書館島では私がルールだと言ったはずだ」

「約束を破る気はありません。理由は知っての通り、ネギ君を鍛える為です」

「その為に有りもしない本の噂を流したという訳か」

「はい」

「更に私の邪魔もした訳か」

「・・・はい」

「ハア・・・」

スサノオはため息をついた。

「どうしたものかな」

「スサノオ殿、諦めては貰えないでしょうか？」

「無理に決まってるだろうが」

「でしたら、例の計画の許可を出します。これで何とかならないでしょうか？」

スサノオは悩んだ。元々、計画を実行する為に学園長に許可を貰うつもりだった。なので、今貰えるのであれば儲けものである。

しかし、その条件としてネギ達を見逃すというのも考え物だ。

スサノオはしばらく悩んだ後、

「分かった、その条件でいいだろう」

「おお！ありがとうございます！」

条件を呑んだ。

これでネギ達の安全を確保できたと安心したのか、電話の向こうで学園長は一息ついた。

しかし、スサノオが侵入者を早々と許す訳もなく、

「では、この条件は次回から守ろう」

「はい、分かりまし・・・はっ？次回？ス、スサノオ殿、どういう意味ですか？」

「クツクツクツ、言葉道理だ。この条件は次回から守ろう。それじゃあ、忙しくなるから切るぞ」

「ま、待って下さい！そ、そんな反そ」

ブツッ！

スサノオは問答無用で電話を切った。

「クツクツクツ、ガキ共め、待っている。ここからが本番だ」

スサノオは口元に笑みを浮かべながら手を変化させると、目の前のドアに向け貫通ニードルを連射した。

ドアは学園長の魔法により強化されていたが、連射された貫通ニードルの前では歯が立たず穴だらけになった。

ドアを破壊し、掛かっていた魔法の消滅を確認したスサノオは、ネ



ギ達を追う為に図書館島最深部へと向かった。

一方、学園長室

「むうく、どうすれば・・・」

スサノオをどのようにして止めるか頭を痛くしていた。

その頃のエヴァ家

「何だ、スサノオは今日居ないのか？」

「はい、マスターは仕事で今日は戻られないそうです」

「そうか・・・って、おい！？今マスターの使い方おかしくなかつたか！？」

「すいません、間違えました」

「間違えるのか！？」

「つい本音が」

「茶々丸く、貴様く！」

「ここは危険と判断しました。脱出します」

「待て、茶々丸!!」

結構平和なエヴァ家であった。

経験と約束 図書館島編 前編（後書き）

いや、思った以上に長くなりそうだったので二つに分けました。

後編は早めに出します。

制裁と始動 図書館島編後編(前書き)

すみません！遅くなりました！

次回からは頑張りますので、どうぞよろしくお願いします。

## 制裁と始動 図書館島編後編

Side スサノオ

ここは図書館島最深部にある湖。本来、ここに来られる者は限られている。私か学園長、そしてもう一人が招いた者だけである。

例外は侵入者、つまり私のエサだ。

そして今、私の目は侵入者共を捉えていた。奴らは遊んで、本を読んで、料理をしてと好き勝手にしていた。

ハッキリ言おう。殺してやりたいと。ジジイがうるさいが制裁を加えなければ私の気が済まない。

既に準備は出来ている。侵入者共は気付いていない様だが、周囲一帯はオウガテイルの群れが包囲済みだ。合図一つで奴らをたっぷりと苦しませてやれる。

クツクツクツ、地獄の苦しみを味わうが「えへへ、スサくん」

・・・クツクツクツ、地獄の苦しみ「ん〜、スサくんの匂いや〜」

・・・地「スサくん、どないしたん？」

・・・諦めるか。

「何でもないよ、木乃香」

私は木乃香を撫でながら優しく笑いかけた。木乃香はくすぐったそうにしながらも気持ち良さそうに目を細めた。

さて、なぜ今この様な事になっているのか状況を説明しよう。

私はジジイ製のドアを破壊した後、侵入者のガキ共を追って図書館島最深部に向かった。

そして最深部にある地底図書室でガキ共を見つけた。

私はすぐさまオウガテイルの群れを呼び出して周囲に配置し、地中に潜り待機せよという指示をだした。

ちなみに群れを何処から呼び出したかという隠し部屋から呼んだのである。

この図書館島には私自身が作った多くの隠し部屋や隠し通路が存在し、そこには色々な種類のアラガミが棲息している。群れ単位で。

実はこの事をジジイは知らない。なぜなら公にすると学園の教師共

が騒ぎ出すからだ。

話を戻そう。準備を終えた私はガキ共から見えない所で、どうやって木乃香以外を苦しめるかを考えていた。

その時の私は考え事に没頭し過ぎて、周囲への警戒を怠っていた。

そして、背後に誰かが接近する気配に気付いた時には手遅れだった。

「あれ？スサくん？」

「あつ、木乃香・・・」後ろから現れたのは木乃香だった。

木乃香は最初私が此処にいることに戸惑っていたが、目が段々と輝き始めて、

「スサくんや〜！」

私に飛びついた。

そして今に至る訳である。飛びついてきた木乃香を宥め、友人達に紹介するというのを黙ってもらう様に説得するのは大変だった。

それに木乃香に見つかってしまった為に、周囲に配置した群れを退かせるなどと襲撃を見送らなければいけなくなった。

だが正直な所、木乃香のおかげでイライラとしていた心は大分癒さ

れた。

とはいえ、私はまだガキ共を許す気はない。何としてでも、この夜の図書館島に侵入した罰を与えてやらないと気がすまない。

さて、どうするかな・・・

Side OUT

スサノオが木乃香に捕まっているころ、

「あれ？木乃香は？」

「明日菜さん、これ違いますよ」

「えっ？マジで!？」

ネギ達一行はテストに向け勉強をしていた。

彼らの机の真ん中にはメルキセデクの書が置かれていた。

まき絵は勉強の手を止めると本を手に取り、パラパラとめくった。

「でもさこの本って、本当に凄いやね！持ってるだけで難しかった問題が簡単に解けちゃうんだから!」

まき絵の発言に全員が同意する様に、

「確かに凄いでござるな」



「不思議な本です」

それを見ていた明日菜はネギを引っ張り、耳元で疑問に思っていた事を聞いた。

「ねえ、あれって魔法の本なんでしょ？危なくないの？」

「いえ、強い魔力を感じますが大丈夫です。それに・・・多分僕の予想なんですが、あのメルキセデクの書は・・・」

「ネギ？どうしたの？」

「い、いえ、何でもありません。とりあえず危険はありませんよ」

「ふーん」

それを聞いた明日菜は興味を失い、勉強に戻った。それを見たネギはホッと息はくと、机の真ん中に置かれたメルキセデクの書を見つめた。

（このメルキセデクの書・・・何かおかしい。まるで誰かが無理矢理くつつけたみたいなのがする・・・）

ネギが考え事に没頭していると、

「ネギ坊主、この問題教えて欲しいアルよ」

「あつ、私も！」

呼ばれた事に気付いたネギは一旦は考え事を中断した。

「はい、今行きます」

(今は勉強に集中しよう)

ネギは一旦、この事は忘れて後で考える事にした。

数時間後

「はい、皆さんお疲れ様でした」

「「「「「終わったー!!」「「「「「

ネギの終わりの合図と共に歓声が挙がった。

「あゝ、疲れた」

「やっと終わったてござる」

「これで明日のテストも大丈夫アルね」

全員が喜んでいる隣で夕映だけが不思議そうに周囲を見回していた。明日菜はそれに気付き声をかけた。

「夕映ちゃん、どうしたの?」

「木乃香は何処にいるんですか？」

それを聞いた全員が周囲を見渡したが、何処にも木乃香の姿は見当たらなかった。

「マズイでござるな・・・」

「え？」

「此処には大量のトラップや恐竜みたいな生物がいるのでござるよ？木乃香殿一人では危ないかもしれないでござる」

楓が真剣な顔で語った危険性を聞いたネギは顔を青ざめ慌てた。

「ど、ど、どうしましょう!？」

「落ち着くでござるよ、ネギ坊主」

「で、でも、木乃香さんが・・・」

「落ち着くアル。皆で周りを捜せばいるかもしれないアルよ」

「わ、分かりました」

落ち着きを取り戻したネギは全員で周辺の搜索を開始した。

その頃スサノオは、

「オーイ、木乃香……」

「んー、スサ、く……ん、むにゃ」

木乃香が抱き着いたまま眠ってしまい動く事が出来ないので途方に暮れていた。

大分時間が経ったのでそろそろ木乃香を起こそうかと思った時、スサノオの耳に騒がしい声が聴こえた。

「木乃香！何処？」

スサノオ達のいる所に明日菜が木乃香を捜して向かって来たのだ。

「木乃香、ほら起きろ」

スサノオが強めに揺さぶると木乃香が目を覚ました。

「ん、ん、おはよう、スサくん」

「おはよう木乃香。早速だけど今の状況、分かってる？」

「今の状況？」

木乃香は自分が抱きついていているスサノオを見て、

「あ、そっか、スサくんを抱き着いたまま寝てもうたんやった。ごめんなスサくん、疲れてもうたんやる？」

勘違いした。

「いや、疲れてないから大丈夫だよ。だけどね木乃香、その事じやなくて周りの声を聞いてごらん」

「声？」

木乃香は首を傾げながらも耳を澄ました。そして自分の事を捜している声を聞いて顔を青ざめた。

「あ、わ、あ、た、大変や!？」

「落ち着け」

スサノオが静かに囁くと木乃香はゆっくりと落ち着きを取り戻した。

「落ち着いた？」

「う、うん」

木乃香が落ち着いたので確認したスサノオは、木乃香が寝てから数時間経過している事を教えた。そして木乃香に迎えが来るまで此処で待ち、自分に会った事は誰にも言わない様にと言うと立ち上がった。

「それじゃあ、またね木乃香」

「うん、スサくんまたな」

木乃香に見送られながらスサノオは茂みの奥へと姿を消した。スサ

ノオがいなくなった直後、明日菜が現れて木乃香はネギ達の所へと戻って行った。

ネギ達の所へ戻っている途中、明日菜は疑問に思っている事を聞いた。

「ねえ木乃香、何であんな場所にいたの？」

「ん？ん？とな・・・」

木乃香はスサノオの事を言わないように少し悩んだ後、

「ちよつと散歩しようと思ったんや。そんで疲れて寝てしもうたんよ」

「大丈夫なの？」

「うん、もう大丈夫やで」

ごまかす事に成功した。

そのまま他愛もない話をしながらネギ達のいる湖まで後少しの所まで来た時、

「きゃああああっ！！」

悲鳴が聞こえた。

「な、なに！？」

「今の声ってまき絵!？」

二人は大急ぎで湖に駆け出した。

そして到着した二人が見たのは、自分達を此処にたたき落としたゴーレムとその手に捕まっているまき絵、そのゴーレムと戦っている楓と古菲という不思議な光景だった。

「あ、明日菜さん!木乃香さん!」

二人を見つけたネギが駆け寄って来た。

「よかった!木乃香さん見つかったんですね!」

「ごめんな、心配かけて」

「って、ネギ!あれ何よ!?!どうなってんのよ!?!」

「あ、そうだった!実は・・・」

ネギは二人に事情を話した。ネギの話によると木乃香を全員で捜していたら突然、湖の中からゴーレムが現れてまき絵を捕まえたという事らしい。

ズドンッ!!

ネギの説明が終わったと同時に何かを破砕した音が響いた。

明日菜達が音のした方を見るとゴーレムの足を古菲が殴り、その手からまき絵がこぼれ落ちた。それを楓が空中で助けた。

「皆さん！こちらです！」

突然大きな声が全員にかけられ、声の方を見ると夕映が隠されていた扉を見つけ手を振っていた。

「皆、あそこに急ぐでござる！」

ゴーレムが倒れているのをチャンスと見た楓の指示で、全員が扉に向かって駆け出した。

走っている途中、ネギは机の上に置きっぱなしになっているメルキセデクの書に気付いた。

「あつ、本が！」

ネギは本を取りに行こうと机に向かった。が、その間を塞ぐように地面からオウガテイルが現れた。

「っ！？」

「ネギ！？何してんの！？早く逃げるわよ！」

「で、でも本が！」

「もう無理よ！」

明日菜はネギの身体を掴むと抱えるようにして扉に向かって走り、扉の中に入ると勢いよく閉めた。



そして静寂が訪れた。

「……」

「……」

「おい、いい加減起きろ」

スサノオは倒れているゴーレムの前に現れ話し出した。すると、倒れていたゴーレムが起き上がった。

「これで満足か？本も取り返し、手を出さずに逃がしてまでやったぞ」

スサノオは不機嫌そうに言い放った。

「ありがとうございます。このお礼として約束は必ず守ります」

ゴーレムを学園長室から遠隔操作していた学園長は内心冷や汗ものだった。なぜなら、もしも本が外に持ち出されでもしたら現在修復中の本の魔力が爆発したかもしれないからだ。

それを防ぐために木乃香と別れたスサノオに大急ぎで頼み込み、持ち出されるのを防いだという訳だった。

「で、これはどうする？」

スサノオは隣でオウガテイルが口でくわえている本を指差して尋ねた。

学園長は少し考え、

「元の場所に戻した方がいいでしょう。お願いします」

本をスサノオに任せた。

「それではスサノオ殿、失礼します」

そう言うとゴーレムはネギ達を地上に追い立てる為に彼らの後を追って立ち去った。

それに何故かオウガテイル達もついていき、残ったのはスサノオと地面に置かれた本だけとなった。

スサノオは本を見つめ、

「こんな贗物なら要らないだろ・・・」

呟くと同時に手を変化させて炎の玉を発射した。

炎の玉は本に命中し、本は一瞬の内にして燃え上がった。

スサノオは少しの間その光景を眺めていたが、すぐに目を離してその場から立ち去った。

残されたのは激しく燃え上がる本だけだった。

期末テスト終了の翌日

スサノオの姿は学園長室にあった。

「ジジイ……」

「はい」

「計画を実行する」

スサノオからそれを聞いた学園長は最初は驚きで目を見開いていたが、徐々に落ち着きを取り戻した。

そして、

「分かりました。許可しましょう」

遂に計画が動き出した。

おまけ

「ところでスサノ才殿、本は何処に？」

「……」

「スサノ才殿？」

「……」

「……スサノ才殿？……ま、まさか！？」

シュン！！ 高速で消えた音

「なっ！？スサノ才殿、お待ち下さい！スサノ才殿！！」

その日、学園長室の前を通ると中から爺の泣く声が聞こえたらしい。

制裁と始動 図書館島編後編（後書き）

あゝ、何か長くなってしまった。

次回からはいよいよ吸血鬼編だ！

頑張ります！

後、以前喋った他のシリーズが何故か書けたんですけど・・・見た  
いですか？

見合いと計画始動 吸血鬼編 前編(前書き)

遅くなりました！

すいません、相変わらずの亀更新です。

今回から吸血鬼編スタート！

見合いと計画始動 吸血鬼編 前編

Side 茶々丸

このような事態になると、一体誰が想像できたでしょうか？

いえ、きっと誰にも予想できなかったでしょう。

事の発端になったのは一つの電話でした。

ある休みの日、私達は家でのんびりと過ごしていました。

「手始めに二、三人襲えばいいのか？」

「ああ、噂が流れれば恐らく引っ掛かるだろう」

いえ、訂正します。殺伐としていました。

マスターとスサノオ様は計画の確認に余念がありません。

邪魔に為らないように私と姉さんは隅の方で大人しく座ってました。

「その儀式にはどのくらい血が必要なんだ？」

「少しでいい。だが、あのガキは前に色々とやってくれたからな。制裁を与えてやらんと気が済まん」

スサノオ様が見付けたマスターの呪いの解呪方法には、ネギ先生の血が必要らしいのですが詳しい事は私達にも教えて頂けませんでした。

それにしても・・・

「ん、なんだ茶々丸？」

「いえ、何でもありませんスサノオ様」

今のスサノオ様とマスターの状況・・・見てるとムカついてきます・・・

ミシ

「オイ、妹ヨ・・・ウ、腕ガ・・・」

どんな状況？殺伐とした話をしながらソファーに座ったスサノオ様の膝上にマスターが横に座りながら抱き着いているんですよ？

ミシミシ ビキ

「ウオツ！？キ、亀裂ガ！？イ、妹！カヲ抜ケ！腕ガ割レル！」

許セナイ・・・

「うおっ！？」

「おおっ！？どうしたエヴァ、いきなり跳びはねて？」



「いや、いきなり物凄い殺気を感じた気がするんだが？」

いけない、冷静に冷静に・・・

「大丈夫か？」

ああ、スサノオ様がマスターを心配して優しく背中を撫でて・・・

「ああ、大丈夫だ。ありがとう」

クツ、スサノオ様に更に強く抱き着くなんて！

ビキビキ バギイ！！

「ギヤー！？砕ケタ！？腕ガヤバイ！スサノオ！助ケテクレ！」

姉さんがスサノオ様に助けを求めたのと同時のタイミングで、

「ん？おいスサノオ、携帯が鳴ってるぞ」

スサノオ様の携帯が鳴りだしました。

スサノオ様は携帯に気をとられて、姉さんには気づきませんでした。残念でした姉さん。

「もしもし？ああ、私だがどうかしたのか？」

スサノオ様は電話に出られましたが、電話の相手はかなり親しい人の様ですね。誰なんでしょうか？

そんな事を考えていると突然、

「何！？分かった！すぐに行くから待っててくれ！」

スサノ才様が大きな声を出して驚かれました。今までこんな所は見た事がなくマスターや姉さんも呆気にとられていました。

急いで電話を切ったスサノ才様は、

「少し出かけて来る！」

物凄い速度で飛び出していかれました。

本当にあの電話は何だったんでしょう？

S i d e O U T

スサノ才は凄まじい速度で駆けていた。周囲の物を置き去りにし、ひたすら駆けた。

なぜなら彼に電話をかけた相手は相当焦っていた。つまり危険な状況にあるという事だ。

そう判断したスサノ才は電話の相手 木乃香の待つ場所へと向かって森を飛び越え、建物を飛び越え、人々の間をすり抜け、駆け続けた。

そして、数分もしないで木乃香との待ち合わせ場所に到着したスサノオは木乃香を捜して周囲を探索した。

すると、

「あ、スサくん！こっちや！」

呼ばれて声の方向を見るとそこには和服を着て、まさに大和撫子と  
いった感じの雰囲気を纏った木乃香が手を振っていた。

「木乃香！」

スサノオは急いで木乃香に駆け寄ると、

「木乃香、大丈夫か！？怪我はしてないか！？」

全身を触りだした。

「ちよっ！？ス、スサくん！？そんな所触ったらあかんって／＼」

そのまましばらくスサノオは全身を触り、怪我がない事が分かると満足したように離れた。

「よかった、何処も怪我してない」

「む／＼／＼、だから言うたのに／＼！」

「クッククック、ごめんね」木乃香は顔を真っ赤にしながら文句を言つと、スサノオは余り悪びれもせず  
に笑いながら謝った。

「それで、何があつたんだい木乃香？」

スサノオは呼ばれた理由を聞いた。

「うん、それがな・・・」

話をまとめるとジジイが木乃香に見合いをさせようとして見合い場に連れて行つき、それを嫌がった木乃香が見合い場から逃げたそう。そして、逃げた事がバレて追われていたのでスサノオに助けを求めて電話したという事らしい。

「そうか・・・よしよし、怖かつたる？」

「うう、スサくん」

木乃香が半泣きで抱き着いてきたので、スサノオは頭を撫でてやり木乃香を慰めてあげた。

その心の中では、

「（とりあえず学園は半壊決定だな）」

報復攻撃を考えていた。

するとそこに、

「いらっしやっただぞ！」

「木乃香お嬢様！」

「お嬢様！お戻り下さい！」

黒服の男達が現れた。彼らは木乃香の護衛で、木乃香が逃げたので捜していたのだ。

彼らはスサノオと木乃香の周りを囲み、

「お嬢様から離れる！」

スサノオを暴漢だと判断したのが、木乃香の傍から引き離そうとつかみ掛かった。

スサノオはその手を避けると木乃香を抱き抱え、俗に言うお姫様抱っこをして跳んだ。言葉通りに跳んだのだ。

公園の木々を飛び越え、護衛達からかなり離れた所に降り立ったスサノオは木乃香を降ろし、

「少しここで待っていてくれ」

と言うと再び跳び上がり木々を跳び越えて先刻までいた場所へと戻って行った。

「あれ？木乃香さん？」

スサノオが跳び去ってすぐにネギが現れた。この日、ネギは勘違いした2-Aの面々に追われて逃げていたのだ。

「あ、ネギくん」

「どうしたんですか木乃香さん、こんな所で？」

「ん〜、待ち合わせしてるんや」

それを聞いたネギはもしかしたらと尋ねた。

「もしかしてデートですか？」

木乃香は少し残念な顔して笑った。

「だったらよかったんやけどね」

そのまま木乃香がネギと話していると、

「お嬢様！」

バタバタと大勢の黒服達が木乃香に向かって走ってきていた。

それを見た木乃香はスサノオを呼ぼうと声を出そうとした時、

「スサ」「うわっ！いつぱい人が来た！木乃香さん逃げましょう！」

ガシッ

「えっ？わわっ！？ネ、ネギくん！？」

ネギに手を掴まれその場から連れていかれてしまった。

その光景を呆気にとられて見送った黒服達は、慌てて後を追いかける様子と動き出した。

そこに、最初に出会った黒服達を行動不能に追いやったスサノオが戻ってきた。

「お待た、せ、木乃、香・・・」

黒服達は固まり、スサノオもまた固まった。

スサノオは周囲を見渡し木乃香がいないと分かると、黒服達に殺気を出しながら質問をした。

「おい、木乃香は何処だ・・・」

黒服達は殺気を受けて上手く喋れないながらも事情を話した。

「木、木乃香お、お嬢様は、あ、赤毛の子供に連れ、連れてかれた」

「ちっ！」

スサノオは舌打ちをすると彼らに背を向け、

「お前ら以外の奴らはあっちでぶっ倒れてるから回収しておけ」と言つと再び高く跳躍してその場からネギを追って消えた。

「で、遺言は？」

「ま、待つて下さい！これには訳があるのです！」

あの後ネギ達を追っていたスサノオの携帯に、木乃香から寮に戻ったからもう大丈夫という連絡が入り、スサノオは今回の元凶である学園長を襲撃したのだった。

「休日なのにエヴァ達とは過ごせず、木乃香とも過ごせず、ガキには逃げられる・・・ここまで怒りが溜まったのは何十年ぶりだろうな」

「も、申し訳ありません！こ、今回の見合いは相手方のミスで起こったのです！ネギくんに関しては嚴重に注意しておきますので、どうか許して貰えないでしょうか？」

スサノオは黙って俯いたまま部屋の中央へと移動した。学園長は緊張した面持ちでスサノオの決定を待った。

「いいだろう」

「おおっ！！ありがとうございます！」



「ただし、交換条件に計画を今日から実行する」

「・・・分かりました」

スサノオは用は終わったと学園長室を出ようとした。

ふとスサノオは立ち止まると、

「そう言えば、ガキは許したがお前には罰を与えないとな」

と言うと部屋の中央に淡くピンク色に発光する球体が現れた。

「なっ！？スサノオ殿！？」

「いや、木乃香がきつつい罰を与えておいてくれて頼むからな。  
まあ、・・・受けとけ」

ボタン

「スサノオ殿ーーーー！！」

スサノオが外に出て扉を閉めた瞬間、

カッ！！！！

ズドンッ！！

部屋の中に閃光が走り学園に衝撃が響いた。

夜 桜通り

「はあ〜」

「マスター、十回目の溜め息です。いい加減やる気を出して下さい」

エヴァと茶々丸は桜通りにいた。

二人は計画の第一段階である『事件を起こす』という作戦を行っていた。今も二人の目の前には今回の犠牲者でクラスメートのまき絵が倒れていて計画は実行されていた。

が、エヴァは全くやる気がなかった。

なぜなら休日なのにスサノオとは一緒に過ごせず、夜になっても戻って来ないで電話で「計画を実行しろ」と指示されただけで会えなかったからだ。

その為余りにもやる気がなくて、まき絵が通った時も茶々丸が後ろから襲って捕獲するといった全く吸血鬼らしくない方法になってしまったりしたのだ。

「マスター、とりあえずノルマの一人は襲いましたしネットの情報操作で噂も流れる様にしたので戻りませんか？」

「うん・・・」

余りにも無気力で幼児化し始めたエヴァに困った茶々丸は、

「帰ったらスサノオ様と一緒に眠られたらどうでしょうか？」

一つ提案をした。すると、

「っ！そうだな！そうしよう！よし、帰るぞ茶々丸！」

もの凄い元気になった。

茶々丸は倒れていたまき絵をベンチの上に寝かせるとエヴァに連れられ帰った。

エヴァ宅

家に戻り、パジャマに着替えたエヴァはスサノオの部屋へと向かった。

「お帰りエヴァ」

「スサノオ！ただい、ま・・・」

勢いよくドアを開けたエヴァはその場で固まった。

「マスター？どうかしましたか？」

不思議に思った茶々丸がエヴァの後ろから中を覗くとそこには、

「ん〜」

スサノオと同じベッドには木乃香が寝ていた。

茶々丸は固まっているエヴァの代わりに質問をした。

「あの、スサノオ様？なぜ木乃香さんが？」

「プチ家出だそうだ」

実はエヴァ達が出ていて居ない間に木乃香が訪れ、話している内に泊まる事になったのだ。

「まあ、そういう事だから今日は一緒に寝れないから。悪いな」

そついうとスサノオは木乃香を抱きかかえて眠りについた。

茶々丸は今だに固まったままのエヴァを担いで寝室に向かった。

こうして波乱な一日が終わった。

しかし、計画はまだ始まったばかりである。

見合いと計画始動 吸血鬼編 前編（後書き）

あゝ、すいません！

更新速度が上がらない〜！

でも皆さん、ご安心下さい。作者は絶対に途中放棄はしません！お約束いたします。

後、別シリーズを上げましたのでよかったですらそちらも宜しくお願ひします。

日常の一時と加速する物語 吸血鬼編 中編 上(前書き)

何故か中編が二つになっちゃったので上下としました。

日常の一時と加速する物語 吸血鬼編 中編 上

朝 エヴァ家

「うゝ、くそゝ、うゝ」

エヴァは不機嫌だった。

その理由は昨日の出来事と今、目の前で起きている事が原因だった。

「はいスサくん、あゝん」

「んっ、うまい」

「そう？よかったわゝ」

木乃香がスサノオに朝食を食べさせているのだ。

昨夜、木乃香は家出をしたと言って家に来て泊まりスサノオと一緒に寝た。そのお礼にと朝食を作ったのだ。

「こんなに美味しい料理が作れるんだから、木乃香はいいお嫁さんになるね」

「もう、スサくん恥ずかしいわゝ／／／」

「いや、本当にいいお嫁さんになるよ」

「だったらスサくんが貰ってくれる？／／／」

「どうしようかな？」

と、二人が見つめ合い周囲にラブラブな雰囲気を展開しているテールの反対側では、

バキッ！！ バキッ！！

同時のタイミングでエヴァと茶々丸が持っていた箸を粉々に握り潰した。

二人は目だけで相手を射殺す事ができるのではないかと思うくらいの威圧感を前方の二人に発していた。

一方はイチャイチャと暑苦しく、もう一方は全てが凍り付くぐらい冷えきっている、そんな状況を離れた安全な所から眺めていたチャチャゼロは、

「・・・少シ寝ヨ」

何も見なかった事にしてこっそりと、寝室へと戻って行った。

朝食が終わりエヴァ達が学園に行ったので暇になったスサノオは、同じく暇にしていたチャチャゼロを連れて散歩に出かけた。

二人が麻帆良内をふらついていると、スサノオの携帯が鳴った。

「もしもし？」



「スサノ才殿、儂です」

電話の相手は学園長だった。

「何だ、お前か」

「何だとは酷いですな。少し時間を頂けませんか？」

「理由は？」

「計画についてです」

「・・・分かった」

スサノ才は携帯を切るとチャチャゼロに先に戻っている様にと告げると、学園長室へと向かった。

学園長室

「だから言っただろ、計画については教える事は出来ない」と

カチカチ

「分かっています・・・あの、スサノ才殿？」

「それにお前達魔法使い側の計画にエヴァを参加させてるんだぞ

？むしろ感謝して欲しいくらいだ」

ガパツ　　ガサガサ

「その件には感謝しています。ですが、この学園の安全の為にも貴方の計画を教えて貰いたいのです・・・スサノオ殿、何を？」

「とにかく無理だ・・・ふん、やっぱりか」

スサノオは金庫の中の機密書類を漁るのを止めて、数枚の紙を手を持っていた。

「スサノオ殿、それは機密書る」「本国からの機密命令だろ。どうせ今回の茶番で私やエヴァを殺せと言ってるんだろ？見なくても分かるさ」

スサノオは持っていた紙を学園長の前に広げた。

「・・・」

学園長は黙ってその書類を手を取った。

「先に言っておく、連中が来るなら来させる。私が奴らを迎え撃つてやる。それにこれはチャンスだ。私達に反対している連中を一気に片付けられるからな」

そう言うとスサノオは学園長室のドアに手を掛けた。

「まあ、殺られる前に殺るだけさ」

それだけ言つとスサノオは学園長室を後にした。

スサノオが家に帰った頃には既に深夜だった。

「ただいま」

スサノオは玄関からリビングに向かった。

「お帰りなさい、スサノオ様」

「ただいま、茶々丸」

リビングには茶々丸一人だった。その事に疑問を持ったスサノオは、

「茶々丸、エヴァはどうしたんだい？」

茶々丸に尋ねた。

「マスターはお部屋にて休まれています」

「そうか・・・何か有つたのか？」

茶々丸の言い回しに疑問を持ったので尋ねると、

「本日、マスターは計画通りに桜通りでネギ先生を襲撃しました。そこに突然、神楽坂さんが現れマスターに飛び膝蹴りを決めたので

す  
」

「・・・それで？」

「マスターは撤退をされました」

「そうか」

スサノオは少し悩んだ後、

「あつ・・・」

「とりあえず今日はお疲れ様、茶々丸」

茶々丸の頭を優しく撫でた。

「あ、ありがとうございます／＼／＼」

「それじゃあ、私はエヴァの所に行くよ。おやすみ茶々丸」

「はい、おやすみなさいスサノオ様／＼／＼」

スサノオは茶々丸と別れるとエヴァの部屋の前に向かい、ドアをノックした。

コンコン

「誰だ？茶々丸か？」

「私だよエヴァ」

「っ！？スサノオか！？」

「入ってもいいかな？」

「ま、待つて！い、今は、その・・・」

スサノオはエヴァの制止を無視してドアを開けた。

「ス、スサノオこれは、その・・・」

部屋に入ったスサノオが目にしたのは、ベッドの上で真っ赤に腫らした頬を氷で冷やしているエヴァの姿だった。

スサノオは真っ直ぐベッドに向かいエヴァの隣に座ると、冷やしていた氷を退けて腫れた方の頬に手を添えた。

「痛くないか？」

「だ、大丈夫だ。少しヒリヒリするけど・・・」

スサノオは頬に手を添えながらエヴァを後ろから抱きしめた。

「今日はよくやったよエヴァ。ゆっくり休んでくれ」

「う、うん。あの、スサノオ今日一緒に寝てくれる？」

エヴァはスサノオに上目遣いで頼んだ。

スサノオは優しく笑いながら、

「喜んで」

エヴァの額に軽くキスを落とした。

その日、二人はお互いを抱きしめ合いながら眠った。

寝ているエヴァの顔には幸せそうな笑顔が浮かんでいた。

翌日

「それじゃあ、行ってくる」

スサノオは用事の為しばらく麻帆良の外に出かける所だった。そして出発するため玄関にいた。

「はい、お気をつけてスサノオ様」

茶々丸は何時ものように玄関でスサノオを見送っていた。

「・・・」

珍しく普段は見送りこないエヴァも来ていた。

「どうしたエヴァ？」

黙っているエヴァを不思議に思ったスサノオが尋ねると、

チュ

キスをされた。

以前は何時も当たり前のようにはしていたが、茶々丸が来てからはエヴァが恥ずかしくなってしまう止めていたのを何故かエヴァからしてきた。

「い、いってらっしゃい／＼／＼」

エヴァは顔を真っ赤にしながら見送ってくれた。

スサノオは少し驚いたがすぐに微笑み、

「いつてくるよ」

チュ

エヴァにキスを返すと出発した。

「ぶはあゝ、苦いなあ」  
「コレは」

麻帆良から離れた都市の喫茶店にスサノオはいた。

スサノオが此処にいるのは計画の為だった。そして、この計画の重要な役割を持つ人物と今日合うために此処に来ていたのだった。

スサノオがコーヒーの苦さに苦勞し砂糖を大量に入れていると、

「相変わらずだね君は」

待ち人であるフェイト・アーウエルンクスが向かいの席に座った。

「久しぶりだな、フェイト」

「久しぶり・・・なのかな？京都で君の分身と会ったのは三日前  
なんだけどね。ああ、コーヒーを注文してくれてたんだ。ありがとう  
う」

しばらく二人は他愛もない話をした。

「さて・・・」

フェイトは飲んでいた七杯目のコーヒーをテーブルに置いた。

「今日僕を呼んだ理由を聞かせて貰おうか」

スサノオも飲んでいた紅茶（コーヒーは諦めた）を置いた。



「実は今ある計画を実行しようとしているんだ」

「計画……それは僕を呼ぶ必要があるんだね？」

「そうだ。お前達『完全なる世界』のある物を貸して欲しいんだ」  
フェイトは顎に手を当てしばらく考えると、

「なるほど……君の行おうとしている事が分かったよ。僕を呼んだ理由もね」

「詳しい話はとりあえず此处を出て別の場所でしょうか」

二人は店を出ると近くの公園に向かった。

公園でスサノオは歩きながらフェイトに計画の全貌を語った。

「なるほど、確かに大掛かりな計画だね。しかし、力任せに術を使うだなんて千の呪文の男も面倒な事をしたものだね」

「あいつは馬鹿だからな。仕方ない」

「確かにそうだね。いいよ、その計画に協力するよ」

全ての話を聞き終えたフェイトは協力を了承した。

「ありがとうフェイト」

「ただ僕の計画にも協力してもらおうよ？」

「いいぞ、昔みたいに手伝うさ」

公園の出口に来た二人はここで別れることにした。

「それじゃあ停電の日にまた会おう、スサノオ」

「ああ、準備して待ってるよ」

フェイトは挨拶をすると街の方に歩いて行った。

フェイトを見送ったスサノオは麻帆良に帰ることにした。

「なっ!?!」

「お帰りなさいませ、スサノオ様」

二日ぶりに麻帆良に帰ってきたスサノオは目の前の光景に驚愕した。  
なぜなら、

「ちや、茶々丸・・・お前腕をどうしたんだ!?!」

スサノオを出迎えた茶々丸の片方の腕が失くなっていたからだった。

日常の一時と加速する物語 吸血鬼編 中編 上（後書き）

吸血鬼編も後少しか・・・

息抜きの感じで書いてるリリカルの方に物凄く力が入っちゃうんだよな。

うん、頑張って両立させないといけないか。

話された理由と戦いの準備 吸血鬼編 中編 下(前書き)

・・・忙しいし、相変わらず亀だし、悲しくなってくる。

「茶々丸！？何故腕が！？」

「・・・」

スサノオは茶々丸の肩を掴み尋ねたが茶々丸は答えなかった。

スサノオは茶々丸の残っている手 左手を掴んで急いで家の中に入った。

家に入ったスサノオは居間にいたエヴァに訳を聞いた。だした。

「エヴァ！何があつたんだ！？」

「スサノオ・・・分からないんだ」

エヴァも茶々丸が教えないので理由を知らなかった。

椅子に茶々丸を座らせたスサノオは右の腕が失くなった理由を聞いた。

「茶々丸、教えてくれ。なぜ腕が壊れたんだ？しかも何故理由を言わない？」

「・・・言えませんが」

茶々丸は頑なに理由を話そうとはしなかった。

このやり取りは居間に入る前も入った後も何度も繰り返されていた。

スサノオは一旦尋ねるを止めて、しばらく茶々丸を見つめた後、

「……エヴァ、腕の修理はどうなっている？」

「えっ？……博士と超が急ピッチで取り組んでいるが、出来るのは明日だそうだ。それがどうかしたのか？」

突然エヴァに質問した。

「二人に連絡しておけ。明日、茶々丸の腕の修理のついでにフルメンテを行うと」

「なぜだ？」

「その時に茶々丸のメモリーチップから腕が壊れた時の映像を見るためだ」

「「!？」」

エヴァと茶々丸は驚愕した。まさかスサノオがそこまでやるとは思わなかったからだ。

「スサノオ、それは……」

「茶々丸が教えてくれないなら、私はやるつもりだ」

「……」

茶々丸は驚きで何も言うことができなかった。

正直な所茶々丸は内心嬉しかった。自分が好きな人が自分の事でここまで怒り、そして心配してくれていることに。

しかし、もし真実をスサノオが知ってしまったら・・・

「・・・分かりました」

茶々丸は悩んだ末にスサノオとエヴァに話すことにした。

「ですが、それには一つだけ条件があります」

「・・・何だ？言ってみろ」

「あの・・・その・・・」

茶々丸は少し躊躇すると、

「絶対に・・・絶対に報復行動だけはしないで下さい！お願いします、スサノオ様！」

スサノオに懇願した。

その光景をエヴァは驚きながら静かに見守っていた。

エヴァは茶々丸がここまで相手を庇う理由は分からないが、スサノオに懇願する理由は理解できた。

もし、約束をしないで全てをスサノオに話してしまったら間違いな

くスサノオは相手に対して報復攻撃を行うだろう。

その余波で学園は半壊し、犠牲者はかなりの数になってしまう。

茶々丸はそれを回避したいのだろう。

エヴァが思考に沈んでいる間もスサノオは何も言わず、ただ茶々丸を見つめていた。

スサノオは茶々丸の目を見つめ、茶々丸も怯まずにスサノオの目を見つめ返した。

そのまま時間が経ち、五分以上は経った頃、

「仕方がない・・・いいだろう、報復はしないと約束しよう」

「あ、ありがとうございます！感謝します、スサノオ様！」

「ただし、内容によっては・・・分かってるな？」

「はい・・・」

そして茶々丸は自分の身に何が起きたのかを語りだした。

「なるほど・・・つまり、襲われたことに恐怖した坊やが誰かの



入れ知恵で茶々丸を襲撃、坊やが仮契約している神楽坂が茶々丸を抑えている隙に坊やが魔法を詠唱して魔法の矢を発射、茶々丸に当たりそうになった瞬間に急に角度が変わり右腕に直撃し大破した。その後、隙をついて茶々丸は撤退。まとめるとこんな所か？」

「はい、その通りですマスター」

「……」

「スサノオ、落ち着け」

エヴァはスサノオを落ち着かせようとした。

なぜなら、家が軋むような音を出すくらいの殺気をスサノオが出しているからだ。

「……エヴァ」

「ん、何だ？」

突然スサノオは殺気を出すのを止めてエヴァを呼んだ。

「……少し疲れたから私は休むよ」

そう言い残し、スサノオは寝室に行ってしまった。

エヴァと茶々丸はそれを見送ることしかできなかった。

部屋に入ったスサノオはベッドに倒れるように横になった。

そして小さな声で、しかし力強く呟いた。

「殺してやる・・・私の大切な者を傷つけた奴は全員・・・殺してやる」

翌日

早朝にエヴァ家を訪れる者達がいた。

「良く来たな超、葉加瀬」

訪れたのは茶々丸の生みの親と言える超 鈴音と葉加瀬だった。

「茶々丸は何処ですか!？」

葉加瀬が物凄い剣幕でエヴァに迫った。

「い、居間で待っているから、お、落ち着ついて」

「落ち着ける訳ないじゃないですか!?!」

「そ、そうだな・・・」

「それじゃあ失礼します!?!」

葉加瀬は家の中に飛び込む様に入っていった。

「は、速い・・・」

「悪かったネ」

呆然としているエヴァの横に超が立った。

「でも仕方ないヨ。茶々丸が腕を壊したと聞かされて一番心配したのは葉加瀬ネ。直ぐに腕の製作に入って一日で仕上げられたのは葉加瀬の力ヨ」

「まあ、感謝してるさ」

二人も居間へと向かった。

「そういえばスサノオはどうしたネ？」

「部屋に居ると思うが」

「呼んだか？」

「「「うわっ!?!」」」

二人の後ろに突然スサノオが現れた。

「客が来たから出迎えに来たぞ」

「だからって後ろに突然現れないで欲しいネ」

「はあく、いいから二人とも茶々丸の所に行くぞ」

三人が居間に入るとそこには、腕を修理し終わった葉加瀬と完全に直った茶々丸がいた。

「直ったのか？」

「あつ、スサノオさん。こんにちは」

「スサノオ様・・・」

スサノオは茶々丸に近付くと、

ギュッ

「へっ？」

「なっ!？」

「おお、凄いネ」

優しく抱きしめた。

「す、スサノオさ、様／＼／＼!？」

居間にパニックが起きたが、スサノオ本人は構うことなく茶々丸を抱きしめ続けた。

「よかったな、腕が直って」

スサノオは茶々丸に優しく話しかけた。

「あ、あり、ありがとうござ、います・・・／＼／＼」

茶々丸は嬉しさと恥ずかしさからショートを起こしかけていた。

スサノオは笑いながら茶々丸を離した。

そしてエヴァに向き直ると、

「エヴァ、少し出掛けるから」

「あっ？あ、ああ、分かったよ」

そう言い残してスサノオは居間を出て、玄関に行った。

すると玄関には超がいた。

「私は貴方に少し用があるから一緒に行くヨ」

「好きにしる」

二人はエヴァ家を出て学園へと足を進めた。

しばらく互いに何も話さず歩いていたが、途中で超が話しかけてきた。

「要望通りに茶々丸の右腕には色々と細工したヨ。葉加瀬はこの事知らないネ」

「助かる」

「要望通りやったから私の方も頼むネ」

「図書館島の秘密部屋の増築だろ？分かっている」

「それとスサノオの荒神は絶対に近付けちゃ駄目ヨ？」

「何故だ？」

「当たり前ネ！」

スサノオの質問に超は少し怒り気味になった。

「何体のロボットが荒神に食べられたと思うネ！？三万体はいたのに気付いたら二万五千体ヨ！？減りすぎヨ！」

「悪いな、あいつらつまみ食いが好きだからな。注意しとくよ」

「大型の方もネ！十体いたのに八体になってたヨ！？」

「分かった分かった、あいつらは近付けないから」

「約束ヨ？」

「ああ、約束だ」

超はスサノオと約束した後、研究所に行くとスサノオとは途中で別れた。

そして、スサノオは目的地である学園長室の前に辿り着いた。

コンコン

ドアをノックすると、

「どうぞ、スサノオ殿」

中から学園長の声がした。

スサノオはドアを開けて学園長室に入った。中には学園長と高畑・T・タカミチが居た。

「どうもスサノオさん、お久しぶりです」

「久しぶりか？二週間前にも会った気がするが・・・まあいいか」  
スサノオは高畑との会話を切り上げて学園長へ向き直ると、学園長に殺気を込めて睨みつけた。

「私がいに来た理由は分かっているな？」

「はい」

「お前の計画では被害はでないと私に言っていたな？」

「・・・はい」

バンッ！！！！

「なら、何故茶々丸の腕が破壊された!? 一つ間違えれば茶々丸は死んでいたんだぞ!？」

スサノオは激昂し拳を学園長の机に叩き付けた。

タカミチは慌ててスサノオを宥めようとした。

「待つて下さい。あれはネギ君の相談役が考えた作戦だそうで、ネギ君は無関係……」

「無関係な訳があるか!! 作戦を考えたのが別の者だとしても結局そいつの言う通りに実行したのはガキ自身だろうが!」

スサノオはタカミチのネギを擁護する意見を切り捨てた。

「ジジイ、私は我慢の限界だよ。これ以上そちらの茶番劇には付き合えない。私は自由にやらせてもらっぞ」

学園長はしばらく黙考してから口を開いた。

「それは……スサノオ殿の計画をという意味ですか?」

「計画とガキに対する報復だ」

「なっ!? 待つて下さいスサノオさん! ネギ君に対して貴方が行動を起こすと他の魔法先生達が黙っていませんよ!？」

「それについての返答は既に行っているさ」



話は終わったとスサノオは学園長達に背を向け、部屋から出ていった。

タカミチはスサノオが出ていくと学園長にスサノオの返答について質問した。

「学園長、スサノオさんは何て言ったんですか？」

「『来るなら来させる。殺られる前に殺るだけだ』」

「えっ？」

「・・・スサノオ殿は今回のネギ君を育てる計画を利用して、自分に反対する者達をおびき出して一掃しようとしておるのじゃ」

「なっ！？学園長は知っててそれを許してるんですか!？」

「もちろん許してはおらんよ。しかし、本国では今回の計画中に極秘裏にスサノオ殿やエヴァを抹殺しようという動きがあつての。その部隊が停電の日に侵入するから迎撃の許可は与えておるのじゃ」

「つまり・・・」

「こちらが手を出さなければスサノオ殿は手を出さない。だからスサノオ殿は出させようとしておるのじゃ」

「なるほど・・・手を出さなければこちらに被害はないがネギ君が危ない。逆に手を出すとスサノオさんの攻撃に正当性を与えてしまふという事ですね？」

「その通りじゃ」

「難しい問題ですね」

「全くもってその通りじゃよ。ふう……タカミチ君」

「はい」

「他の先生達を呼んでくれるかの？緊急の会議を開かなければならんからのう」

「分かりました」

タカミチは部屋から出ていった。

部屋に一人になった学園長は席から立ち上がると、窓辺に近付いた。

窓からは大勢の生徒が登校する姿が見えた。

その光景を眺めた学園長はある決心をした。

「僕は子供達の安全を守らなければならない。そのためなら全ての物を利用する……これは貴方に教わった事ですぞ、スサノ才殿」

学園長は席に戻ると机に置かれた電話を手に取り、ある相手に連絡をとった。

「もしもし、儂です。実は例の件についてなのですが……」

一方、学園長室を出て帰路についていたスサノオもフェイトに連絡をしていた。

「フェイト、計画についてなんだが・・・」

二人はそれぞれの相手と計画をたてた。

そして、

「決行日は停電の夜、結界が消えた時に」

全ての役者が揃う。

話された理由と戦いの準備 吸血鬼編 中編 下（後書き）

いよいよ吸血鬼編も最後に近づきました！

いや、時間がなくて大変だ。

とりあえず今年は後リリなのも含めて二回出せれば上出来か？

・・・よし！頑張ろう！

後、感想をお待ちしています。

動き出した者達 吸血鬼編 後編 上(前書き)

お久しぶりです！

という訳で吸血鬼編の後編の始まり始まり！

動き出した者達 吸血鬼編 後編 上

麻帆良学園停電の日

この日はメンテナンスの為に麻帆良全体を覆う結界が消えてしまう。そこを狙って侵入者が増大する日でもある。

学園側も魔法先生達を動員して侵入者の迎撃を行う。これが例年通りの流れのはずだった。

だが、今回だけは様子が違った。

侵入者達は麻帆良学園に近づけないでいた。いや、それどころか麻帆良の地に近づけないのだ。

その理由は、

「ぎゃあああああ!!」「う、腕がつ!?俺の腕が喰われた!?!」「何なんだ!?!あの化物共は!?!」

大量の荒神の群れが麻帆良の地から出現し、周辺地域に向かって進撃しているからであった。

「クソツッ!喰らえ!この化け物共め!」

侵入者の一人が魔法の矢を進撃する荒神 オウガテイルの群れに連射した。

矢はオウガテイル達の頭部を目掛けて飛来し、頭や口、逸れた物は胴体などに命中した。

「へへッ！ざまあみる化け物が！」

魔法の矢が命中したオウガテイルは身体に穴が空き倒れた。

男の仲間達も最初の攻撃から態勢を立て直して、オウガテイルの群れに反撃を始めた。

多数の魔法の矢がオウガテイル達を襲った。

魔法の矢が群れに着弾するかと思われたとき、

ズドンッ！！

ガガガガガガッ！！！！

群れの前に巨大な獣が何十匹も降って来た。獣は魔法の矢を自らの身体でオウガテイル達への攻撃を防いだ。

「なっ！？」「なんだアレは！？虎か？」

現れた獣の正体はヴァジュラだった。

ヴァジュラ達は雷球を五つ前方に展開させると、一斉に発射した。

お返しとばかりに大量の雷球が侵入者に襲い掛かった。

バリバリバリバリ！！！！

「ぎゃああああ!!」

ドサッ

雷球が直撃した男は黒く焦げて感電死した。

男の仲間も次々に感電した。また、押されていたオウガテイルの群れも一斉に尻尾を振り、尻尾から巨大な針を連射した。

大量の針が上空に打ち出され、空を覆い隠す光景は圧巻だった。

針はその区域の地上の周辺一帯に雨の様に降り注いだ。

そして、針の雨が止んだ時には生きている人間は一人もいなくなつた。

グオオオオオオオ!!

荒神達は雄叫びをあげながら前へと進み始めた。

その様子を魔法を使って見ている者達がいた。

学園長室

「やはりの。スサノオ殿は最初から大量の荒神を麻帆良の周りに隠していたようじゃ」



「スサノオさんの荒神の群れは大型の物も出現してかなりの規模になりました」

学園長とタカミチは冷静にしているが現在の麻帆良の状況に内心焦っていた。

なぜなら、

「何も知らない魔法生徒や今回の作戦に参加してない先生は気付いていませんがこれは……」

「うむ。完全に囲まれてしまったのう」

麻帆良の地は完全に荒神によって囲まれていたのだ。

実はスサノオは学園側がネギを逃がすのではないかと考え、それを阻止するために包囲網をしいたのだ。

陸はオウガテイル、ヴァジュラを中心とした荒神の群れで包囲し、空は大量のサイゴート、更にサリエルが飛び回っていて誰も麻帆良から出ることが出来ない状況を作り出したのだ。

だが、スサノオが行っているのはそれだけではなかった。

「ッ！学園長、また侵入者が！」

「完全にスサノオ殿の手の上じゃの……」

スサノオは侵入者の一部を素通りさせていた。

そうする事で学園側に迎撃の為の要員を出させて動けなくさせているのだ。一見スサノオが全てを支配しているかの様に見えたが、一っただけ学園側が先手を打った事があった。

「タカミチ君、ネギ君の結界はどうかね？」

「今の所はうまく稼動しています。ですが、戦闘が始まったら結界は持ちませんよ？」

学園側は秘密裏にネギにある特殊な魔法をかけ、結界を張っていた。

その結界は、特定の相手には姿が見えない様にさせるといった効果があった。

ただし、使用されている者が攻撃的な魔法を使うと結界が壊れるという欠点もあった。

「これは時間稼ぎにしか過ぎんよ。ネギ君がエヴァと戦える時間を稼げればいいのじゃ。それで、スサノオ殿は見つかったかの？」

「はい。連絡によると世界樹の広場にいるそうです」

「では、始めるとするかの。他の先生にも連絡をとり世界樹の広場に集合を。後、関係のない先生や生徒は近づけないようにの」

「分かりました」

学園長の指示を聞きタカミチは部屋からでていった。

学園長も部屋から出ようとドアに近づいたが、途中で立ち止まった。

「……スサノオ殿相手に我々はどのくらい持つかの？」

学園長は自らに問うように呟くと部屋から出ていった。

だが、現在の麻帆良の状況を見て動き出したのは彼らだけではなかった。

麻帆良近郊の山

上空

「クソッ！化物が空にも地上にもウヨウヨといやがるぜ！」

「隊長、本国は何と？」

「このまま騒ぎに紛れて実行せよとの事だ」

上空で麻帆良を監視しているのはメガロメセンブリアから派遣された暗殺部隊であった。

彼らの目標は、闇の福音 エヴァンジェリンと神ヲ蝕ムモノ スサノオの二人だった。

「隊長、目標二人の位置が分かりました。闇の福音は学園に向かって移動中、神ヲ蝕ムモノは世界樹の広場に居ます。どっちを先に殺りますか？」

偵察を行っていた隊員が目標の現在位置を隊長に報告した。

暗殺部隊の隊長は報告された内容に少し考え込み、

「神ヲ蝕ムモノに対して学園側が動くとの情報が入っているな・  
・よし、闇の福音を先に片付けるぞ！」

「了解」「了解」「了解」

エヴァを第一目標に定めた。

「全員、行くぞ！」

部下5名を引き連れ、暗殺部隊は更に高々度へと飛び上がって行った。

部隊が飛び去ってから数分後、

「やれやれ、やっと動いたね・・・」

部隊が待機していた地点に現れる人物がいた。

「まったく、彼らもなかなかやるね。注意深くて後を付けるのも  
苦労するよ」

その人物の正体はフェイトだった。

フェイトは学園に侵入する部隊を尾行していた。

何故フェイトが部隊を尾行しているのかというと、二つ理由があった。

一つはスサノオの為に部隊の動向の監視。

フェイトにとってスサノオは大切な友人だった。その友人や友人の大切な人が狙われているとなれば、助けない訳にはいかない。

なので、フェイトは部隊をメガロメセンブリアから尾行し続け、もし部隊がスサノオやスサノオの大切な人達を襲おうとしたら背後から一気に始末しようと考えて動いていたのだ。

そしてもう一つの理由は、安全に麻帆良に侵入するためだった。

現在、麻帆良学園は停電の為に結界が作動していない代わりに大勢の魔法先生や生徒が学園の防衛に活動しており、更に侵入者にスサノオの大量の荒神と混沌とした状況下にあった。

スサノオの荒神は味方なので問題ないが、他の侵入者や麻帆良の者と接触したり見られる訳にはいかないのである。

スサノオは手引きするのを準備しようとしたのだが、フェイトはそれを断った。

スサノオは計画で忙しいのだから集中するようと言って断り、フェイト自身にも目的があったのでこの方法を選んだのであった。

フェイトが部隊が飛び去った方向に飛翔した時、

トトトトトトッ！！！！！

麻帆良に爆発音が連続して響いた。

「あれは・・・始まったね。なら、急がないと・・・」

友の計画が始まったことを確認したフェイトは部隊に向け、さらにスピードをあげて飛翔した。

「それじゃあ計画を始めようか、スサノオ」

世界樹の広場

カッ!!!

「ガンドルフィーニ！避ける！」

「クソッ！」

神多羅木の注意にガンドルフィーニは横っ飛びに飛んだ。

すると、ガンドルフィーニが避けた空間を高熱の火球が連続して通過した。

外れた火球はそのまま直進して壁にぶつかり爆発を起こした。

「どうした？避けてばかりじゃ私には勝てないぞ？」

火球を放ったスサノオは余裕タップリに自分を取り囲む魔法先生達に言った。

戦いが始まってまだ数分しか経っていないが、既に周囲にはスサノオに倒された先生達が大勢いた。

「しかし随分と私に戦力を集中させたな。学園は殆どカラッポじゃないか？」

今回のスサノオ阻止の作戦には学園側は戦力の半分を集中させて挑んでいた。

しかし、いざ蓋を開けてみると魔法先生はスサノオを止めるところか撃破されないように逃げ回ることしか出来なかった。

「ほらほら、速く逃げないと燃えてしまうぞ」

スサノオは手を変化させた口から火球を連射した。

「全員避ける！」

ガンドルフィーニは声をあげると大きく飛び退いた。

他の先生達もそれぞれ回避運動をとったが、スサノオが撃った火球の数は数十発以上。避けきれずに直撃する先生もいた。

「ぎゃああああ！！熱い熱い熱い！！！！」

火球を喰らった先生は地面に倒れ転げ回った。

「大丈夫か!?!」

一人の先生が仲間を心配して駆け寄った。

だが、それは隙でしかなかった。

「そら、もう一人追加だ」

スサノオは駆け寄った先生にも火球を連射し直撃させた。

「うああああ!ああああああ!!!」

燃え盛る火に身体を焼かれて苦しむ先生は気絶してしまい、その場に倒れた。

「やれやれ、根性がないな」

スサノオの言った台詞にガンドルフィーニはブチ切れた。

「くっ!貴様あ、スサノオ!!」

「なんだガンドルフィーニ?」

「よくもこんな事を!」

「こんな事?」

「貴様が行っているこの暴挙の事だ!」



ガンドルフィーニの言葉に同調する様に周囲の先生もスサノオを睨みつけた。

スサノオはそんな彼らに呆れたような視線を向けた。

「暴挙？これがか？」

「違うというのか！？学園を危機に晒し、学園を守る我々に牙を剥いている現在の状況が！！」

スサノオはその返答に笑いだした。

「ククク、ハハハハハハハハ！」

「なつ、何が可笑しい！？」

「クク、いや、あまりにも可笑しくてな。つい笑ってしまったんだ。悪いな」

スサノオは変わらず笑いながら彼らを見つめ直した。

「そうだなあ、よし！ガンドルフィーニ」

「なんだ！？」

スサノオは口元に笑みを浮かべながら、

「本当の牙を剥くという意味を教えてやるよ」

彼らにとって絶望の時間の始まりを告げた。

動き出した者達 吸血鬼編 後編 上(後書き)

いよいよ吸血鬼編も終わりに近付いてますね。

しばらくはこっちを集中的に書きたいですね。

・・・無理か？

まあ、今年も頑張っていけますのでどうぞよろしくお願いいたします。

遊びと友情 吸血鬼編 後編 中(前書き)

どうもお久しぶりです。

これ出すのに一ヶ月もかっちゃったよ。

もっと時間が欲しい！！

遊びと友情 吸血鬼編 後編 中

麻帆良学園停電の日

この日は光が消え、暗く闇が広がり何も見ることはできない。

しかし、もし今夜一般人が空を見上げれば幻想的な光景が見られただろう。

なぜなら複数の光の柱が麻帆良の夜空を色鮮やかに輝かせ、見る者全ての目を奪う程の美しさを出しているからだ。

光の柱は数秒、あるいは十秒以上現れては空を照らして消えるを繰り返していた。

その光景を戦慄しながら眺める者達がいた。

「学園長、あれは・・・」

「ウム、スサノオ殿じゃ。恐らくネギ君の居場所が分かったから遊びながら掃討に入ったのじゃろう」

「なら、他の先生達は・・・」

「このままではマズイのう。タカミチ君急ぐのじゃ！」

「はい、学園長！」

タカミチは咸卦法を発動し光の柱が昇っている地点へと急いだ。

「ネギ君の位置がばれた今スサノ才殿は一気に勝負を着けるはず・  
・狙うのは終わって油断している一瞬の隙だけじゃの」

学園長は光の柱が昇っている地点を見つめながら呟くと風に溶ける  
様に消え去った。

## 世界樹の広場

「下がれ！皆下がれ！」

「また来るぞ！避ける！」

「危なっ！」「がっ!？」「うわあああ!？」「い、嫌だ、ぎっ  
！」

今繰り広げられている光景を表すのに最適な言葉、それは地獄。地  
獄と呼ぶのに相応しい光景が広がっていた。スサノオが変化させた  
手の口の右手からはレーザーカノンにスプレッドカノン、左手から  
はウロヴオロスカノンにスベキユラーカノンが絶えず連射され、周  
囲を囲んでいる魔法先生達は光の柱の中に次々と飲み込まれていっ  
た。

「そら、どうした？早くかかって来たらどうだ？ほらほら」

「ぐっ、貴様あ!！」

スサノオの挑発に激昂した一人の魔法先生が無謀にもスサノオに接近した。

「待て！止めるんだ！」

近くにいた神多羅木が止めさせようとしたが間に合わず、その先生はスサノオに炎を纏わせた自身の杖で殴り掛かった。

「喰らえ！この化物があ！」

ドガツ！！！！

杖はスサノオの頭に直撃した。が、

「で？終わりか？」

「そつ、そんな！？」

スサノオには傷一つ、火傷さえ負わせることが出来なかった。

「面白くない奴だ。とつとと消えろ」

スサノオはその先生の身体を左手の口で挟むと頭上に掲げ、

「じゃあな」

至近距離からスベキユラーカノンを発射した。

「あああああああ！！！！」

挟まれた先生は断末魔の悲鳴をあげながら光に呑み込まれた。

光の柱の勢いが段々と収まり、完全に消えるとスサノオは掴んでいたその先生を投げ捨てた。

投げ捨てられた先生は全身に火傷を負い、身体の各所から煙があげながら気絶していた。

「ぐっ！スサノオ、貴様よくも！」

ガンドルフィーニは倒れた先生に駆け寄った。

「なんだ？ちゃんと生きてるだろ？」

スサノオは不思議そうな顔で問い返し、周りの倒れている先生を見渡した。

「それに他の奴らだって皆ちゃんと生きてるだろ？なら問題ないだろ」

「ふざけるな！！全身に火傷を負ってたり身体中の骨が折れているのを問題ないだと！？」

今や世界樹の広場には今回の作戦に参加した者の90%が負傷し倒れていた。

彼らはスサノオの砲撃に巻き込まれたり、接近しすぎて掴まり叩き付けられるなどされ行動不能にされていた。

しかし、不思議なことに死者は一人もでていなかった。



「私はお前達が苦しんでいる様を見るのが楽しいんだ。それなのに殺してしまつては意味がないだろ？だから言っているだろ？問題ないだろつて」

「きつ、貴様あゝ！！」

ガンドルフィーニは拳銃を撃ちながらスサノオに接近した。

そのまま肉追しナイフをスサノオの胸に突き刺した。本来、相手が普通の人間であればこの時点でガンドルフィーニの勝ちだった。

しかし相手はスサノオ。世界最強の魔獣とも呼ばれ、普通などといった領域から掛け離れた存在であった。

ガンドルフィーニはその事を十分に理解していた。

ガンドルフィーニはナイフを刺したまま、

「神多羅木先生！葛葉先生！」

バン！バン！バン！バン！バン！

拳銃に残っていた残弾を全て零距离で連射して後方に飛び離れた。

ガンドルフィーニがスサノオから離れた瞬間、

「ハア！」「ふん・・・」

神鳴流剣士 葛葉刀子の斬空閃、グラヒゲ先生こと神多羅木の指パ

ツチンによる斬撃の連射がスサノオを襲った。

「ほう、中々やるな」

スサノオは飛んできた斬撃に防御や避けるなど動くことなく笑いながら立っていた。

様々な攻撃を受けたスサノオの服はボロボロの状態になっていたが、スサノオの身体には傷一つ付いてはいなかった。

「クソツ！これでも駄目か！？」

攻撃が通じなかった事に対し悔しがるガンドルフィーニ達にスサノオは拍手を送りながら笑った。

「いや、流石学園でもトップの魔法先生達の連携技だった。中々効いたよ」

「・・・それは嫌味か？」

神多羅木が警戒しながら尋ねた。

「純粹に褒めてるんだから素直に受け取れよ。私の服をここまでボロボロにした者はそんなにいないからな」

「・・・」

三人はその言葉にカチンときたのか無言で武器を構えた。

再び連携攻撃しようと身構えた時、

「ただ、・・・」

一歩も動くことが出来ない程のプレッシャーが彼らにかかった。

「せっかく茶々丸が選んでくれた服をボロボロにしたのは許せない。それに時間も余りないからな。今日はもう終わりだ」

バキッ！！

何かが碎ける音が響いた。

「なにっ！？」

それはガンドルフィーニのナイフが碎け散り使い物に成らなくなった音だった。

しかしそれだけではなかった。

パキッ

「えっ？」

葛葉刀子の刀も同じく折れてしまったのである。

刀は折れ、折れた刃先が地面に刺さった。その時彼らは視線を刀に向けた。いや、向けてしまった。

視線が刀に集まった瞬間、スサノオは口元に笑みを浮かべながら巨大な口に変化した両手を三人に向けた。

注意が散漫になった時を見逃す程スサノオは優しくなかった。

「っ！？しまっ！」「があ！」

神多羅木、葛葉刀子両名は神速とも呼べる速さで接近したスサノオの手の口に挟まれた。

スサノオは二人を挟んだまま十メートル以上跳び上がった。

「それじゃあ、お疲れ様」

スサノオは二人を下に向けるとそのまま急降下し、

ズドンッ！！

地面に罅が入る勢いで叩き付けた。

更に、

カッ！！

そのままの体勢で零距离スベキュラーカノンをきめた。

爆風が周囲に撒き散らされた。

「くっ、二人は・・・」

爆風が収まり煙が消えるとそこには全身にダメージを負って気絶した二人がいた。

しかしスサノオの姿は何処にもなかった。

「なに！？いないだと？何処に行った？」

「此処だ」

ガシッ

「なっ！？」

スサノオは後ろからガンドルフィーニを挟み上げた。

「煙に紛れて後ろに回り込むだと！？」

「今日は楽しかったよ、ガンドルフィーニ。でも私はこの後用事が在ってね。悪いけど今日はここまでだよ」

「クソッ、なら一つだけ教える」

「なんだ？」

「何故、私を最後まで見逃し続けた。私を倒すことなどお前には簡単だろ？何故だ？」

「なんだその事か。単純な理由だ。私はお前の苦しむ顔が見たいからだ」

「なん、だと・・・」

「それに最後まで残しておけば私を倒せると下らない希望を持って  
お前は挑んでくるだろ？周りはそれに乗ってくる。私はそれを潰し  
て楽しめる。だからお前を最後まで残すんだよ。分かってもらえた  
かな？」

「スサノオ！！！！」

「今日はお疲れ様。また遊ぶ時は呼んでやるよ」

カツ！！

世界樹の広場に夜の静けさが戻った。

立っているのはスサノオ一人。他には誰も立つてはいなかった。

スサノオは用は済んだとばかりに広場に背を向け、エヴァとネギが  
移動している方向に向かって歩きだした。

グサツ！！

スサノオは歩くのを止めた。止めざるを得なかった。

なぜなら、スサノオの身体を一本の腕が貫通している為だった。

「な、に？」

スサノオは混乱した。何故どんな武器もどんな魔法も効かない自分の身体を腕が貫通しているのか理解出来ないからだ。

スサノオの動きが停まった瞬間、

ゴッ！！

スサノオの身体が後方の森に吹き飛ぶ程の威力がある拳圧が直撃した。

スサノオを貫いていた腕はいつの間にか消えていた。

吹き飛ばされながらスサノオは攻撃してきた相手が誰なのかが分かった。

「やはり貴様らが出て来るか。いいだろう、直ぐに終らせてやる！」

再び麻帆良の空を光が彩り始めた。

一方、フェイトは

「これは、マズイね・・・」

麻帆良の結界にギリギリ入る橋の近くに潜んでいた。

フェイトの視線の先には、同じ様に森に潜む暗殺部隊と徐々に橋に近付いてくる二つの光源が見えていた。光源の正体はエヴァとネギの戦闘の光だった。

それがどどん橋へと近付いて来ているため、フェイトは焦っていた。

このままだとエヴァが勝っても負けても部隊に襲われてしまう。

しかし今ここで部隊と戦いを始めると侵入が他の魔法関係者達にバシテ、スサノオの作戦に支障をきたしてしまう。

どうすれば問題なくいけるか。

フェイトが思考の海に沈んでいる間にも光は確実に近付いていた。

そしてフェイトは選択した。

自分が友であるスサノオの為に何をすべきか。

手に石の槍を掴んだフェイトは隠れている場所から飛び出し、部隊が隠れている場所に向かって疾走した。

部隊の一人が接近してくるフェイトに気付き、仲間を警戒を促そうと口を開けた。

その口に石の槍が突き刺さった。

その異変に他の者達も気付いた。しかしフェイトはひたすら彼らに



向かって駆けた。

「奴を殺せ！」

隊長が部隊に殺害命令を出した。その命令受け隊員達はフェイトに杖を向け魔法を放とうとした。

その内の一人隊員に背後から影がかかった。

「なんだ？」

隊員が振り向くと暗闇が広がっていた。そしてその暗闇がその隊員の見た最期の光景だった。

ガブリ

グシャッ！

隊員を背後から喰らった者、それは麻帆良を徘徊していたヴァジュラだった。

部隊はフェイトとヴァジュラに挟まれる形となった。

「お前達はその邪魔物を片付ける！化物は私がやる！」

隊長は残りの部下にフェイトの相手をさせ、自分はヴァジュラと相対した。

フェイトは眼前に身構えた隊員達を見渡し、そして告げた。

「悪いけど君達じゃあ役不足だよ」

フェイトは石の槍を前方に無言で構え、

「・・・行くよ」

突撃した。

遊びと友情 吸血鬼編 後編 中（後書き）

次で吸血鬼編はラスト！

終れば色々フラグが立ってる京都編だー！

頑張れ自分！

それではまた次回！

ちなみに、感想もらえたら更新速度が上がるかも・・・

いや、感想貰えると凄く作者のやる気上がるんですよ。本当に。

本気と決着 吸血鬼編 後編 下（前書き）

戻って来ましたー!!!

大分、いや、かなりの時間が空いてしまいました。

本当にすいませんでした！

本気と決着 吸血鬼編 後編 下

「うわあああああ！」

グシャッ！

「ふう、・・・これで最後だね」

フェイトは刺した相手の心臓から石槍を引き抜いた。

槍に貫かれていた隊員は物言わぬ死体となり地面に転がった。

フェイトの周囲には他にも頭を刺された者や胸を複数箇所貫かれた者、石にされた者といった暗殺部隊の死体が転がっていた。

「さて、残ったのは貴方だけだ・・・」

フェイトが振り向くと視線の先にはヴァジュラの首を切り落として倒した暗殺部隊の隊長がいた。

「貴様、いつたい何者だ！？私の部下をこつとも簡単に倒すとは・・・」

隊長はフェイトの周囲に散らばった部下の死体を一瞥したが、すぐに視線をフェイトに向けた。

「・・・」

フェイトは隊長の問いに答えず、無言で石槍を向けた。

それを受け、隊長も杖を構え戦闘態勢に入った。

だが、戦いは始まらなかった。

なぜなら二人は互いに武器を構えたまま動かずに、先に相手が動き出すのを待っていたからだった。

そのまま二人が動かないまま時が流れ、場を沈黙が支配し静寂が訪れた。

数十秒は経過したと思われた時、その場の沈黙を破ったのはフェイトだった。

突然構えていた石槍を下ろして隊長に背を向けたのだ。

その行動に疑問を持った隊長は警戒しながらフェイトに問いかけた。

「……一体何の真似だ？」

隊長の疑問にフェイトは背を向けたまま答えた。

「僕の友人の知り合いが貴方は自分の獲物だから手をだすなって言ってるんだよ……貴方の後ろでね」

それを聞いた瞬間、隊長は弾かれたように反転し構え直した。

だが、少し遅かった。

「ケケケ、遅イゼ」

ズバツ！！

「ゲウウウウウ！」

背後からチャチャゼロが巨大な鉈で隊長の左腕と掴んでいた杖を共に斬り落した。

「きつ、貴様あ！」

それでも反撃しようとして隊長は無詠唱で呪文を放とうとするが、

「甘エ نداヨ」

再び振りかぶった鉈が隊長の首を斬り飛ばした。

「ケケケ、久々ニ暴レラレテ楽シカッタゼ」

チャチャゼロは満足したのか血のついた鉈に頬擦りしていた。

「君がスサノオが言ってた案内役かい？」

「アン？」

チャチャゼロはフェイトに気付いた。

「アア、才前ガスサノオノ言ッテタ客力」

キーン！！

チャチャゼロは鉈に頬擦りするのを止めて、フェイトの方に振り向くと同時に鉈で斬り掛かった。

「……………これでいいのかな？」

フェイトは動揺することなく冷静にチャチャゼロの攻撃を石槍で防いだ。

「ケケケ、合格ダ。スサノオノ知り合イッテナラコレクライデキナキヤナ。ソレニオ前に御主人ノ呪イガ解ケルダケノ実力ガアルカ分カンネエカラナ」

チャチャゼロは鉈を下ろした。そして地面に降りると、

「サテ、サツサト行カネエトナ」

チャチャゼロは人型へと変化した。

「へえ、それが君の人型か」

変化が終わり、フェイトの目の前には茶々丸に似た小さい少女になったチャチャゼロが立っていた。

「それじゃあ案内を頼むよ。あの世界樹の下までね」

「……………」



チャチャゼロは無言で頷くと森の奥に歩き出した。

フェイトはその後に付いて森へと入って行った。

二人が去ってから数分後、オウガテイルの群れがこの場に現れた。

オウガテイルは周囲に散らばった死体、戦闘で壊れた木々等を欠片も残さずに食べ尽くすと撤収した。

そして、その場はまるで何も起きなかったかのような状況が残るだけだった。

後日、この騒動が終わった後に魔法先生達が麻帆良の被害調査に来たが戦闘があったような後が見付かる事はなかった。

因みに、これがスサノオの証拠隠滅方法の常套手段だったりするのであった。

一方、フェイトがチャチャゼロと合流した頃スサノオは、

「スサノオ殿！どうか止まって下さい！」

「スサノオさん！このままだと関係者以外の一般人にも被害が出て

「しみます！どうか落ち着いて下さい！」

「黙れ！私の腹に風穴を空けるといふ挑発行為をしてきたのはお前達だろうが！」

学園長とタカミチという麻帆良学園の最大戦力二人を相手に戦っていた。

「くっ！学園長、左です！！」

「むっ！」

ヒュッ！！

タカミチから警告を受け回避した学園長の顔の横をスサノオの放ったニードルが掠めた。

「チツ、外したか！」

戦いは圧倒的にスサノオが優位だった。

元々の強さやスサノオが怒り狂っていることもあるが他にも理由があった。

学園長とタカミチは当初の目的通り、スサノオの注意を自分達に何とか逸らす事に成功した。

そして結界復活までの時間を稼ごうとあまり攻撃せずに逃げていた。

しかし、スサノオは腹に穴を空けられた事が頭にきたらしく、周囲の

物を見境なしに破壊しながら二人を追撃した。

追撃は予想を超える程の激しさで、二人は本当に逃走することになったのであった。

「学園長、このままでは、っ！押し切られてしまいます！」

「分かつとる。しかし、今のスサノオ殿の身体に傷を付けるのは少し難しいのう」

二人はスサノオから放たれる攻撃を避けながら対処法を考えた。

「学園長、もう一度スサノオさんにダメージを与えられないんですか？」

「あれはスサノオ殿が油断していたから成功したのじゃ。それに、今のスサノオ殿にはいくら攻撃しても焼け石に水じゃよ」

学園長の言葉通り、今のスサノオはアラガミ細胞が活性化していて軽い傷はすぐに治ってしまう。

「なら、僕がスサノオさんを抑えます。その間に学園長が詠唱魔法を使うのはどうでしょうか？」

「確かにそれなら可能かもしれませんが・・・危険じゃぞ？」

タカミチは苦笑いを浮かべた。

「承知の上ですよ」

スサノオは腹を立てていた。

不意を突かれたこと。

エヴァの下に行けないこと。

フェイトを迎えに行けないこと。

自分にダメージを与えられる程の相手が逃げてばかりいること。

挙げつづけければキリがない。

だが、腹は煮え繰り返っていたが頭の方は冷静でいられた。

だから学園長とタカミチの狙いも読んでいた。

「アイツら・・・まだ逃げて時間を稼ぐか・・・」

彼らの狙いは学園の結界の復活。

そうすればエヴァが負ける可能性が高くなる。

そして時間は最早ほとんど残されていない。

「なりふり構ってはいられないな・・・そろそろ終わりにしようか」

ドンッ！！

そんな事を考えていたスサノオを後方へと吹き飛ばす程の強い衝撃が襲った。

「なるほど。そっちから来てくれるなら手間が省けるな」

スサノオは空中で体勢を整えると、向かってきた二発目の衝撃波を変化させた腕で防いだ。

スサノオが地面に降りると、狙ったかのように上から衝撃が再び襲い掛かった。

「スサノオさん、ここで貴方を止めます！」

タカミチは豪殺居合い拳を遠慮なしに打ち放ち続けた。

ドドドッ！！！！

タカミチの攻撃により周囲には大量のクレーターが作り上げられた。

まるで爆撃のような攻撃をスサノオは回避し、当たる物には両腕でガードしながらタカミチに徐々に接近した。

しかし反撃は一切しなかった。

ただ避け続け、防ぎ続け、ひたすらに接近してくるだけ。

タカミチにはその反撃をしてこないスサノオが不気味でしかたがなかった。

(スサノオさんは一体何を狙っているんだ？時間がかかるほど、我々に有利になるのに)

しかし手を緩める理由にはならない。

タカミチは今が好機と更に攻めにまわろうとした。

その時、

カツ！！！！

「なっ！？」

世界樹が光り輝いた。

「いったい何が！？」

あまりの異常事態にタカミチは完全に目を奪われた。

そして、それは致命的な行為だった。

「馬鹿め、私から目を離したな」

「しまっ！？」

タカミチにできた完全な隙をスサノオは見逃さず一瞬でタカミチの懐に飛び込むと、

ドゴッ！！！！

「ガッ!？」

カ一杯に打ち抜いた。

鳩尾にスサノオの強烈な一撃を喰らったタカミチはしばらくピクピクと痙攣していたが動かなくなった。

「ふん」

スサノオは気絶したタカミチをその場に捨てると、すぐに駆け出した。

一方、学園長は

「こ、これは!？結界の封印が破られる!？」

世界樹の謎の発光現象に驚くと共に、この現象が起こしている真の意味に恐れた。

「見つけたぞ、ジジイ」

その学園長の背後にスサノオが現れた。

学園長はゆっくりと振り向き、スサノオを睨みつけた。

「スサノ才殿・・・儂らを嵌めましたな？」

学園長に睨みつけられながらもスサノ才は全く怯まなかった。

「嵌めた？何の話だ？」

「惚けないで下さい！儂と約束したでしょう！？絶対に世界樹は使わないと！」

今回の騒動でスサノ才は計画を実行するにあたり、学園長とある約束をしていた。

それは世界樹を利用しないこと。

だが、スサノ才はその約束を破った。

「これは当然の罰だ。お前が私を騙そうとしたな」

「儂が！？そんな事はしていません！」

「よくもまあ、そんな事を言えるな。・・・結界の核・・・だったか？」

「っ！？何故それを！？」

「友人に詳しい奴がいてな、色々と教えて貰った。例えば、エヴァを学園に閉じ込めているのは学園結界じゃなくてナギの馬鹿力の魔力で架けられた呪いで、その軸にされているのが世界樹だとかな」

「そこまで知って・・・」



「まあ、学園結界も魔力を封じ込めているかな」

「・・・」

スサノオに全てを知られていた事に学園長は絶句した。

「さて、ぐだぐだと話すのは明日にでもして、今はとっとと退いて  
もらおうか」

話はこちらまでとスサノオは左腕を巨大な口へと変化させ、学園長に  
向けた。

スサノオが腕を向けた瞬間、学園長は一瞬の内にスサノオに肉薄す  
ると、

「はあっ!!!!」

スサノオの腹部に強烈な一撃を与えた。

「ぐっ!!」

スサノオの身体が地面から数センチ浮いた。

「まだです!!」

そこに追撃の手が入り、

「せいっ!!!!」

スサノオの顎に学園長の拳が炸裂した。

「がつ！」

更にスサノオの身体が舞い上がると学園長も空中に飛び上がり、

「契約に従い我に従え、炎の霸王。来たれ浄化の炎、燃え盛る大剣。ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を死の塵に。燃える天空！！」

ドツゴオオオン！！！！

空が爆発した。

燃え盛る炎は空を覆い隠し、巻き起こった熱波は地上の草木を焼いた。

ストツ

その燃え盛る空中の爆炎の中から学園長が飛び出し、地上に降りた。

「ハア、ハア、ゴホツ！ゴホツ！ムウ、年甲斐もなくはしゃぎ過ぎましたかな？」

咳き込みながら、学園長は未だに勢い衰えずに燃え盛る空を見上げた。

その炎の中からスサノオは未だに出て来なかった。

（ここで暫くスサノオ殿を止めていられば、ネギ君の方は何とか

なる。例え、エヴァの登校地獄の呪いが解けても学園結界が動けば魔力は封じられる。」

学園長がネギ達のことを考えていると、空の燃え盛る炎に異変が現れた。

炎の中に揺らめく巨大な影が出現したのだ。

その影に学園長もすぐに気が付いた。

「あれは……」

そしてソレは炎の中から飛び出した。

ズンッ！！

「ギャオオオオオ！！」

尾には不気味に発光する巨大な剣、両手には巨大な口を持った蠍のような生物。

これが鬼神型になった、本来の姿に戻ったスサノオの姿だった。

「……スサノオ殿、本気ですな」

「ギャオオオオオ！！」

まるで返答のようにスサノオは吠えると両手の口を学園長に向けた。

両手の口は構えられた途端に、中で不気味な紫色の光を灯した。

その光を目にした瞬間、学園長は大きく横に跳んだ。

学園長が横に跳んだコンマ数秒後、学園長の立っていた場所に紫色に発光する光弾が当たった。

当たったその場所は砲撃を受けたかの様に深く抉られ、爆発して吹き飛んでいた。

更に、避けた学園長を追うかの様に次々とスサノオから光弾が放たれた。

光弾は学園長の避けた軌跡を追尾して放たれ、地面に当たっては爆発して吹き飛んだ。

ガガガガガガッ！！

「グオオオオオ！」

スサノオから放たれる光弾は、ガトリングの様な圧倒的な連射力、砲撃の様な破壊力を持って学園長を追撃し続ける。

「又ウ！」

学園長は避けていたスピードを更に上げた。

が、それでもぎりぎりでの回避となっていた。

「グウウウ・・・」

突然、スサノオからの砲撃が止んだ。

このままでは当たらないと判断したスサノオは、砲撃を一旦止めたのだ。

「？」

スサノオの行動に学園長が疑問を抱いていると、再びスサノオは両手の口を学園長に構えなおした。

それを見て、再び避けようと学園長は身構えた。

再びスサノオの両手の口には光りが灯り、光弾が放たれた。

その瞬間、放たれた光弾は分裂した。

分裂した光弾は百を越える数となり、学園長に迫った。

その拡散した光弾が一斉に迫ってくる光景は、まるで光の壁が押し寄せるかのようにだった。

「なっ!？」

その壁が真っ直ぐと自分に迫ってくるのだ。学園長は慌てて避けようとした。

しかし複数の弾が発射され、それらが全て拡散したのだ。

避けようにも避けて逃げられる場所は無かった。

学園長は避けるのを諦め、全力で障壁に魔力を注いだ。

着弾。

ドオオオン！！

「ぬづうづう！」

学園長の障壁に一発が着弾した。予想以上の衝撃に障壁が激しく揺らいだ。

外れた他の光弾は学園長の後方へと飛んでいった。

「ふう・・・」

ドオオオン！

光弾の壁が過ぎ去り、一安心していた学園長に光弾が直撃し障壁が激しく揺れた。

「ゴフツ！？」

ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！

そこに追い撃ちとして連続で光弾が撃ち込まれた。

学園長が防御の為に動きを止めたのを、スサノオは見逃したりはしなかったのだ。

学園長が障壁で光弾の壁をやり過している間にスサノオは、拡散する様に撃ち出していた光弾をガトリングの様に撃ち出す方式へと変えたのだった。

動きを止めてしまった学園長は最早動くことが出来ず、ただの的になってしまうた。

そこにスサノオは一切の容赦無く撃ち続けた。

ガガガガガガッ！！

ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！  
ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！

ビキビキビキッ！！

ガガガガガガガガガガッ！！

ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！  
ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！  
ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！

ビキビキビキビキビキッ！！！！

スサノオの容赦無しの攻撃が次々に障壁に直撃し、遂に障壁全体に罅がはいった。

そして、

バリントッ！！！！

「ぬおおおおお！！！」

障壁は崩壊し、学園長に光弾が殺到した。

学園長に次々と光弾が着弾して爆発し、学園長の姿は淡い紫色の光の中に飲み込まれた。

光が収まると、地面には体中がボロボロとなった学園長が倒れていた。

「ゲフツ！！！！コホツ、ス、スサ・・・ノオ・・・殿・・・」

「何だ？」

傷つき倒れている学園長は息も切れぎれに、人型に戻り隣に立っているスサノオに話し掛けた。

「おね・・・が・・・いで・・・す・・・どう・・・か・・・ネギ・・・君・・・は」

「・・・そんなになってもククツ・・・相変わらずな奴だな、お前は」



瀕死の状態になっても自分の目的を、しかも自分を打ち倒した相手に頼んでまで達成しようとする学園長にスサノオも苦笑を隠せなかった。

「フオフオ・・・ゲホッ・人は・・・そうそう・変わ・・・れま・・・せんよ・・・」

「フウ・・・仕方ない。いいだろう、今回だけだ。たくつ、私も弟子には甘いな」

「あり・・・が・・・とうござ・・・いま・・・す・・・」

スサノオに頼むと学園長は気を失った。

学園長が気絶するとスサノオは、その場を立ち去った。

そしてスサノオは向かう。

エヴァの戦っている場所。

学園結界ギリギリの地点にある橋へ。

スサノオは橋に到着した。

スサノオは端の方でエヴァと茶々丸が戦っているのを確認し、近付こうとした。

ところがスサノオが駆け出したのと同時に学園結界が復活した。

すると、空中にいたエヴァが学園結界で魔力を封じられた為に落下を始めた。

スサノオは駆け抜ける速度を更に上げ、人の目では視認出来ない速度に達した。

そして勢いをつけ、跳び上がった。

跳んだスサノオは落下してきたエヴァを空中で捕まえて抱きしめた。

「なっ！？スサノオ！？」

突然現れたスサノオに助けられ、エヴァは驚愕した。

「な、なんで此処に！？」

「いいから私に捕まってる」

スサノオはエヴァをしっかりと抱きしめると背中にシユウの翼を生やした。

生やした翼でスサノオは滑空しながら、橋へと戻った。

スサノオとエヴァが橋に降り立つと、そこに茶々丸が慌てて駆け寄って来た。

「スサノオ様！マスター！こ無事ですか！？」

「大丈夫だ、問題ない」

スサノオは茶々丸にエヴァが怪我も無く無事なことを告げた。

「そうですか、良かったです」

それを聞き、茶々丸は安心した。

エヴァは未だにスサノオの腕の中で、突然スサノオが現れたことに混乱していた。

「は？え？なんでスサノオが？」

そんな会話をしている彼らに駆け寄ってくる者達がいた。

「エヴァンジェリンさん！大丈夫ですか！？あれ？貴方は？」

「エヴァちゃん大丈夫！？て、アンタ誰よ！？何でエヴァちゃん抱いてんの！？」

駆け寄ってきたネギと明日菜は、エヴァを抱いているスサノオに気づくと一気に質問した。

が、スサノオは

「・・・さて、エヴァ、茶々丸、帰るか」

思いつき無視した。

「あの・・・スサノオ様？」

「何だ、茶々丸？」

「ネギ先生と神楽坂さんが・・・」

「ん？」

スサノオは自分を見ている二人を一瞥すると

「・・・帰るぞ、茶々丸」

「つて、何でよ!？」

二人を相手にしないスサノオにいい加減キレた明日菜がツツコンだ。

「アンタ誰なのよ!?!? 何でエヴァちゃんを抱いてんのよ!?!? いい加減答えなさい!?!」

「あ、明日菜さん、落ち着いて下さい」

そんな明日菜をネギは必死に宥めようとしていた。

「・・・はあ・・・」

スサノオはそんな二人を疲れた感じの目で見つめ、

「・・・付き合ってたれん」

エヴァを左腕に抱くと右腕を二人に向かって構え、変化させた。

「はっ?」「えっ?」

カッ!!

変化した右腕から極太のレーザーカノンが発射され、ネギと明日菜は光に飲み込まれた。

「さあ、帰るぞ」

「「・・・」」

光が収まるとネギと明日菜は気絶していた。

「おい、スサノオ・・・やり過ぎじゃないか?」

「何処がだ?ジジイにも頼まれて気絶で済ましたんだぞ?うむ、問題ない」

「・・・まあ、いい・・・のか?」

「いいから帰るぞ」

「スサノオ様、ネギ先生と明日菜さんは?」

「後で他の奴らが回収するぞ」

スサノオはエヴァを両腕で抱きかかえると、茶々丸を連れて家への  
帰路へと着いた。

こうして麻帆良の長い、長い夜が終わりを迎えた。

帰る途中、

「ところでスサノオ様？」

「ん？何だ？」

「どうした、茶々丸？」

「マスターのその運びかたは世間一般で言うところのお姫様抱っこ  
ですよね？」

「そうだな」

「それがどうかしたか？」

「私にもして頂けませんか？」

「なにっ!？」

「いや、エヴァを降ろすわけにもいかんだろうっ?」

「構いません」

「待て待て待て待て!構えっ!」

「さあ、マスター。退いてください」

「嫌だ!退かんぞ!」

「ならば力付くで・・・」

「やってみるがいい!」

「・・・はあ」

後に、スサノオはフェイトに愚痴をこぼした。

「あれを終わらせるが一番疲れた・・・」

本気と決着 吸血鬼編 後編 下（後書き）

すみませんでした！

色々な私的な悲劇が続いてしまい、なんやかんやで時間が取られてしまいました。

かさねて、本当にすみませんでした。

後、近い内にこの吸血鬼編のエピローグを出しますのでお待ち下さい。



後始末と次のステップへ 吸血鬼編 エピローグ（前書き）

大分時間かかったけど、これにて吸血鬼編は終了。

## 後始末と次のステップへ 吸血鬼編 エピローグ

大停電の日の翌日

早朝のエヴァ家ではスサノオ、エヴァ、茶々丸がエヴァの部屋にいた。

そこでスサノオは昨日行った計画の結果について話した。

そのなかで、話がエヴァの呪いを解いた所までいくと、

「それで……うまくいったのか？」

「ああ、あの馬鹿がかけた呪いは破ることができたよ」

「じゃあ……」

「エヴァ、もう自由だよ」

その言葉を聞いた瞬間、

「う、うううう、スサノオ……!!」

感極まったエヴァはスサノオに抱き着いた。

「はいはい、分かったから落ち着ついて」

スサノオは泣きながら抱き着いてきた、エヴァの背中を優しく撫でた。

「うううう、だつて、ヒック、あの馬鹿の、ヒック、せいで、何処にも行けなかったのが、ヒック、やっと一緒に行けるんだもん」

エヴァは大泣きした。

誰だつて十五年間も同じ場所に閉じ込められるのは嫌である。さらに、同じ学生生活を5周もさせられてきたのだ。

それから解放されたとあつてエヴァは感情を抑えることが出来なかった。

「うううう、グス、うああああ！」

さらに激しく泣きだすエヴァをスサノオの反対側から茶々丸が抱きしめた。

「グス、茶々丸？」

挟まれたエヴァは茶々丸に顔を向けた。

そんなエヴァに茶々丸は優しく語りかけ、

「マスター、これからは一緒に街に出かけませんか？」

「え？」

「一緒に色々な物を見て、色々な物を買っんです。どうですか？」

今まで出来なかったことを一緒にやろうと言う茶々丸の言葉にエヴァは、

「う、うわああん！！茶々丸！！！」

今まで以上に感動して余計泣き出した。

「グス、もう大丈夫だ。話を続けよう」

しばらくして、ようやくエヴァが落ち着きを取り戻したので話し合いが再開した。未だに涙目だが。

「それで、今回来たという友人は何処に？」

「流石に何時までも此処にはいられないからな。もう帰ったよ」

「そうか・・・今度会ったら礼を言わないとな」

「そうだな」

話も一段落したので、一同は居間に移動した。

居間に移動すると茶々丸がお茶を運んできて配り、スサノオとエヴァは一息ついた。

居間には落ち着いた空気が流れた。

「ん？そういえばチャチャゼロは何処だ？」

ふと、エヴァが今まで忘れていたチャチャゼロの存在を思い出した。

「ああ、チャチャゼロなら今は京都だ」

「何！？」

事もなげに言ったスサノオにエヴァは驚いた。

「何故だ！？」

「京都の方でフェイトが仕事があるらしいから、その仕込みの手伝いにな。にしても、どうしたんだ？そんなに驚くことか？」

「京都だぞ！？私はまだ行った事が無いのに！なのにアイツは！」  
嫉妬に怒るエヴァをスサノオは宥めた。

「まあまあ、落ち着け。どうせ来週には修学旅行で行くことになってるんだからな」

「そうなのか？でも何でスサノオが知ってるんだ？」

エヴァはスサノオが知ってることに疑問を持った。

それにスサノオは口元に笑みを浮かべ、

「ん、まあいざれ分かることさ」

答えをはぐらかした。

「しかし京都か・・・そういえば京都にはスサノオの分裂した奴がいたな」

「ああ、話したっけ？ある湖の管理を任せているんだ」

「それに奴隷と女を増やすんだっただな？」

女という部分をことさら強調しながら強く睨みつけた。

エヴァだけでなくスサノオの背後に立っている茶々丸も、女の部分でジト目で見してきた。

「ま、まあな。後、奴隷じゃなくて一応弟子な。女に関しては・・・京都の奴が悪い。うん」

スサノオは睨まれたことに少し動揺しながらも弁解した。

「分裂した奴は確か常にお前とリンクしているはずだよな？だから分裂していてもお前自身だって以前説明してくれたよな？」

残念ながら弁解は認めてもらえなかった。逆に睨みに込められた力が倍増した。

「あゝ、ゴホン。ところで二人は学校に行かないのか？」

スサノオはこのままではマズイと思い、話題を変えた。

「あからさまに話しを変えたな・・・まあ、呪いも解けたんだし、いまさら行く気なんてないさ」

「そうか・・・まあ、別にいいだろう。それに久しぶりにゆっくり出来る時間もできたしな。どうだエヴァ？二人きりで出かけないか？」

「二人きり・・・つまりデート・・・」

「ああ。呪いも解けて学園の外にも出られるようになったしな」

スサノオの提案を大いに気に入ったエヴァは満面の笑顔を浮かべた。

「よし、行く」ダメです「へ？」

喜んで行くこととしていたエヴァは茶々丸の却下の言葉に固まった。

「マスター、お忘れですか？ネギ先生とお約束した事を」

「約束？」

エヴァの頭の上に？マークが浮かんだ。

「ネギ先生が勝負に勝ったら授業に出るとお約束なさいましたよね？」

「あ」

「エヴァ、お前そんな約束してたのか？」

スサノオは呆れたように頭を抱えた。

「い、いや、あ、あれは無効だ！結果的にスサノオが助けてくれたから負けではない！」

「でもマスター自身は落ちましたよね？」

「うっ！」

「よって却下です。ダメです。禁止です」

「なっ！」

「なにか反論でもありますか？」

「うっううう……」

茶々丸の正論攻撃に押されたエヴァは、先ほどとは別の意味の涙目となり、

「スサノオ〜」

スサノオに抱きつき助けを求めた。

「ま、まあまあ茶々丸も許してやる……う……」

「……」



スサノオはエヴァを弁護しようとしたが、茶々丸からの絶対零度の視線と無言の圧力に言葉を無くした。

その間に茶々丸はエヴァを連れていき、着替えさせると、

「さあ、マスター。行きますよ」

「ああ、スサノオ！」

引きずられる様に連れていかれた。

スサノオは何も言わず笑顔で手を振って送り出した。

場所は変わり学園長室

「タカミチ君！その資料を取ってくれ！」

「はい、どうぞ！学園長、広場の瓦礫はどうしますか！？」

部屋の中は荒れに荒れていた。

軽傷だった者達が昨日の戦闘の後始末に駆け回っていたのだ。

「タカミチ君！他に動ける魔法先生は！？」

「もう既に動ける者は全員動いています！」

現在、麻帆良学園ではスサノオとの戦いで魔法先生の大半が病院送りになり、動いている先生も皆怪我を応急処置して働いているのである。

そんな彼らの下に、

コンコン

「む、誰じゃ？」

ガチャ

「よお、ジジイにタカミチ。忙しそうだな」

スサノオが訪れた。

「ス、スサノオさん……」

「スサノオ殿……」

学園長とタカミチはスサノオの訪問に固まった。

そんな二人を無視してスサノオは歩を進め、学園長の机の上に座った。

そして懐から何かの紙を取り出すと学園長の前に置いた。

「その受理、よろしく」

「これは・・・確認しても？」

「構わんよ」

学園長は渡された紙を広げて読みはじめた。

その間スサノオは暇そうに部屋を見渡していた。

「スサノオさん・・・」

「ん？」

すると横からタカミチが声をかけた。

「一つだけ昨日の件で尋ねたいことがあります・・・」

「ん、何だ？」

「どうやってナギさんの呪いを解いたんですか！？あの世界樹の発光は何だったんですか！？」

「一つじゃなくて二つだな」

「っ！スサノオさん！！」

「ククク、まあじっくり自分で考えるんだな、タカミチ」

「スサノオさん！貴方が「何じゃと！？」学園長？」

タカミチの言葉を学園長の驚きの声が遮った。

タカミチが何事かを見ると学園長の手は震え、スサノオが持ってきた紙は机の上に置かれていた。

「学園長、どうかしたんですか？」

「・・・タカミチ君、この書類を読みたまえ・・・」

「書類？」

学園長はタカミチに紙を渡した。

タカミチが受けとって、まず目に飛び込んできたのが、その紙に太字で書かれている書類のタイトルだった。

それは、

『修学旅行許可証』

と書かれていた。

「修学旅行？一体誰の？」

「タカミチ君、名前の所を見るのじゃ」

「名前・・・なっ！？これは！？」

スサノオが持ってきた書類の正体、それは修学旅行に行く為の許可証だった。

そして修学旅行に参加する者の欄に書かれた名前。

そこには、

「何故エヴァの名前が!？」

エヴァの名前が書かれていた。

「何を言ってるんだ、タカミチ? 学生が参加するのは当たり前だろ?」

スサノオは『こいつ何当たり前の事言ってるんだ?』とでもいいいたげな視線を送った。

「むしろ今まで学校行事なのに参加出来なかった方がおかしいだろ?」

「た、確かに……ですがエヴァを学園の外に出すなんて事をしたら他の魔法先生達が黙っていませんよ!？」

「その辺の心配はいらないさ。なあ?」

スサノオは笑いながら学園長に言葉を投げ掛けた。

それに学園長は顔を苦しそうに歪めた。

「……昨日の戦いでエヴァやスサノオ殿を嫌って反対していた者達は全員病院送りになっておる……」

その答えにタカミチは愕然とし、スサノオは更に笑みを深めた。

「まあそういう事なんだよね、タカミチ君」

「で、ですが関西呪術協会がエヴァを受け入れてくれるはずがありませんよ!？」

なおもタカミチが食い下がった。

それにスサノオは、

「ククク、大丈夫だよ。向こうは絶対に受け入れるさ。絶対にな」

謎の自信に満ちた宣言を告げると机から降りてドアに向かった。

ドアノブに手を掛けた所で思い出したかの様に振り返り、

「それじゃあ、その書類の受理頼んだぞ」

言い放つと出て行った。

残された二人は、ただ閉められたドアを見つめる事しか出来なかった。

そして、この会話をしてから二日後に学園長が出した書類への関西呪術協会からの返答が返ってきた。

その返答により、エヴァの修学旅行行きが決定した。

## 21A教室

### 四時間目の授業中

教室の後ろの端にあり他の生徒からは見えない角度の席。

そこには疲れきった顔をしたエヴァが座っていた。

真面目に授業に取り組んでいるように見せているが、内心はさっさと終われとイライラしていた。

朝にはネギと明日菜がエヴァがいるのに気付き話し掛けようと近付いて来たが、騒がしい他の21A生徒達にネギ達が捕まったおかげで話し掛けられずに済むという事態も起きた。

その事に関してはエヴァは喜んだ。

しかし、授業中なのにエヴァの方をネギと明日菜がチラチラと何度も見てくることもあり、既に限界が近付いていた。

そして

「え〜と、じゃあ授業はここまでということだ・・・」

ガラッ！

タッタッタッ！

ネギが授業の終わりを告げた途端に教室からエヴァは飛び出した。教室を飛び出したエヴァは廊下を走った。

ひたすら走り、途中で教師の誰かが注意をしても人にぶつかっても走り続けた。

そして辿り着いた場所は喫茶店だった。

エヴァは喫茶店に入り椅子に座ると全体重を背もたれに預けて一息ついた。

「ハア・・・私は何をしているんだか」

溜息をつきながら朝からの出来事に頭を痛めた。

「クソ、大体茶々丸の奴が嫉妬したせいでこんな「私が何か、マスター？」うおっ！？茶々丸！？」

突然の茶々丸の出現にエヴァは跳びはねるほど驚いた。

「はいマスター、お呼びでしょうか？」

ジェットで飛行して現れた茶々丸は着陸するとエヴァの隣の席に座った。

「い、いや、お前こそどうしてここに」

「お昼ですのでマスターにお弁当をお持ちしました」



「あ、ああ、済まないな」

とりあえず昼食を取ることにした。

最初は二人共喋らずに無言だったが食べ終わる頃には、

「大体何なんだアイツらは！？何度も何度も私を見おつて！」

エヴァは溜まっていた鬱憤を爆発させた。

「そうですね」

「アイツらめ、絶対に凍り付けにしてやる！」

「そうですね」

「・・・茶々丸、お前もだぞ」

「・・・何故ですか？」

茶々丸は本当に不思議そうに首を傾げた。

「私にかけられた呪いは解けたというのに、あの小僧との約束などを  
持ち出しおつて！」

エヴァが激昂して叫んでいると、

「あつ、居た！エヴァンジェリンさーん！」

「あれ？茶々丸さんもいるじゃない」

その問題の二人がエヴァを探していたのか走り寄って来た。

「チツ、・・・何の用だ坊や？」

「あの、エヴァンジェリンさん、昨日の事について何ですけど・・・」

「

昨日の事と言われ、エヴァと茶々丸は瞬時にネギが何を聞きたいかを理解した。

「あの時・・・エヴァンジェリンさんが落ちた時に助けてくれて、僕と明日菜さんを「私とコイツをよく分からない攻撃で吹き飛ばした奴は誰よ!？」あ、明日菜さん、落ち着いて」

憤る明日菜を宥めるネギを横目で見ながら、エヴァは内心で舌打ちした。

『チツ、コイツらスサノオを探しているのか・・・まさか・・・』

「エヴァンジェリンさん、昨日の人の事を知りませんか？」

「・・・知ってお前はどつするんだ？」

「え？」

「お前達が探している奴を私は知っている」

「え、本当に？じゃあ・・・」

「だが、教える気はない」

「そんなあ!」「ちよつ、何だよ!?!」

愕然とする二人にエヴァはゆっくりと指を二本立てて向けると、

ビュッ!

ピタッ!

指先から氷の爪が生え、ネギと明日菜の首筋で止まった。

「エ、エヴァちゃん!?!」「エヴァンジェリンさん!?!一体何を!?!」

「黙れ」

エヴァの殺意混じりの睨みに二人は口を閉じた。

「いいか貴様ら、黙って聞け。これは警告だ。本来ならこんなことはしないが、お前達は昨日私に勝った。その報酬としてこれだけは教えてやる。もしもこの先、貴様らが昨日の奴を詮索するならば死ぬ覚悟を決めておけ」

「どう、いう、事ですか?」

「アイツは私のように優しくはない。自分に刃向かう者は全て滅ぼし、自分の物を守る為ならばどんな事でもする。そういう奴だ。そしてお前達は一度奴を怒らせている」

「えっ！？僕は昨日の人に会ったのはあの時だけですよ！？」「私  
はあんな奴知らないわよ！」

ネギ達の反論にエヴァはチラツと茶々丸を見たが視線を戻した。

茶々丸は何も言わずただ沈黙を貫いた。

「・・・とにかくだ、もしも次にアイツとお前達が出会ったら、そ  
の時がお前達の死の瞬間になることだけは確かだろう。だから二度  
と奴には関わるな」

語り終わるとエヴァは爪を消し去ると席を立ち上がった。それに伴  
って茶々丸も立ち上がった。

「もうこれ以上話すことはない」

「それでは失礼します、ネギ先生、神楽坂さん」

エヴァが身を翻して歩き出すと、茶々丸はネギ達に一礼してエヴァ  
に付き添った。

その光景をネギはしばらく動くことも出来ずに見ていたが、慌てて  
駆け寄ろうとした。

「ま、待って下さい、エヴァンジェリンさん！」

すると、歩いていたエヴァが途中で立ち止まった。

「そうそう、坊や。忘れていたよ。報酬のお前の父親のことだがな、

京都に手がかりがある」

「京都に……父さんの手がかり？」

ネギはエヴァからの情報に驚き立ち止まった。その間にエヴァは再び歩きだした。

「あっ、エヴァンジェリンさん！」

しかし今度はネギの呼びかけには応じずにエヴァと茶々丸は歩き去った。

しばらく二人で歩いているとエヴァが口を開いた。

「なあ、茶々丸？」

「はい、何でしょうかマスター？」

「……朝の件何だがな」

「はい」

「私もじっくり考えてな、そしてこの結論にたどり着いたよ」

「マスター？」

「……私は明日から学校には行かないことにした」

「……はい？」

後始末と次のステップへ 吸血鬼編 エピローグ（後書き）

・・・・・・・・吸血鬼編が終わった・・・

ようやく京都だー！

でも次回は日常のお話しの予定。

・・・まあ、頑張ろう！

それでは次回もよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2106/>

---

荒神な鬼神

2011年8月22日06時00分発行